

用したものとがある。ロクロを使用しないもの（5）はピット2底面上から出土したもので、口縁部約 $\frac{1}{3}$ の残存片のみである。残存部位が少ないため全器形が把えられないが、口径より器高が小さくなり、体部に最大径の位置があるものと見られる。しかし、その差は比較的小さくなるのではないかと考えられる。体部はやや丸味をもつ。口縁部は単純に丸味をもちらがら短く外反し、口唇部で丸くおさまる。器面調整は口縁部が内外とも横ナデ、体部外面が軽いヘラケズリである。内外面口縁部に煤状の附着がある。

6・7・8・9・10はロクロ使用によって製作されたもので、5個体出土している。やや小型のもの（6・7・8）と大型のもの（9・10）がある。8以外は体部下半、底部を欠き器形全体について不明の点もあるが、口径より器高が大きく、口縁部に最大径をもつものと考えられる。（10は体部に最大径があると思われる）ただ、その差は余り大きくない。6は口縁部が短く外反し、口唇部で内湾気味に上方へつまみ出している。7は体部上半が丸味が強く、口縁部とほぼ同じ最大径をもつ。口縁部は短く外反し、口唇部は上方につまみ出している。器面調整は、口縁部は内外面ともロクロナデ、体部外面上半は下方向へのヘラケズリ、体部内面は上半部がロクロナデ、下半に刷毛目痕が若干観察される。8は口縁部径20cm、底部径10cm、器高21cmで、口縁部径と器高がほぼ同じ大きさである。体部は直線的につくり出されている。器面調整は外面において口縁部がロクロナデ、体部上半が下方向へのヘラケズリ、内面においては体部上半から口縁部にかけてロクロナデ、体部上半から下半にかけては横方向の刷毛目が施されている。9は口縁部と体部上半の一部だけが残存しているものである。推定口径は20.5cmであり、口縁部は短く外反する。器面調整はロクロナデによって仕上げられているが、外面体部に一部ヘラケズリが観察される。10はロクロによって製作されたものであるが、口縁部に製作時のゆがみが見られる。底部を欠くが、口縁、体部が約 $\frac{1}{3}$ の残存があり、推定口径は21.5cmである。最大径は体部にあると見られる。体部はやや開くが、直線的である。口縁部はやや長く外反し、口唇部は上方につまみ出している。器面調整は、内外面ともロクロナデであり、外面体部上半から下方向にヘラケズリを施している。

土器器面の色調は7・8が明赤褐色（2.5YR $\frac{3}{8}$ ）、10が橙色（7.5YR $\frac{3}{8}$ ）である。

須恵器

甕（第36図、図版26-8）

カマド燃焼部および煙出し部から出土した。カマド燃焼部出土のものは土師器甕片と共に出土したものであるが火熱を受けた痕跡はない。煙出し部からは2片出土したが、いずれも燃焼部出土の角礫と同じ淡緑色砂質凝灰岩2個と共に出土したものである。36図-3は大型甕の体部下半部である。器厚は約6mm-10mmの薄手であり、灰色（5Y $\frac{5}{8}$ ）を呈する。器外面は平行叩き目、内面は指頭での圧痕が付されている。



第36図 B E 06住居跡出土須恵器断面拓影図

いが、ほぼ正方形である。長軸方向はN-15°-Eである。(N…座標北)

〔規模〕 大きさは、長(南北)軸3.5m、短(東西)軸3.3mで、床面積は約10.9m²である。

〔堆積土〕 遺構内の堆積土は基本的には1層のみである。

第1層(黒褐色土層)：粘土質シルト層である。基本土層IIの粘土を小ブロック状に含み、やや黄褐色の色調を呈する。土師器片を若干含む。

〔壁〕 地山を壁とし、残存壁高は5~10cmである。東壁は削平著しく、約5cm程の残存高である。西壁で10cm、南壁6cm、北壁10cmである。いずれも東・南壁の残存高が少なく、このこ

石製品

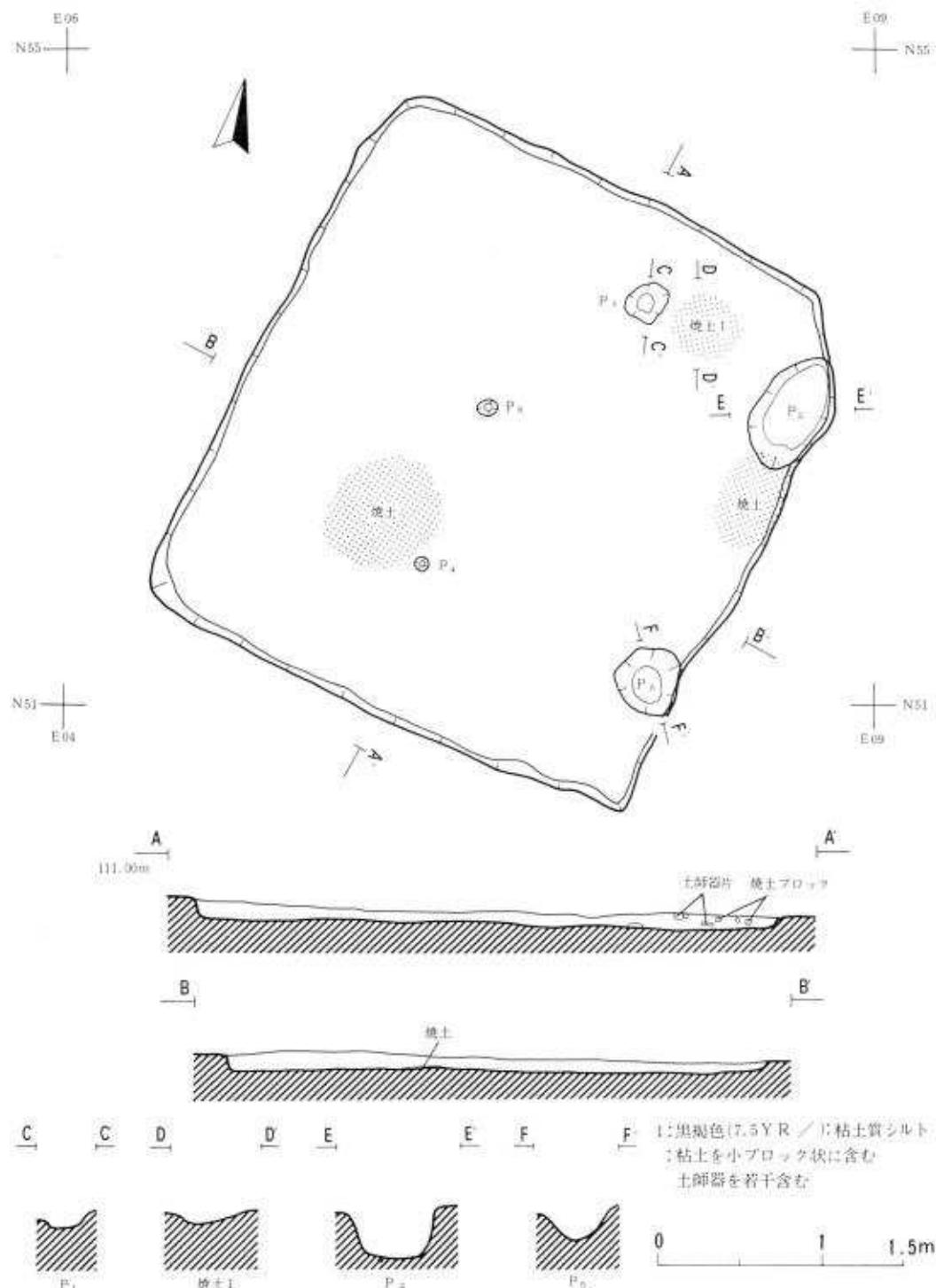
砥石(第35図、図版26-3) ピット3のやや北寄り、床面直上から出土した。粘板岩で、一端は折損しているため全長は不明であるが、現存値では長さ55mm、幅30mm、厚さ15~25mmの小形の仕上げ砥石である。表裏と両側面の4面を砥面とし、特に両側面は使い込まれカーブし中細になっている。

C C 53住居跡(第37図、図版19)

〔遺構の確認面〕 B E 06住居跡の南約18m、調査地域東寄りの果樹園C C 53グリッド周辺で確認された。確認面はB E 06住居跡と同じ黒褐色土層(I a層)を約30cm掘下げた火山灰質土(II層)である。

〔保存状況〕 検出面から床面までは約10cmのみで、特に住居跡東壁は5cm弱の残存だけであり、また埋土Iと地山層(II層)の火山灰質土が混在していたため、範囲の確認に多少の時間を要した。B E 06住居跡に比べ、保存状況は悪い。

〔平面形・長軸方向〕 南北にやや長



第37図 CC53住居跡平・断面図

白沢遺跡

とは、住居跡上の現地表面が西側地点（住居跡埋土断面B上）で標高約111.15mに対し、東側地点（住居跡埋土断面B'上）ではそれより約30cmも低い。これは果樹園として利用される以前に屋敷跡として使われ、その際の削平などによったものと推定される。

〔床面〕 床面は住居跡中央部で若干高くなるが、ほぼ平坦な面をなしている。焼土は北東コーナー、ピット2の南寄り、中央部よりやや南西寄りの3カ所に認められた。それぞれの範囲は40cm×45cm、35cm×60cm、70cm×70cmの椭円状である。焼土の厚さは2~3cmである。掘り方の有無確認のため、床面を一部掘り下げたがその形跡は認められなかった。

〔柱穴〕 住居跡内の床面から5個のピットが確認された。各ピットの規模は次のとおりである。

第17表 C C53住居跡ピット計測表

規格	ピット	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
検出面(cm)		30×20	73×45	13×10	9×10	44×40
深さ(cm)		10	33	5	6	15

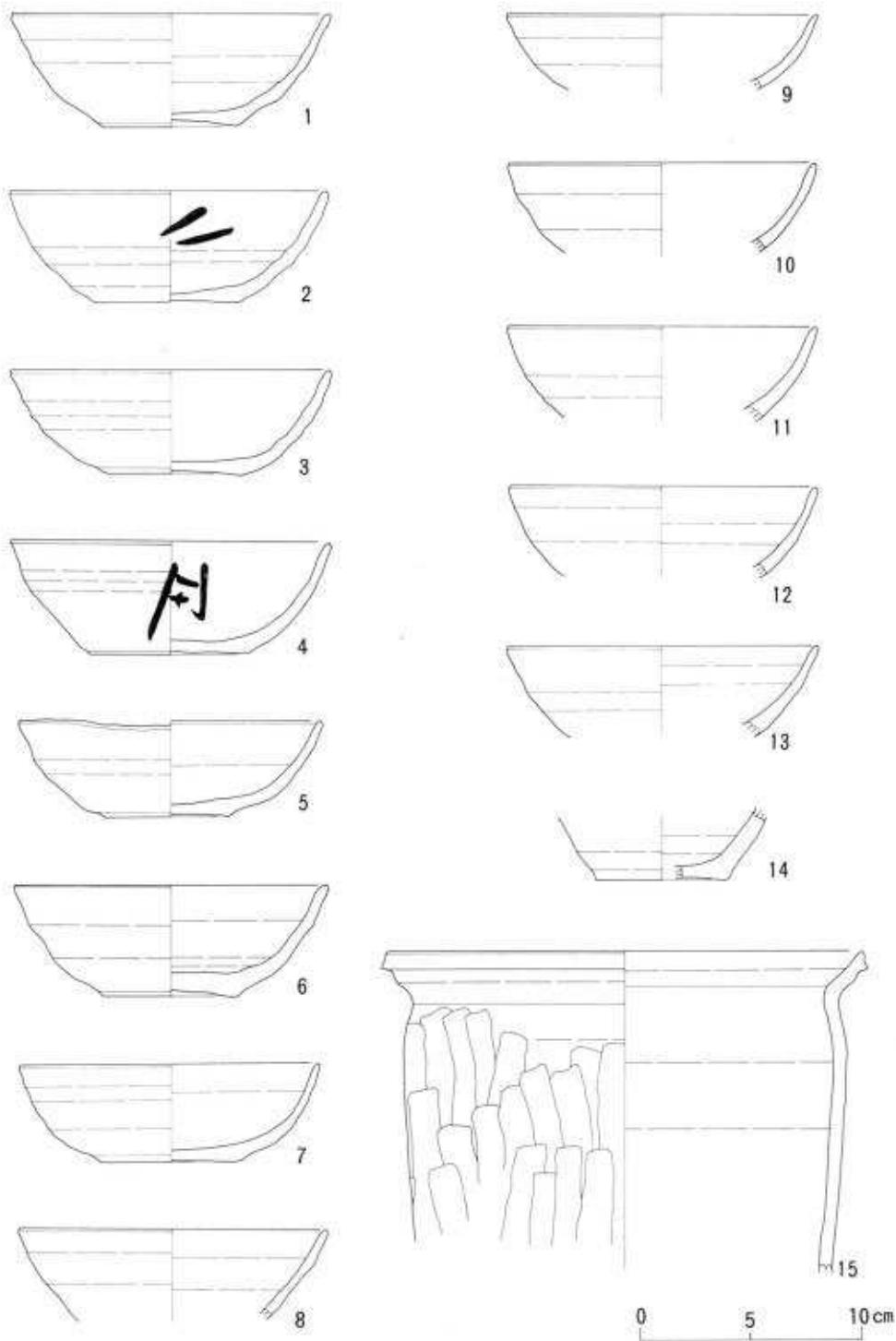
P 1は住居跡北寄りに検出された。焼土、炭化片等もなく、不整形の浅いピットである。P 2は東壁中央よりやや北寄りの地点に検出されたもので、椭円状のピットである。埋土は焼土灰、炭化片など混じった黒褐色土で若干、粘性のある柔らかい土である。ピット中から土器の出土も多く、完形の土師器壺など復元可能のものを含めて6個体、また土師器壺片なども多数出土した。P 3、P 4は大きさ、深さともその数値が小さい。P 5は東壁中央よりやや南寄りの壁に接している。深さは15cmで埋土中に焼土片を若干混入する。

これら5個のピットの規模、配列からそれぞれの性格を考えてみると、P 3・P 4は住居に伴うものとは考えられない。P 1、P 5は柱穴痕とも考えられるが、深さにおいて若干の疑問がある。P 2は土器の出土状況からみて貯蔵穴状のものと思われる。

〔カマド〕 焼土の分布が認められた以外はカマド部、煙出し部、煙道部とも検出されなかった。ただ、東壁の削平状態からみて、ピット2の周辺に認められた焼土がカマドに伴うものとの可能性も考えられる。

〔貯蔵穴〕 貯蔵穴と思われるピットとしてP 2がある。P 2の位置、埋土状況、遺物出土状況については前述したが、住居埋土とピット埋土とは同質のものであることから、住居の廃絶直前まで使用されていたことを示している。

〔出土遺物〕 (第38・39図、図版20・27) 遺物は住居のほぼ全域から出土しているが、特にピット2から多量の出土をみた。層位的には住居内埋土第1層に該当する。



第38図 C C53住居跡出土遺物

白沢遺跡

器種では土師器壺・甕、須恵器壺、砥石がある。

土師器

壺（第38図1-13、図版27-1~6、8） 22個体分出土したが、うち完形、復元可能のものは5個体である。いずれも製作に際してロクロを使用したもので、器面にロクロナデ痕が観察される。

以下、図化したものを中心に記述する。

器形はほぼ同じ様相を示しているが、個々の部分については若干の相違はある。

口径、底径、器高はそれぞれ下表のようである。

第18表 CC53住居跡出土土器計測表 (cm)

項目	1	2	3	4	5	6	7
口径	14.4	14.5	14.4	14.5	13.7	14.2	13.5
底径	6.0	6.5	6.2	7.1	5.5	6.0	6.2
器高	5.0	5.0	4.7	5.1	4.3	5.0	4.4
色調	浅黄橙 7.5YR 5%	淡 橙 7.5YR 5%	にぶい橙 5YR 5%	淡 橙 7.5YR 5%	浅黄橙 7.5YR 5%	にぶい橙 7.5YR 5%	-

1-6はいずれもピット2出土のものである。1、2、3、4、6は口径がほぼ同じ数値を示し、底径、器高においても数値的に同じ傾向を示している。体部は丸味をもって外傾し、底部は平底で、下面にロクロ回転（右回り）系切り痕を残している。器面調整は内外面とも全面的にロクロ調整痕がみられる。また器面の色調は浅黄橙～にぶい橙色を呈する。5は胎土に砂粒が多く含まれ、器形全体にゆがみがあり、また、かなりもろい焼成である。6は比較的厚い底部を有し、外面にスス状のものが付着している。2と4の体部には墨書痕が認められる。2は「二」、4は「月」とも判読できるが不明である。8-13は口縁～体部片である。8は体部から口縁部まで直線的に外傾する。口唇部はやや内湾しながら丸くおさまる。9-13は体部から口縁部までゆるやかな丸味をもって外傾し口縁部から口唇部にかけてしだいにうすくなる。器面の調整はロクロによるものである。色調は浅黄橙～にぶい橙色を呈する。底部は不明である。9、13はピット2内からの出土であり、他は焼土附近からの出土である。なお、内黒、内外黒のいわゆる黒色処理をした壺片も床面上から出土した。

甕（第38図14・15、図版27-7） 図示できたものは2個体であるが、小破片も含めると10数片になる。いずれもロクロ使用によるものである。14は小型甕の体部下端～底部片である。静止系切りによって底部を切離し、体部はやや丸味をもちながら外傾する。器面の色調はにぶい橙色（7.5 YR 5%）を呈し、硬質の焼成である。底部の推定径は5.9cmである。15は比較的大型の甕である。口縁～体部の約1/3の残存だけであり、底部については不明であるが、推定口縁

部径は22.0cmで最大径は口縁部に位置する。口縁部は短く外傾し、口唇部は平面をなしてそのままおさまる。

体部は上部外面に下方向への軽いヘラケズリが施され、直線的な立ち上がりを示している。胎土は砂粒が多く、ややザラつく。器面は橙色(5YR 7/6)を呈する。出土位置は住居跡中央部の床面上である。

須恵器

小片2のみ出土した。共に环片である。

砥石 (第39図、図版27-4)

住居跡中央部のやや西寄り床面上より1点出土した。棒状の長方体で、小型である。両先端を除く4面に砥磨面がみられ、特に表面はかなり使用されたらしく、だいぶくぼんでいる。細い溝が数条走る。石材は斜長石流紋岩である。仕上げ用のものであろう。



第39図
砥石実測図(C C53住居跡)

層	土色	土性	その他
1	黒褐色(7.5YR 5/2)	シルト質土	クロボク質土で構成される
2	黒褐色(7.5YR 5/2)	シルト質土	火山灰質土と褐褐色土との混土
3	黒褐色(7.5YR 5/2)	シルト質土	ブロック状に火山灰質土が入るが黒味が強い
4	黒褐色土(7.5YR 5/2)	シルト質粘土	細粒状の黄褐色火山灰質土を含み、粘性がある
5	に赤い黄褐色土(10YR 5/2)	シルト質粘土	粘土質ブロックを多く含むものとシルト質土の混土。一部に遺物を含むうに注記同じであるが、火山灰質土が若干多く入る
6	褐褐色(7.5YR 5/2)	シルト質粘土	粘性ある火山灰質土と白色の粘性ブロックが入り込んでいる
7	暗褐色(10YR 5/2)	粘土質シルト	クロボクで構成され、柔らかい
8	黒褐色(7.5YR 5/2)	シルト質土	

第7図 (P 269) 土層注記

第11図 (P 272) 土層注記

層	土色	土性	その他
1	黒褐色(7.5YR 5/2)	シルト質土	クロボクで構成され、柔らかい土質
2, 2'	に赤い黄褐色(10YR 5/2)	粘土	黄白色～に赤い黄褐色を呈し、ブロック状になっている。攪乱土
3	黒褐色(10YR 5/2)	シルト質土	クロボク質土が多く、若干の細粒状の火山灰質土が入る
4	暗褐色(7.5YR 5/2)	シルト質土	黒味がやや強く、火山灰質土が全体に混じる
5	褐色(10YR 5/2)	シルト質土	黒色土と火山灰質土がほぼ均等に混じった土層、しまりがある
6	に赤い褐色(7.5YR 5/2)	シルト質土	火山灰質土に黒色土が入る。部分的に黒色が強い。ボサボサする
7	黒褐色(7.5YR 5/2)	シルト質土	黒色土の中に火山灰質土が小ブロック状に入る
8	黒褐色(10YR 5/2)	シルト質土	黒色が強く、火山灰質土がちらつく程度、柔らかい土質
9	黒褐色(7.5YR 5/2)	シルト質土	火山灰質土と黒色土が混じった層。若干白色粘土ブロックを含む
10	黒褐色(10YR 5/2)	シルト質粘土	火山灰質土に黒色土が多く混入する。ベトつきが強い
11	に赤い黄褐色(10YR 5/2)	粘土質シルト	火山灰質土に黒色土が若干混じる
12	淡黄色(2.5Y 5/2)	シルト質粘土	粒子がこまかく、粘性が強いブロック(大)を多く含む

IV. 考察

本遺跡で発見された遺構と遺物は以上のとおりであるが、以下、遺構と遺物について考察を加え、まとめてみたい。

[1] 土壙と出土遺物

土壙は円形土壙6基、溝状土壙6基が検出された。

最近、土壙についての報告例が相次いで出され、その性格づけについて地理的環境、遺跡における土壙のあり方、土壙の形態と覆土の堆積状態、伴出遺物などから究明されている。各地における分布は中部・関東以北、特に東北・北海道地方において数多くの報告例があり、本県においても昭和47年以降の東北自動車道、東北新幹線関連遺跡、その他多くの公共事業関連遺跡の発掘調査によって発見例が増し、その類例について種々検討がなされている。

この中で、円形土壙、溝状土壙についての名称については平面の形状から付したもののがより一般的であると思われ、本遺跡でもそれに準じて記述したい。以下、地理的環境、土壙の分布と方向性、土壙の平面形、埋土の状況、出土遺物、時期等について述べてみたい。

a. 地理的環境

本遺跡の中で土壙が発見された位置は標高約111.00mの比較的広く開けた低位段丘面の東端にあたり、更に北180m地点も段丘の縁辺部になる。また、西からの小河川による低湿地も見られる。したがって他の多くの遺跡で見られるような山地、丘陵に立地するものというよりは、むしろ低位の舌状台地的なところであり、小河川ないしは水流のある流域にそった位置ということができる。また、周囲は若干比高差はあるものの広い平坦面をみわたすことができるところもある。こうした地理的な面を考えると、本県では、東北自動車道関連遺跡である岩手郡滝沢村高柳遺跡、紫波郡都南村湯沢A・B遺跡など比較的標高の低い、丘陵性台地や段丘周縁部の平坦面から発見されることが多く、しかもこれら遺跡の近接地には小河川が見られることが指摘できる。こうしたことから、これら土壙の発見される地形は、一つには水の存在(流水、湧水など)する場所であることが一般的にいえると考えられる。

b. 土壙の分布と方向性

本遺跡における土壙のうち、溝状土壙は 6 基のみであるが、いずれも微高地の北側にまとまり、しかも長軸の方向はほぼ同一の方向をとっている。すなわち、長軸は南北方向であり、東段丘縁辺部に対してほぼ平行する方向にある。

なお、円形土壙と溝状土壙との分布上の違いは特に見られない。

c. 土壙の平面形、埋土の状況

円形土壙：6 基検出されたが、HD50土壙と HG50土壙の 2 基は開壙部、壙底部、断面の各形状、および平面、深さなどの規模においても類似しており、また埋土状況にも自然堆積と考えられる土層状況になっている。特に HD50土壙においては土壙周縁部の崩落土の堆積状況が明瞭に観察でき、開壙部、特に中位のふくらみ部が早く崩れることを物語っている。また、埋土の中に白色粘土の小ブロックが混入していたことは、土壙を作った際の底部の掘込み部分の粘土を土壙周辺に置いたものが、崩壊過程の中で再び土壙の中に入ったものと考えられる。いずれ、これら円形土壙のうちでも、フラスコ状のものは短かい日時のうちにほとんど原形をとどめないようになることが今までの調査後の観察でも経験していることである。特に冬期間においてはその崩落が早く、秋の調査時点で完掘していたフラスコ状土壙は、翌年の春には既にかなりの崩壊が見られた。地形、地質にも影響されることは十分考えられるが、土壙等の崩壊埋没は割合短かい日時のうちに進むものようである。

HD50土壙、HG50土壙以外の土壙については、平面形、深さに差異があり、同一性のものとは考えられない。ただ、HG03土壙は平面形がやや円形であり、規模も前述の 2 土壙より若干小さい程度であることから、円形土壙構築の過程のものであったことも予想される。

溝状土壙：いずれも南北両端が丸くふくらみ、底部は溝状を呈し、平坦なものである。両端の壁は内側に抉り込まれるものもあるが、概して底部から垂直に立ち上がる。それに対して、長軸の壁は溝状の狭い底部から傾斜をなして立ち上がり、壁中位で大きくふくらみをもって開壙部に向けて開く。いわゆる V 字状の断面を示す。しかし、GJ53土壙、GJ50土壙は、底部からの壁立ち上がりはむしろ垂直であり、開壙部近くで大きく開く形狀を示す。深さは GJ50 土壙を除き検出面より 90cm 以上であり、特に GH53 土壙は 130cm を測る。埋土は火山灰質や粘土ブロックを含むものがレンズ状の堆積を示し、各層間に黒色土も入り込んでいる。しかし、各土壙間の埋土の状況に若干の差異があることも指摘できる。即ち、堆積土の層厚、層序など

白沢遺跡

である。これは短期間であれ、時期を異なって構築した可能性もあり、また、自然条件による差ということもいえるのかもしれない。ただ、相互に切り合った状態で存在しているものがないため、即断することはできないが、自然的な埋土状況であることは確かであろう。なお、これらの土壙は各地で検出されている溝状土壙と形状、埋土の状況に差異は認められないが、特徴的なこととして、小範囲の中に6基もの土壙が構築されていることであろう。

d. 出土遺物（図版21-4）

遺物はいずれも縄文土器片である。出土土壙はHG03、HG50、HG53、HH50の各円形土壙、GG56溝状土壙であるが、HG53土壙出土以外のものは埋土中からのものである。HG50土壙出土のものは埋土下層からのものであり、土壙使用時ないしは、あまり隔らない時期のものとして把えることができると思われる。また、HH50土壙出土の遺物も埋土下層からのものであることから、ほぼ土壙に伴う土器として考えることができる。以上の2土壙出土の土器は縄文・早期末～前期初頭にかけてのものと考えられることから、上記円形土壙もその近い時期に相当すると考えたい。

次に、溝状土壙出土遺物はGG56土壙からのみ出土した。出土層は埋土中・上層である。縄文土器片4片で、いずれも深鉢型土器の胴部片である。縄文前期初頭のものであろう。ただ、土器の時期をそのまま土壙使用の時期に当てはめることはできない。最近、円形土壙内から人骨の出土例（昭54・岩手県二戸市、上里遺跡）などもあり、今後の調査例の増加と共にその性格、時期についてより明らかにされるであろう。

e. 土壙の時期

以上の遺物出土状況によって土壙の使用時期を推定すると、ほぼ縄文前期に近い時期のものとみることができる。

ただ、円形土壙と溝状土壙は切り合った状態で検出されていないことなどから、その前後関係までは不明である。

以上、土壙の立地、形態、埋土、遺物などから考えると、現在、各地の報告例で考察されているように、その用途は「貯蔵」、「墓壙」、「陥し穴」説などがあるが、本遺跡の場合は「陥し穴」として機能されたものと考えたい。それは本遺跡の円形土壙のうちHG50土壙のように底部に小円形ピットの掘り込みがあることは他の報告例にもあり、それが獲物捕かく用の棒状

の杭を突き刺した痕跡とも考えられている。こうした事例からみても、本遺跡の円形土壙のうちHD50、HG50土壙は陥し穴としてのものであり、また、6基の溝状土壙も陥し穴として考えることができよう。

(2) 円形周辺と出土遺物

(1) 円形周辺について

本遺跡南側高地上に4基の円形周辺が検出されたが、以下、若干の点について考察し、問題点を記してみたい。

(周辺の形状)

検出された円形周辺はGJ03、HC03、HH03、HI50の各周辺である。これらの周辺に共通することは、いずれも完全な円形を廻らせず、南側が開く、いわばU字形的（馬蹄形との表現もされている）な周辺を構築している点である。周辺の南側が切れ、馬蹄形状を呈するものとして金ヶ崎町・道場古墳の第2号、第3号、第4号の各古墳に伴う周辺、更に、江釣子村・五条丸古墳の周辺において認められるところである。

古墳に伴う周辺としては、第21表にまとめているように各地の古墳で確認されている。岩手県内においては、和賀郡江釣子村五条丸古墳、盛岡市上太田・蝦夷森古墳、金ヶ崎町西根道場古墳、和賀町長沼古墳などがあり、いずれもU字形的（馬蹄形）な周辺が検出されている。

また、古墳とは確認されないものの円形周辺が検出された例として、東北縦貫自動車道関連遺跡として調査された紫波郡矢巾町湯沢B遺跡がある。この湯沢B遺跡の円形周辺も東南が開く馬蹄形状のものであるが、若干隅丸方形的な形状も呈している。

^(注1) 県外の知見する例として埼玉県寺山遺跡がある。本遺跡の周辺同様、南側が開くU字形的な円形周辺である。

次に、これら周辺の規模を比較してみると、全周の検出例が少ないくらいはあるが、直径8~12mで、ほぼ10m前後の規模である。白沢遺跡の各周辺の規模と各遺跡の周辺とを比較した結果は第19表のようである。

第19表 周辺規模比較表（馬蹄形周辺の一部）

遺跡	白沢遺跡				長沼遺跡		道場遺跡			五条丸遺跡			狄森遺跡 (矢巾町)		寺山遺跡 (埼玉)	
	GJ03	HC03	HH03	HI50	第9号墳	第10号墳	第2号墳	第3号墳	第4号墳	第19号墳	第21号墳	第24号墳	第3号墳	第3号墳	第4号墳	
外径m	8.0	12.0	12.0	12.0	11.5	9.2	11.0	9.7	9.8	9.3	11.4	8.4	13	33	28	
深さcm	5~10	50	40	30	45	20	35	30	28	?	130	?	95	30~50	30~80	

白沢遺跡

(墳形)

検出された円形周溝は墳丘を伴なったものか否かについては、調査時点において既に地表が削平されていたことから不明である。しかし、以下の状況から墳丘は構築されていたものと推定できる。

第1に周溝埋土中から出土した縄文土器片、石器片等の多くは埋土第4・5層から出土することである。しかも、この埋土4・5層は周溝内でも特に内径側に厚く堆積し、傾斜をもつた堆積となっていることである。これは、周溝内側に周溝を掘り下げた土を盛り上げ、それが次第に流れ落ちて堆積した状況を示すものであり、縄文土器、石器等も掘り上げられた土に入り込んでいたため、盛土と共に流れ落ち、周溝内に堆積したものと推定されるのである。

第2に本遺跡の出土遺物と同様のガラス玉、土師器壺を出土した浮島古墳、近接地に位置する、狹森古墳、および岩手県内の円形周溝を伴う古墳などは全て墳丘を有することがあげられる。ただ、墳丘の高さについては、それぞれ規模に差があることから、本遺跡の周溝に伴う墳丘の規模を一様に示すことはできない。しかし、元治元年(1864)の古絵図等にも塚状のものが画かれていないことから、特に目立つような規模の墳丘があったとは思われず、むしろ、地元の古老が話すように雑木林の中に小規模な円墳の墳丘があつただけなのかもしれない。

(主体部)

— 主体部の性格 —

主体部はGJ03円形周溝に伴うものとして1基確認されただけである。主体部埋土中からは前述のようなガラス小玉、鉄片などが出土したほか、床面直上の土壤中から周辺土壤中より高いリン酸の検出があった。このことから主体部は墓壙としての性格がより明らかとなった。

— 埋葬方法 —

主体部の中央よりやや南寄りの地点からガラス小玉が240個出土したが、埋葬に当って頭部をどの位置にしたかを知る一つの手がかりとなり得る。本出土品の出土位置からみて、頭部は南方にした可能性がある。このことは、例えば岩手郡西根村の谷助平古墳第1号墳をあげることができる。同古墳でも頭部を南方にし、その先に土師器壺を埋葬したことが報告されている。また、ガラス小玉を出土した岩手町浮島古墳では主体部床面のほぼ中央部から出土している例もあり、特に一定した出土位置はない。床面直上からは木炭片などの出土は認められなかったが、主体部の形状から土葬の可能性がある。

— 主体部の長軸 —

主体部の長軸方向は座標北より西へ35°振れている。一例のみであり、即断できないが、長軸

方向に一致して岩手山（2041m）が望まれることは偶然のことであろうか。ちなみに浮島古墳の各主体部の長軸方向（「浮島古墳」報告書では主軸と表現）を検討してみると、各々の方向は一定してはいないが、全て磁北より西方向に偏っている。角度からみるとN-36°-W（4号墳）、N-51°-W（9号墳）、N-41°-W（11号墳）、N-58°-W（15号墳）であり、全て磁北より西に振れ、その角度は平均45°である。この長軸方向には北西9.5kmに飼沢山（509m）、近くは東南2kmに送仙山（472m）が位置する。古代の信仰として山の存在を考える時、白沢遺跡、浮島遺跡の埋葬のあり方に共通性を見出すことはできないだろうか。他の類例と比較検討の機会を待ちたい。

— 主体部の形状 —

主体部の形状は底部で長軸1.9m、短軸0.6m、検出面からの深さ約25cmで、底部に深さ20~30cmの周溝がまわる。底部はほぼ平坦な面をなしている。これらのことから、主体部は地山面を掘り込み、さらに周溝を巡らしただけのものであろう。

一般的に県内の古墳においては川原石等を用い、石室を構築した内部構造を有するものが多く見られる。この場合、石室の残存部が検出されたり、また、川原石等の散乱が認められるのであるが、本遺跡の場合、これらの川原石等は見当らず、また、石室を構築したと思われる痕跡も認めることはできなかった。したがって、本主体部の場合は、石室や葺石を有したものではなく、いわば、長方形状の墓壙を造り、その上に土盛りしただけのものと考えたい。これは岩手町浮島古墳にもみられる例である。

なお、主体部の周溝は、土溜めのための側板を設けたものと推定される。

— 主体部の位置 —

主体部はGJ03円形周溝の内側中央部に検出されたが、他のHC03、HH03、H150周溝では精査したが、主体部は検出されなかった。主体部が旧地表面上に直接おかれた例として、本県では昭和34年調査された金ヶ崎町西根縦街道古墳・^(注4)第2号墳がある。本主体部の場合、確証はないが、既に削平された墳丘内に埋葬されたものであろうか。他の類例の報告を待ちたい。

(土師器壺)

(2) 出土遺物について

円形周溝および主体部に伴う遺物として、HH03周溝から土師器長頸壺、H150周溝から土師器壺、管玉、GJ03主体部からガラス小玉類、鉄片等が出土した。

計測値については既に述べたとおりであるが、肩部に段があり、球胴形を呈する。外面は頸部横ナデ、胴部は割合密なヘラミガキが施され、光沢を有する器面になっている。この胴部に脇らみのある土師器壺は、前述の浮島古墳出土のものをはじめ、最近の出土例としては、東北

白沢遺跡

縦貫自動車道関連遺跡として調査された和賀郡江釣子村の猫谷地遺跡、水沢市今泉遺跡がある。猫谷地遺跡では J G 06 住居跡出土の壺、今泉遺跡では B G 62 住居跡出土の壺がある。それぞれの計測値、調整を実測図の上からまとめると次のようである。

第20表 壺比較表 (cm)

遺跡	部位	口 径	底 径	器 高	頸部径	体部径	調 整	
							口 線 部	体 部
猫谷地		21	9	30.5	16	30.5	内 外ヘラミガキ	ヘラミガキ
今 泉		32	16	50	28	48	内ヘラミガキ 外ナデ	ハケメ・ヘラミガキ ハケメのちヘラミガキ
白 沢		22.7	推定10	30	19	30.6	内ナデ 外ナデ	ヘラミガキ

この表からも明らかなように、白沢遺跡出土の壺は、極めて猫谷地出土のものに類似していることである。猫谷地遺跡出土のものについては、仮称 I ～ III 期までの分類が行なわれ種々検討が積み重ねられているが、上記 J G 06 出土の壺は「猫谷地 II a 期」に該当し、およそ、8世紀半ばが推定されている。また、今泉遺跡出土の壺についても、同じ 8 世紀半ばと考えられている。本遺跡周辺から出土した壺も、これら 2 遺跡出土のものと同じ時期のものととらえたい。

(土師器長頸壺)

黒色処理を施した長頸壺は少なくとも岩手県内では出土した例を知らない。しかし、類似の器形としては須恵器として各地の遺跡からは出土している。土師器の壺としては器形に差異があるものの類似のものとして二戸市・上田面遺跡出土のものがある。K T 78・B 42 住出のもので、実測図面での計測値は口径 11cm、底径 6.5cm、器高 26.5cm、頸部径 6.5cm、胸部 15cm を計る。外面はヘラミガキがあり、口縁部内外面はヘラミガキ、横ナデが施される。丸胴から頸部がやや広がりをもって立ち上がり、口縁部で大きく外反する。同遺跡からは円形周溝が検出され、また、勾玉、土玉・ガラス玉出土もある。今後、類例の報告と合わせて、本遺跡出土の長頸壺が資料化されていくものと考える。

(管玉)

本県においての管玉の出土例は、第24表に記入しているように盛岡市太田蝦夷森古墳、花巻市熊ノ堂古墳が報告されている。しかし、本遺跡出土のものとは形状に違いもあり、また、出土状況においても異なっている。石質はメノウであるが、穿孔技術はすぐれており、直孔の性状を呈する。穿孔の工具については不明である。

(ガラス玉)

ガラス玉の出土例は多いが、各種の分析についてはほとんどなされていない。したがって、県内各遺跡出土のガラス玉について、その材質、含有元素、形状、穿孔技術等についての比較

検討を行なうことはできない。今後、分析例が増え、ガラス玉の共通性を求める中で当時の人々の交流を解明する資料となると考える。

(3) 円形周溝の性格と時期について

本遺跡で検出された円形周溝4基についてその性格を考えてみたい。本県でも円形周溝を古墳に伴う周溝と、古墳とは確認できないものの円形周溝のみの検出例がある。前者については円墳状の埴丘と装飾品などの遺物も確認されていることから明らかに古墳に伴う周溝であるが、後者の場合は埴丘、遺物等も確認されていないものである。しかし、本遺跡での場合は、主体部および装飾品等も出土していることから古墳に伴う周溝と認めることができる。特にG 103周溝は主体部と共に、装飾品であるガラス玉多数の出土があったことで十分に説明することができる。ただ、H C03、HH03、H 150周溝には主体部が認められないことから、古墳に伴うものかが問題になるが、HH03周溝から長頸壺、H 150周溝から壺、管玉の出土があったことなどから、これらの周溝も古墳に伴なったものであるといえる。

また、それぞれの円形周溝が南に向く形状を有していることは、他の例でも見られるところであり、周溝が一つの聖域を囲むものとしてとらえることもできよう。

次に、円形周溝が構築された時期、即ち、古墳構築の時期は、HH03周溝から出土した土師器壺の特徴から奈良時代中頃（8世紀半ば）と推定される。

なお、本遺跡南微高地の南方約50m（第40図）の小高い地（約25m²）に「トチの老木」が生育しており、古くからこのあたりは「エゾ森」と呼ばれていた。昭和37年、東北本線複線化工事による拡幅地内に予定されたため、発掘調査が実施されたが、特に遺構、遺物等は発見されなかった。しかし、調査報告に「トチの木のあった小丘のほかに、その北方の小高い麦畑……の地域をも（エゾ森に）含んでいるのであるから、東北本線複線工事の際にはそういう場所であるいは古墳が発見されることがあるかもしれないである。」と記されている。正に本遺跡がこの地に該当していたことになる。

白沢遺跡周辺には本古墳とはほぼ時期を同じく



第40図 矢巾村エゾ森発掘調査位置図

白沢遺跡

すると見られる狹森古墳がある。狹森古墳は、本遺跡の東約2.1kmの国道4号線沿いの低位段丘（都南段丘）上に立地している。かつては群在していた（「狹森古墳周辺地域発掘調査」昭45による）が、現在は墳丘1基を残すのみである。昭和45年の同調査報告によるとこの墳丘は東西約9m、南北約8mの円形であり、高さ約1m40cmの墳丘を有している。また、2、3号の墳丘は削平され、周辺に川原石が散乱していたという。周辺は3号墳においてのみ検出され、東南方向で開口している馬蹄形状と判明した。周辺の外径は東西で13m、上巾154cm、深さ94cmで、本古墳の周辺とほぼ同規模である。（深さに差があるのは、本遺跡の場合、削平によるものであろう）このように、白沢遺跡周辺には同時期の古墳が多く存在していたと推定される。

〔3〕 積穴住居跡と出土遺物

調査区B、Cブロックから2棟の積穴住居跡が検出されたが、いずれも壁の削平があり、また、柱穴等の配置にも不明な点があるなど、完形での検出ではなかった。2住居跡のみであるが、以下、両住居跡を比較しながら特徴的な点を記してみたい。

B E06住居跡は、やや隅丸方形的なものであり、カマド跡が南東方向に構築されていることから、C C53住居跡も同一方向に構築されていた可能性もあるが、遺物から検討すると必ずしも同一に考えられない一面もある。即ち、B E06住居跡出土遺物は主として土師器甕、須恵器甕がセットされた出土状況であるのに対し、C C53住居跡では土師器环が主体をなし、須恵器の出土は小片が数点のみである。また、土器製作上からみると、両住居跡出土遺物はB E06住居跡出土の土師器甕片の一例を除き、全てロクロ使用による製作をしており、环においては回転糸切りのみの切離しをしており、その後の再調整は見られない。また、C C53住居跡からは2個体の土師器环の墨書き器も出土している。一方、土師器甕はB E06住居跡では最大径を口縁部に有するものが多く、外面胴部上半よりヘラケズリを施したものである。器高と口径はほぼ同じものが多く、胴のふくらみが比較的見られるものである。

以上の出土遺物の特徴から時期的には平安時代（10世紀）のものと考えたい。ただ、両住居跡出土遺物の中に黒色処理を施した土師器环が少ないと、更にC C53住居跡出土遺物の土師器环は淡橙色系のものが大半であることなどから、黒色処理の土器が主体を占めた時期よりは若干新しくなることも考えられる。

〔4〕 周辺埋土内の出土遺物

〈出土状況〉

H C 03、H I 50、H H 03の各周辺埋土内から出土したものであるが、いずれも埋土第3・4・5層から出土したもので、特に第5層（黒褐色土）からのものが多い。検出面から30~40cmの深さである。土器、石器片とも、その出土層位、出土地点については周辺内埋土中という第二次的な遺物の移動が考えられるため、正確にはそれぞれの関係を把握することはできない。特に、分類別の土器、石器についての層位的関係は認めることはできない。しかし、少なくとも出土位置については、若干の関係を把握することは可能のようである。

即ち、第15図・遺物出土状況図、および第8表 周辺内出土遺物表に示したように土器では第I・III群土器がH C 03周辺附近、第IV群土器がH C 03、H I 50周辺附近から集中して出土していることは指摘できる。したがって時期的な土器の分布状況をある程度把握することはできそうである。

石器についても土器片同様、第3・4・5層から出土しているもので、このうち第4・5層からのものが多い。しかし、分類ごとの石器が層位的に関係づけられるとは認められない。ただ、石器においても位置的にその分布状況に集中性があり、いわばそれらの地点に遺構が存在しただろうことは一応考えられるところである。

〈編年上の位置〉

出土した土器、石器片の編年上の位置について以下考えてみたい。

(1) 土器について

第I群土器：本群土器は纖維を含まず、貝殻文による文様を施しているものであるが、胎土に多量の雲母を含み、また、橙一明褐色の色調を呈することなど、本遺跡と近い距離に位置する遺跡出土のものと類似するようである。即ち、本遺跡の北西約10kmに位置するオミ坂遺跡および北西約5.5kmの大渡野遺跡出土のものに貝殻腹縁刺突文、表裏条痕文、表面に刺突文・沈線文、沈線文の施された土器がみられることである。また、県内においては日戸遺跡、蛇王洞洞穴遺跡があり、^(注8)県外においては青森県ムシリ遺跡、早稲田遺跡、秋田県岩井洞岩陰遺跡などがあげられる。本遺跡出土のものについては、沈線によるものは群を改めて分類しているが、前述の各遺跡出土のものと比較してみると、本遺跡出土のI群土器は「ムシリI式」に類似したものといえよう。したがって、縄文早期中葉のものと考えられる。

第II群土器：平行沈線と刺突文によって幾何学的文様を作るものは早稲田貝塚出土の第三類

白沢遺跡

土器に類似する。即ち、同貝塚の報告によれば、第三類（3）のNo11に極めて類似するもので異方向に走る比較的間隔ある平行沈線とその間に竹管状の刺突痕が施される。県内においては前記の日戸遺跡などからも発見されている。土器文様の特徴から第Ⅰ群と同じムシリⅠ式に最も近いものと思われる。

第Ⅲ群土器：本群は縄文を施文し、纖維を含むものである。特にⅢ1a、Ⅲ2、Ⅲ5は多量の纖維を含む。器面の施文は、羽状縄文、および撚糸状のほどこされた焼成不良のもの（Ⅲ1b、Ⅲ2）などがある。また、器内面にも縄文の施文がある（Ⅲ3）ことなど編年的には東北南半の梨木畠、船入島下層式に類似する。しかし、器内面に縄文施文が見られないもの、および羽状縄文が施文されていることなどから、むしろ船入島下層式相当のものとみることができよう。また、金雲母片が多量に混入し、纖維を若干混入している。色調は黒褐色を呈し、早稻田四類に類似している。時期的には早期末葉を主にし、前期初頭にかかるものと思われる。

第Ⅳ群土器：粗製土器と精製土器を本群とした。粗製土器（Ⅳ1、2・3）は主体的なモチーフをもたないものであり、器形は鉢形になると考えられる。口縁部が小波状を呈し、内外面を磨いている。Ⅳ3類は3本の平行沈線をめぐらしたモチーフを中心としたものと考えられ、大洞A'式に相当するものと考えられる。前述の粗製土器は伴出する土器がなく、時期決定資料に欠くが、他遺跡での伴出例からみると、大洞C₁式に相当するものと考えられる。いずれも縄文晩期中葉～末葉にかけてのものと考えられる。

第Ⅴ群土器：Ⅴ1類は器形は小片のため不明であるが、残存片からみる限り小形鉢と思われる。沈線の下方に横走ないし、斜走する撚糸文が施されている。Ⅴ2類は壺形土器の口頸、胴部片と思われる。撚糸文だけの施文であり、口頸部は撚糸部分を磨消する手法が認められる。天王山系土器と考えられ、弥生時期のものであろう。

（2）石器について

・石器群と土器群との時期的関連について

本遺跡出土の石器、土器は周辺埋土中からのもので、いわば第二次的な堆積層の中からの出土であることから層位的なものとして把握することはできない。しかし、土器群の組成でみたように、時期的にはムシリⅠ式から船入島下層までの縄文早・前期のものと、大洞C₁～A'までの縄文晩期のもの、更に天王山系の弥生後期のものである。したがって、石器群の組成を一

応これらの時期のいずれかに比定されるものとして考えることは可能であろう。

まず、石器の組成をみると、石鎌、石匙、石箆状のもの、切削器、撞器、石皿、磨石などがある。沈線、貝殻系土器群に伴出する石器については、既に林謙作氏による論考がある。^(注12)それによると、東北地方の早期縄文式文化を二分する地域例として、「下北地方の貝殻・沈線文土器群に伴出する石器の基本的な組み合わせは、石斧、石槍、石鎌、石鍤であり、中葉以降になって石匙が出現する。これに対して、東北地方南半ではいまのところ、石槍、石鍤の存在は顕著なものとはいえない……。」と述べている。更に出現する時期は南北とも同時期で、物見台式と吹切沢式の間にあるとしている。本遺跡の出土石器の中に石匙状のものが存在すること、石鎌、石槍と伴出することなどから、一応早期中葉～末葉にかけてのものととらえたい。

ただ、石斧、石鍤などの石器が本遺跡には存在しないことは、ある面では地域的な差として把握できようし、また、これが地域の環境のあり方によることは当然であろう。即ち、地域に河川、海岸などがある環境と山間地での環境には、生活の仕方に相違があり、当然、立地条件に合った石器使用ということも考えられる。

以上の点から出土石器の時期的な面について考えてみたが、細部については検討不足の点が多くあり、特に、周辺遺跡の出土遺物との関係についても今後、考察を加えていかなければならない点である。

・石材について

南微高地出土の剥片石器についてその石材の割合は硬質頁岩（25%）、珪質凝灰岩（20%）、その他である。産地については硬質頁岩、石質凝灰岩が岩手郡零石西部の新第三紀中新世、珪質頁岩は同郡零石の脊梁新第三紀中新世にあたる。なお、黒耀石が1片出土しているが、産地については確定できない。（佐藤二郎氏によれば零石から豊沢川の間の新第三紀中新世の可能性があるとのことである。）県内においての黒耀石出土地についての報告が最近の調査例の増加に伴なって散見されるようになった。

石皿の石材として熔岩塊を利用している例は本県においては大渡野、西田遺跡等、多くの報告例があり、縄文期の特徴ともいえる。

（3）埋土中の火山灰について

周辺の埋土の特徴として、灰白色の降下火山灰の堆積が認められることである。降下火山灰が認められた遺跡としては、本遺跡のはか、螺夷森古墳（盛岡市上太田）、長沼古墳（和賀町）などがある。これら火山灰は埋土中に3～5cmの厚さのレンズ状に堆積しているもので、いずれの火山灰もその堆積状態から考えて、周辺が掘り込まれた直後の堆積ではなく、ある程度埋

白沢遺跡

まりかけた時点での堆積と考えられる。このような火山灰の堆積は岩手県においては早くから知られていた。即ち、土師器の竪穴住居跡の埋土に堆積していた報告としては、昭和28年、調査が実施された「塙野遺跡」^(注13)がある。報告によれば竪穴住居跡はその上を灰白色の火山灰が10~20cmの厚さでおおわれていた、とのことである。しかし、古墳の周辺では盛岡市蝦夷森古墳(別表)で知られていた程度で、全県的には余り注意されていなかった。しかし、最近の調査事例の増加と共に、古墳の周辺に堆積する火山灰の確認がなされ、その一例として東北自動車道関連遺跡に位置した和賀郡江釣子村の「猫谷地古墳」周辺の泥炭層から2層にわたる同様の火山灰層の堆積が確認されている。^(注14)

今後、各遺跡での火山灰が化学分析され、その組成、噴出地などが相互に研究対象になり、遺構の年代決定の資料となることが望まれる。

なお、本遺跡の火山灰について岩手県工業試験場に依頼し、蛍光X線分析を行なった。その結果、石英、長石を含む火山灰であることが確認された。

また、岩手大学農学部助教授(土壤学)井上先生の御教示によれば、白沢遺跡の火山灰は、その分布、鉱物組成からみて、秋田・焼山火山起源の火山灰であり、¹⁴C年代および遺構などから約1200~1500年前の火山噴出物であると推定されている。

岩手県工業試験場での分析結果は第41図、第23表のとおりである。(第II分冊・西野遺跡、第III分冊・杉ノ上Ⅲ遺跡においても同試験場により火山灰の分析を実施した。)

V. ま　と　め

以上の調査結果、考察から白沢遺跡について次のようなまとめと課題を得ることができた。

1、白沢遺跡は奥羽山系から流出する支流が形成した段丘上（低位段丘の上面・花巻段丘）の東縁部に位置している。

2、調査の結果、次の遺構、遺物を発見した。(4)以外は南微高地上から検出された。

- (1) 繩文時代早、前、晩期の土器片、石器が発見され、また、前期に近い時期の遺構と思われる円形、溝状の土壤が検出された。これらは狩猟を目的としたものと推定される。
- (2) 弥生時代後期の土器片が数片出土した。天王山系の土器と考える。
- (3) 奈良時代（8世紀中頃）の古墳が4基検出された。いずれも墳丘は削平されており、円形の周溝（馬蹄形状）のみが検出され、うち1基の古墳からは地上面を掘り込んだ長方形状の主体部が検出され、主体部床面直上の土壤からリン酸が高い数値で検出された。なお、いずれの古墳からも川原石など認められず、石室を構築したものとは考えられない。

古墳に伴う遺物として、主体部から240個のガラス小玉、刀子状の鉄片、周溝内底部からヘラミガキ・黒色処理を施した長頸壺1、丸胴の壺、管玉などが出土した。長頸壺は須恵器を模したものと考えられ、今後、関連遺跡の調査を進める中での資料となるだろう。

- (4) 調査地北側の果樹園跡から平安時代（10世紀）の住居跡が2棟検出された。壁など削平が著しく、また、柱穴、カマド、煙道などの一部に確認できないものもあった。

3、以上の各時期に亘る遺構、遺物が発見されたことから、この地は、原始、古代からの生活の場であり、また、葬祭の地としても存在していたことが認められた。

4、南微高地上に検出された古墳は8世紀中頃に構築されたものと考えられたが、当然、この時期に相当する住居跡も附近に存在しているとみられることから、今後、注意していく必要がある。

5、今回の調査は新幹線建設予定地内という限られた面積であり、しかも、幅18m-20mの極めて狭い範囲内だけの調査である。したがって遺構検出においても十分な広がりをもつたものにはなり得なかった。

円形周溝、特にH.I50周溝は当然、調査対象地の東・畠地まで続いているはずであり、また、他の周溝の存在も十分予想されるところである。今後の保存に留意すべき

白沢遺跡

と考える。

6、岩手県内における古墳は、胆沢町・角塙古墳の前方後円墳をはじめ、江釣子村・猫谷地古墳群、五条丸古墳群などの石室を伴う古墳、更に、浮島古墳のように単に主体部の上に盛土し、円墳状の墳丘を構築した古墳など、その形態、構築方法、遺物などに種々の差異が認められる。

また、本遺跡のように円形状の周辺のみ検出されただけで出土遺物もなく、性格不明のものと報告されているものもある。

被葬者ばかりでなく、当時のこの地の人々の生活のようすについても興味のあるところである。

今後、県内の古墳についての調査が進み、これらの点について更に解明されていくものと思う。本調査の結果がその資料の一助になればと考える。

（注）

- 注1) 埼玉県教育委員会「寺山」埼玉県遺跡調査報告書第9集 1976
- 注2) 草間俊一「岩手県西根村谷助平古墳」岩手大学学芸部研究年報第18巻 1961
- 注3) 草間俊一「浮島古墳」岩手町教育委員会 1959
- 注4) 伊東信雄「岩手県金ヶ崎町・西根古墳と住居址」金ヶ崎町教育委員会 1968
- 注5) 岩手県埋蔵文化財センター「三戸バイパス・上田面遺跡現地説明会資料」 1978
- 注6) 穴孔の技術、工具については次の報告書に記述されている。福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 高木遺跡の調査」 1977
- 注7) 板橋 源「エゾ森発掘調査概報」 1962
- 注8) 草間俊一「玉山村日戸遺跡調査報告」岩手大学学芸部研究年報第14巻 1959
- 注9) 二本柳正一他「青森県上北郡早稲田貝塚」考古学雑誌43巻2号 1957
- 注10) 秋田県教育委員会「岩井洞岩陰遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書16集 1972
- 注11) 大迫町教育委員会「小田遺跡発掘調査報告書」 1979
- 注12) 林 謙作「東北地方早期縄文式文化の展望」考古学研究第9巻第2号 1965
- 注13) 草間俊一「岩手県福岡町堀野遺跡」福岡町教育委員会 1955
- 注14) 岩手県教育委員会「猫谷地遺跡現地説明会資料」 1974

参考文献

- 中川久夫他(1963)「北上川上流沿岸の第四系および地形」—北上川流域の第四紀地史(1) 地質学雑誌・第69巻第811号
- ・ 「北上川上流沿岸の第四系および地形」—北上川流域の第四紀地史(2) 地質学雑誌・第69巻第812号
- 佐藤二郎(1978)「考古学のための地質学」地形・地質学会資料
- 林謙作(1962)「東北地方早期縄文式文化の展望」考古学研究・第9巻-2
- 宮沢寛(1977)「縄文時代早期後半における土壤をめぐる諸問題」漆北ニュータウン埋蔵文化財調査団・調査研究集録第1冊
- 今井康博(1956)「岩手県日戸遺跡調査報告」岩手大学学芸学部研究年報・第10巻
- 大迫町教育委員会(1979)「小田遺跡発掘調査報告書」大迫町埋蔵文化財報告第4集
- 大槌町教育委員会(1974)「崎山弁天遺跡」
- 岩手県埋蔵文化財センター(1978)「都南村・湯沢遺跡」岩手県埋蔵文化財調査報告書第2集
- 二本柳正一他(1957)「青森県上北郡早稲田貝塚」考古学雑誌・第43巻-2
- 江坂輝弥(1950)「青森県下北郡東通村、尻屋、物見台遺跡調査報告」東北日本田戸住吉町系文化遺跡調査報告第一編
- 佐藤達夫(1958)「青森県上北郡出土の早期縄文土器」考古学雑誌・第43巻-3
- 八戸市教育委員会(1976)「赤御堂遺跡発掘調査概要報告書」
- 角塚脣三他(1957)「早稲田貝塚」上北考古学会報告1
- 秋田県教育委員会(1972)「岩井洞岩陰遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書
- 林謙作(1972)「縄文文化の発展と地域性、東北」河出書房・日本の考古学II・縄文時代
- 北奥古代文化研究会(1978)「北奥古代文化・第10号」東北・北海道地方の続縄文文化・弥生文化
- 北奥古代文化研究会(1972)「北奥古代文化・第4号」特集・奥羽土師文化論
- 東北歴史資料館(1977)「東北の古墳」
- 和田吉之助(1971)「神沢海岸遺跡」
- 富樫泰時(1971)「西根村・谷助平古墳」岩手大学学芸学部研究年報・第18巻
- 草間俊一(1961)「猫谷地古墳発掘調査報告」岩手史学研究No.9
- 桜井清彦他(1951)「猫谷地・五条丸古墳群」
- 江釣子村教育委員会(1978)「角塚古墳調査報告」
- 胆沢町教育委員会(1976)「矢巾町・エバ森発掘調査概報」
- 板橋源(1962)「矢巾町・エバ森発掘調査概報」
- 川村仁左衛門(1962)「矢巾町・エバ森発掘調査概報」
- 矢巾町教育委員会(1970)「矢巾町・エバ森古墳周辺地域発掘調査」
- 小笠原謙吉(1924)「和同銭を出した陸中国熊堂の古墳群」考古学雑誌・第14巻・7
- 岩手県教育委員会(1970)「盛岡市上太田郷森古墳二報」
- 金ヶ崎町教育委員会(1968)「西根古墳と住居址」
- 岩手町教育委員会(1961)「浮島古墳・澤口遺跡」
- 和賀町教育委員会(1974)「長沼古墳」
- 二戸市教育委員会(1978)「中曾根II遺跡発掘調査」現地説明会資料

白沢遺跡

- 二戸市教育委員会 (1979) 「東北自動車道・有矢野遺跡」 現地説明会資料
- 二戸市教育委員会 (1978) 「二戸バイパス・上田面遺跡」 現地説明会資料
- 財)岩手県埋蔵文化財センター (1979) 「二戸バイパス・上里遺跡」
- 音喜多 富 寿 (1960) 「八戸市根城・鹿島沢古墳群調査略報」
- 福岡県教育委員会 (1977) 「福岡県高木遺跡の調査」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 第1号
- 白石市教育委員会 (1972) 「鷹巣古墳群発掘調査概報」白石市文化財報告書第12号
- 埼玉県教育委員会 (1976) 「寺山」埼玉県遺跡発掘調査報告書・第9集
- 音喜多 富 寿 (1958) 「鹿島沢古墳群踏査予報」 史想第9号
- 江坂輝弥 (1975) 「岩内山遺跡」北陸自動車道関係遺跡調査報告書・第9集
- 沼山源喜治 (1976) 「陸奥北半における末期群集墳の性格」北奥古代文化・第8号
- 岡田謙 (1969) 「ガラス」日本の美術、37(至文堂)
- 小林行雄 (1976) 「続・古代の技術」
- 氏家和典 (1957) 「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯
- 桑原滋郎 (1976) 「ロクロ土師器环について」歴史第38輯
- 宮城県教育委員会 (1978) 「東北自動車道遺跡調査報告書I」宮城県文化財調査報告書・第52集
- ・ (1974) 「東北新幹線関係遺跡調査報告書(1)」宮城県文化財調査報告書・第35集
- 小笠原好彦 (1976) 「東北における平安時代の土器についての二十三の問題」東北考古学の諸問題
- 沼山源喜治 (1978) 「東北北部の歴史時代の土器」シンポジウム資料
- 水沢市 (1974) 「水沢市史・1」
- 江釣子村 (1971) 「江釣子村史」
- 和賀町 (1977) 「和賀町史」
- 盛岡市 (1970) 「盛岡市通史」

矢巾町白沢遺跡・土壤のリン分析

昭和54年8月24日

岩手大学農学部土壤学教室

井上 克弘

1. 概 要

白沢遺跡は北上川の西岸に接する金ヶ崎段丘末端上にあり、東北新幹線建設工事に関連して発見された。この遺跡の奈良一平安前期の古墳跡と推定される遺構について、遺構と墳墓とのかかわりを判定する資料を得るために表題の分析を行なった。

試料はいずれも岩手県教育委員会の遺跡発掘調査担当者によって昭和48年9月に採集されたものである。

2. 分析方法

各土壤を風乾し、2 mm 篩を通して風乾細土を分析に供した。全リン酸は2 g の土壤を硝酸一過塩素酸で分解したのち、ケイ酸を分離濾別し、バナドモリブデン比色法により求めた。また可溶性リン酸はBray and Kurtz (1945) の第1法により0.03N-NH₄F 可溶性リン酸を測定した。なお、土壤とNH₄F-HC1抽出液との比率を1:7、抽出時間を1分間とした。リン酸の定量はモリブデン青比色法によった。

3. 結果および所見

分析結果を第1表に示した。ここで全リン酸、可溶性リン酸は100g乾土当りのmg P₂O₅で表示した。

白沢遺跡の土壤母材はいずれも金ヶ崎段丘上に堆積した火山灰である。本遺跡の周辺部分には黒色の腐植質火山灰が堆積しているが、この火山灰中に薄く灰白色の火山灰層をレンズ状にはさんでいる。また、担当者より頂いた灰白色火山灰は鉱物組成からみて岩手県岩手町の仙波

白沢遺跡

堤・今松遺跡や玉山村釜崎遺跡の竪穴式住居跡にふりこんでいる灰白色火山灰と同質のものである。(草間、1970)。

本火山灰はその分布、鉱物組成から秋田焼山火山起源の火山灰であり、¹⁴C年代および遺構などから約1200～1500年前の火山噴出物であると推定されている(井上、投稿中)。

0.03N-NH₄F可溶性リン酸は約0.3～1.0mgP₂O₅/100g乾土の範囲にある(第1表)。実際の埋葬地の土壤のリン酸含量について資料やデータを持ちあわせていないが、ナウマン象包含層の土壤の0.03N-NH₄F可溶性リン酸は近堂・近藤(1978)によれば化石より50cm以上離れた土壤では(0.4mg/100g乾土であるのに対し、50cm以内の土壤は)0.5mg/100g乾土である。また、化石周辺で骨片の分解したと思われる地点は可溶性リン酸が2～15mg/100g乾土であり、小骨片の混入した土壤試料では417mg/100g乾土という異常に高い可溶性リン酸含量が得られている。

上記データを参考にすれば、本遺跡の土壤の0.03N-NH₄F可溶性リン酸は特に高くはないが、No18のHA50土壤床面の土壤では1.03mgP₂O₅/100g乾土でありやや高かった。

一方、遺跡中の土壤の全リン酸含量は約170～240mgP₂O₅/100g乾土であった。一般に火山灰土壤は非火山灰土壤よりも全リン酸含量が高いが、白沢遺跡中の土壤の全リン酸含量も通常の火山灰土壤の全リン酸含量の範囲内にある。第1表からも明らかのように、土壤の全リン酸含量は腐植含量と関連しており、黒色の土壤ほど全リン酸が高い傾向にあり、植物由来のリン酸の影響を強く受けている。

文 献

- (1) Bray, R. H. and Kurtz, L. T. (1945)
Determination of total, organic, and available forms of phosphorous in soils.
Soil Sci. 59, 39-45
- (2) 井上克弘、秋田焼山火山灰の¹⁴C年代、地球科学(投稿中)
- (3) 近堂裕弘・近藤鍊三(1978)、ナウマン象包含層の古土壤学的考察、十勝平野、地図研究報 22, 336-338
- (4) 草間俊一(1970)、岩手県岩手町仙波堤・今松遺跡、PP 1-37、岩手町教育委員会
- (5) 草間俊一(未発表)。

第21表 白沢遺跡の土壤の全リン酸含量と可溶性リン酸含量表

No.	遺跡 採集地点	地層	全リン酸 (MgP ₂ O ₇ /100g)	0.03N-NH ₄ 下 可溶性リン酸 (MgP ₂ O ₇ /100g)	土色*	採集 年月日	
10	GJ53土壤 (5号土壤)	埋土 I	232	0.54	10YR 3/2 (黒褐色)	1973.9.19	
12	GJ53土壤 (5号土壤)	II d	180	0.28	10YR 3/2 (黄褐色)	1973.9.19	
18	HA50土壤	主体部床面	137	1.03	10YR 3/2 (灰黃褐色)	1973.9.12	
19	HA50土壤	主体部床面	236	0.54	10YR 3/2 (黄褐色)	1973.9.19	
20	HA03周溝 (4号)	埋土 II a	170	0.53	10YR 3/2 (黄褐色)	1973.9.19	
36	HC03周溝 (1号)	II a	216	0.28	10YR 3/2 (黒褐色)	1973.9.11	
37	I A 53	土師器壺中	169	0.43	10YR 3/2 (黄褐色)	1973.9.12	
対	1	白 沢	作土 下	187	0.74	10YR 3/2 (黄褐色)	-
照	2	白 沢	心 土	36	0.38	10YR 3/2 (明黄褐色)	-

* Munsell Soil Color Chartによる：色相、明度／彩度

白沢遺跡出土品分析結果

昭和54年9月7日

岩手県工業試験場

1. 玉

X線回折においては、No. 240の橙縞の玉は明瞭な α -石英の回折ピークがあり、材質はめのうである。

他の5種類の玉は、いずれも非晶質で明らかなピークが認められず、その素材はガラスと思われる。

このガラス玉について蛍光X線分析を行なった結果、検出された元素は表のとおりであるが、これらの成分のうち、いずれにも共通して含有している元素は、Sn, As, Ca, Fe, K, Siであり、No. 235, 157, 40のガラス玉にはSr, Cu, Co, Mn, Cr等が含有し、これらは濃青色系の着色剤とみられ、No. 222の淡青色の玉はCuが着色剤と思われる。

PbはNo. 223の黄色のものだけに検出されたが、これは比重からみて鉛ガラスとしての成分であるかどうかは疑わしい。

なお、この蛍光X線分析は使用分光結晶の関係で、この外のガラスの成分として考えられるNa, Mg等は測定していないが、成分および比重等の測定結果からソーダ、石灰、ケイ酸塩ガラスと考えられる。

第22表 出土遺物分析表

No.	試 料			組 成 (X線回折による)	検 出 元 素 (蛍光X線分析による)	見掛け 比 重	備 考
	色	形 状	大きさ (mm)				
1	橙縞	球	径1.0 六径2.0	めのう		2.6	
2	藍	円板状	径8.0 厚さ5.0 六径1.5	ガラス	Sr, Sn, As, Cu, Ca, Fe, K, Co, Mn, Si, Cr	2.5	
3	青大	ビーズ状	径4.0 厚さ3.5 六径1.0	ガラス	Sn, As, Cu, Fe, Ca, Sr, K, Si, Co, Mn, Cr	2.5	
4	青小	ビーズ状	径4.0 厚さ2.8 六径0.6	ガラス	Sn, As, Cu, Fe, Ca, Sr, K, Si, Co, Mn, Cr	2.5	
5	淡青	ビーズ状	径3.6 長さ4.0 六径1.0	ガラス	Sn, Cu, Fe, K, As, Si, Co	2.2	気泡を含む
6	黄	ビーズ状	径3.8 厚さ2.5 六径0.9	ガラス	Sn, As, Fe, Pb, Ca, K, Si	2.3	気泡を含む

(備考)

(1) 比重参考例

めのう	2.6
板ガラス	2.46
ピンガラス	2.49
鉛ガラス	2.85~4.28

No 222淡青色ガラスおよびNo 223黄色ガラスの比重が若干小さいのは気泡を含むためであろう。

(2) 成分の含有量について

蛍光X線分析による成分量は、各試料対比によっては試料を非破壊的に原形のまま使用したため、それぞれの形状、大きさ等の相違により、測定条件が異なり、又、各元素対比においては、それぞれの検出感度が異なるため量的な比較は難しい。

火山灰分析結果

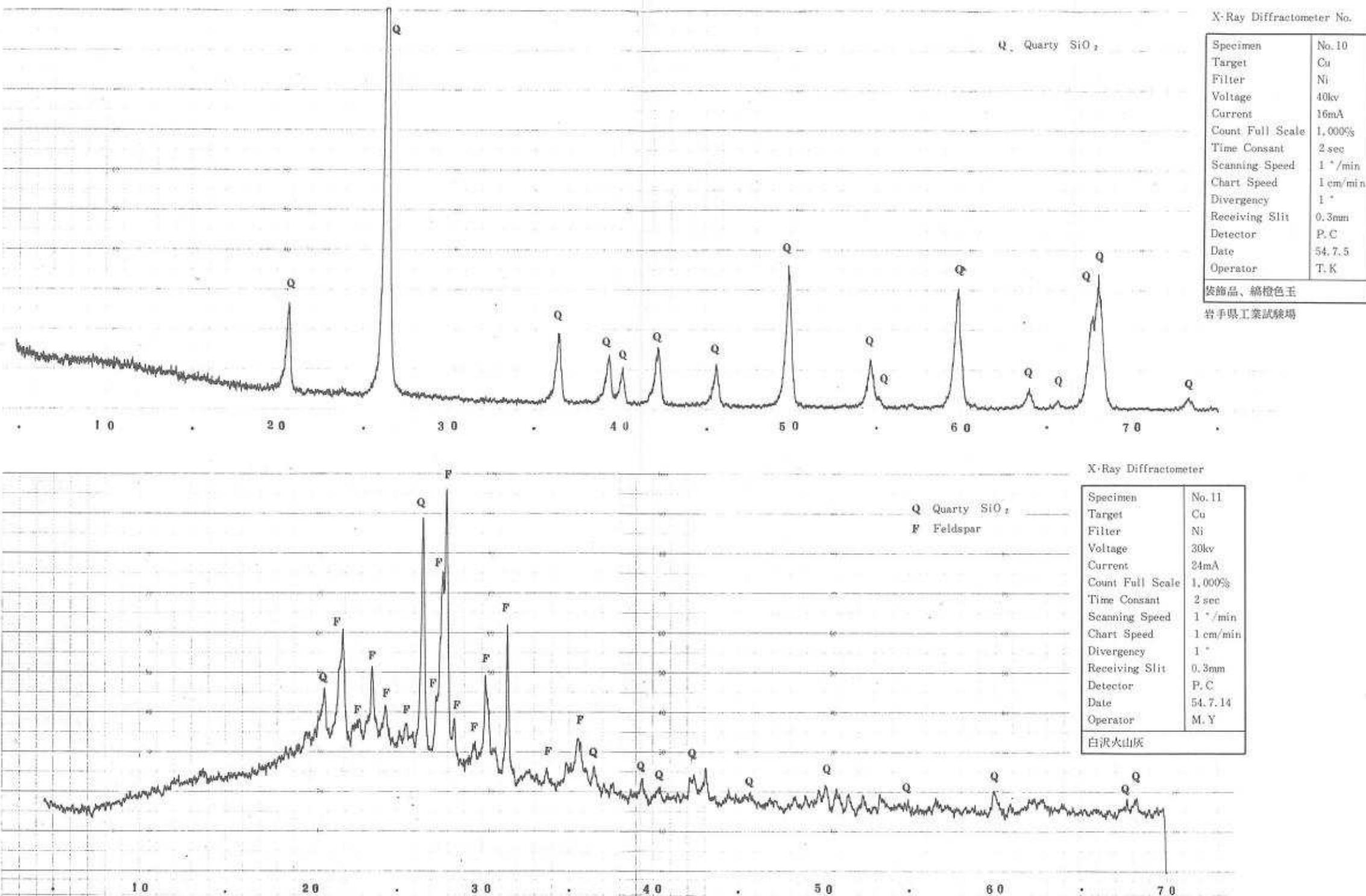
本遺跡の南側高地に検出された古墳周辺内の火山灰について、次表のように岩手県工業試験場に依頼し、その成分分析を行なったが、これを本課で既に実施した他の遺跡の火山灰と比較し、その百分率の差をみたのが下の表である。二遺跡とも新幹線関連遺跡として調査されたものである。杉ノ上III遺跡は紫波町日詰にあり、昭和48年調査が行なわれ、平安時代の住居跡4棟を発見している。火山灰はこの住居跡のうちの3棟に入っていたもので、約10cmの厚い堆積を示す住居跡もある。また、西野遺跡は北上市相去町にあり、昭和50年に調査されたもので、平安時代の住居跡3棟を発見し、このうち2棟の住居跡床面近くに2~3cmの火山灰の堆積を認めているものである。

なお、杉ノ上III、西野遺跡の火山灰についても岩手県工業試験場において定量分析及びX線回折をした結果のものである。

第23表 火山灰分析表

成 分 ＼	Sample	白沢 遺跡	西野 遺跡	杉ノ上 III遺跡
H ₂ O ⁻ (水 分)	2.86%	1.46%	2.60%	
H ₂ O ⁺ (酸性強度)	7.10	4.03	7.28	
SiO ₂ (無鉱物質)	60.21	64.86	61.05	
FeO _x (酸化鉄)	4.87	4.69	6.20	
TiO ₂ (酸化チタン)	0.62	0.387	0.612	
P ₂ O ₅ (無水リン酸)	0.14	0.200	0.114	
Al ₂ O ₃ (アルミニウム)	15.89	14.81	15.59	
CaO (カルシウム)	3.10	3.09	1.97	
MgO (酸化マグネシウム)	1.30	1.21	0.80	
MnO (酸化マンガニウム)	0.14	0.122	0.171	
Na ₂ O (酸化ナトリウム)	3.24	4.49	3.18	
K ₂ O (酸化カリウム)	1.01	1.16	0.99	
S (硫黄)	Trace	Trace	Trace	

岩手県工業試験場で分析(昭和54年11月)



第41図 白沢遺跡出土遺物・土壤サンプル・組成分析 上図(No.10) ガラス玉組成(X線回折、螢光X線分析) 下図(No.11) 火山灰鉱物組成(X線回折)

岩手県・古墳調査内容一覧 (No 1)

(記述方法については図5に記した)

岩手県・古墳調査内容一覧 (No.2)

古墳名等 調査年 調査記載	古 墓																		古墳以外の発見遺構				備考 (報告書記載の文面)								
	古墳No	墳丘の構造				主体部の構造										周辺の構造				古墳と同時期の遺構	古墳と異なる時期の遺構	出土遺物									
		埴生有無	平面形	大きさm	高さm	出土遺物	主体部の位置	長軸方向	平面形	大きさm	深さm	兼込み面	床面	石組室	出土遺物	葬法	周辺の有無	平面形	大きさm	深さm	出土の有無	出土遺物									
1.道場古墳 2.金ヶ町大字西 棋子塚15	第7号墳	有 (推定)														小砂利	川原石を一段 積石石室 (推定)	ガラス小玉18 刀子	有 一部確認	円形 南北は切 れていだ と推定さ れる	12.0内径 1.0幅										
牧森古墳 (周辺地域) 2.磐波郡久慈町大 字藤沢第7地割 3.昭和44年3月 4.矢巾町教育委員 会 5.国道4号付近の 既存台跡、周辺 は平坦な水田地 帶 6.3基 7.「秋森古墳周辺 地域発掘調査」 (昭45)	第1号墳 発掘調査 はしない	有	円形	9×8	1.4	主省道藤善 からの高さ																	秋森古墳 の南方1 kmに、半 島初期の 地内城 跡」があ り、出土 品の中 でも古者 は時代的 にあまり はだら かでない 近似時期 のもの				1.周辺ともなう積 石室古墳群の所在 する近傍に城櫓跡か あるいはそのような 性格をもつ開拓期に における重要な施設と なったものがあるこ とが、両者の関連を 考える上で重要な点 がかりになりうるかも しれない。				
1.坂鳴森古墳 2.盛岡市上太田第 15地割字森合 同区域 3.昭和45年10月 4.岩手県教育委員 会 5.本庄字田地 赤 田方八丁地跡と 同一地域に立地 6.2基 7.「盛岡市上太田 鳴森古墳二報」 (昭45)	第2号墳 大部分破 壊															1.9(長)	円礎數	川原石 兔頭と倒 壁のみ遺 存	「和同開珎」1茶 金片残欠2鐵製 品、三裂鏡。植 物種子若干。切 子玉1丸玉4四 角20管玉51粒 小玉407	有 部分調査	馬蹄形 ・東南方 向で開口	1.3 外径 1.54上幅 0.94 断面U字 状	断面U字 状	白色の大 山灰 0.95長さ	土師器片 頂窓器片	赤田の方 八丁地跡 と相應する 古墳とは 時代的に あまり離 れていない 近似時期 ではないか					
1.猪谷地古墳 2.和賀郡江釣子村 字豊谷地 3.昭和26年5月 4.江釣子村 5.和賀川北岸段丘 上 6.5基 7.「岩手史学研究 (6.9)・豊谷地 古墳群調査報 告」(昭26)	第3号墳 大部分破 壊														3.3(長)	円礎數	川原石 側壁のみ 遺存	なし	有	1.3 上幅 0.5 断面U字 状											
1.猪谷地古墳 2.和賀郡江釣子村 字豊谷地 3.昭和26年5月 4.江釣子村 5.和賀川北岸段丘 上 6.5基 7.「岩手史学研究 (6.9)・豊谷地 古墳群調査報 告」(昭26)	第1号墳	有	不整形円	直徑12 多くの川原 石が露出	0.91		N-10°W	3.55× 0.75	1.0	理數 南側に鹿 門	川原石	小形袋1蓋形頸 輪器片、骨片小 豆、骨灰、木炭										本古墳群 の築造年 代は比較 的新しい と思われる 扇手刀の出 土等からみ ても、また 附近遺跡 との対比 の上から も古墳期 最末期に 属かなか ればなら ないであ ろう。									
1.五葉丸古墳群 2.和賀郡江釣子村 字上江釣子第20 地割ほか 3.昭和37年10月 4.岩手県教育委員 会・江釣子村教 育委員会 5.和賀川北岸の河 岸段丘上 6.11基(他に川原 石等の分布地点 などの50基) 7.「豊谷地、五葉 丸古墳群」 (増補再刊、昭53)	第14号墳 大部分破 壊	有	橢円形	3×2.5 積石積石	1					石列 長さ2.1						西壁積石 最下段の み遺存	勾玉1 ガラス小玉41 (暗青色、緑色) 切子玉1 直刀片		不明												
	第19号墳	有	不整三角形	4.5×2	0.7		N-10°W	4.1×0.6	0.8	理數	石室側面 を削ぐ形の平 石を嵌め て壁を立て させている					勾玉1 鐵錐片1 頭窓器片 ガラス小玉1	有	南北は認 められな かった	0.3 内径 1.0幅												
	第20号墳	有 削平大	長方形	2.5×5.5	0.9		N-13°E	3.4×0.7	0.6	理數 木炭数の 痕跡	川原石 小口積 (盗掘) 天井石2ヶ	直刀1 藏手刀1 刀子2 鞘尾金具 残片、棒状鐵錐 片1 ガラス小玉 3																			
	第21号墳 盗掘		橢形状	4.4×3.2 積石が露 出	0.85		N-13°W	中央部で 若干剥ら む	2.0×0.6	理數 木炭数の 痕跡	川原石	刀子2 土玉55 不明鉄錐1		有	円形 南北は約 3mにわ たって絶 り切れて いる。	8.0 内径 11.4外径 1.8最大幅 1.0最小幅	1.3 最大深														
	第22号墳	有	不整の下 方上円形	3.77× 3.65 川原石の 積石			N-13°30' -W	2.7×0.46	0.58	理數 木炭数の 痕跡	川原石 東西の側 壁は川原 石を小口 積	铁刀1 刀子2 铁錐1	有	10.15 内径 1.2 東幅 1.5 西幅																	

岩手県・古墳調査内容一覧 (No.3)

古 墓 名 項目	古 墓																				備 考 (報告書記載の文面)							
	古墳No	古 墓 の 規 模				主 体 部 の 構 造												古墳調査年 代	古 墓 と 棚 墓 の 年 代	古 墓 と 棚 墓 の 時 期	出 土 遺 物	古 墓 と 棚 墓 の 通 構						
		古 墓 の 形	平 面 形	大 き さ m	高 さ m	出 土 遺 物	主 体 部 の 位 置	長 軸 方 向	平 面 形	大 き さ m	深 さ m	掘 入 面	床 面	石 棚 室	出 土 遺 物	葬 法	周 边 の 特 徴	平 面 形	大 き さ m	深 さ m	古 墓 中 の 全 遺 物	出 土 遺 物						
1.五条丸古墳群 2.和賀郡江釣子村 字上江釣子第20 地割ほか 3.昭和37年10月 4.岩手県教育委員会 江釣子村教育委員会 5.和賀川北岸の河 岸段丘上 6.1基(他の川原 石等の分布地点 などの50基) 7.「盛谷地、五条 丸古墳群」 (増補再刊、昭53)	第23号墳	石積	正三角形	3.5(一辺) 0.6						1.6×0.5 (2.4)	0.5	石室構築 前に若干の掘下げ	石数 11cm	側壁に立石 高さ6cm	裁手刀1 ガラス小玉24 土玉7	有	南方には 認められない	7.0 内径 1.4 (幅)										
	第24号墳	有	不整の菱形	3.05×2.9 (重石が露出)	0.55			N-36°30' -W		1.5×0.5 0.4			木片断片 高さ (15cm)	河原石を 小口横 (大部分破壊)	勾玉3 切子玉1 ガラス小玉25	不明												
	第25号墳 第26号墳	古墳とは 認められない																										
	第27号墳													両面に斜め乱剥 に留められた石 英と知るところ とは無理	全く認め られない													
	第28号墳	古墳とは 認められない																										
	第29号墳 (瓦張の表 裏蓋なし)													乱積した 河原石	人骨片 陶器片		有	不整円形 1.0 (幅)	0.2~0.3 △字状の 落ち込み									
	第30号墳	不整三角形	4×4×2.5 0.4			N-24°E		3.0×0.6						磯數 仕切石1	直刀1 刀子2 ガラス小玉305		有	9.0 (内径) 1.0 (幅)										
	第31号墳		若干の積 石が露出	0.3										磯數在	河原石 擦乱著し い	ガラス小玉7	有	7.5 (内径) 1.0 (幅)										
	第32号墳		若干の積 石が露出											磯數	石室の一 部が通存	全く認められな い	認められ ない											
	第33号墳	有	3.	0.3										石数は認 められな い	河原石 (乱積な 積上げ)													
	第34号墳													磯數若干	河原石若干													
	第35号墳					N-2°-E		3.0×0.5						磯數 仕切石	可原石の 横石列 (石室の一部)	直刀1 刀子2 ガラス小玉305	有	石室東方には 見渡す所では 認められない	12.0 (内径) 1.5 (幅)									
	第36号墳					N-4°-E		3.3×0.4						磯數	可原石の 小口横の機 壁一端通存	刀子1 ガラス小玉36	有	7.0 指定 の内径 1.5 幅										
	第37号墳					N-0°-E		3.4×0.5						木炭細片 磯 仕切石	蓋瓦部のみ 残存、河原 石の側壁		不明											
	第38号墳	古墳とは 認められ ない																										
	第39号墳					N-8°-E								木炭細片 磯 仕切石	側壁基底 部	刀子3 直刀1 刀子2 ガラス小玉337	有一部調査											
	第40号墳					N-7°-W	0.55 (中)							木炭細片 磯	河原石		有	1.2 幅										
	第41号墳					N-5°-W		2.9×0.55						木炭細片 磯	河原石		有	8.0 内径 1.2 幅										
	第42号墳					N-6°-W								木炭細片 磯	河原石		有	7.2 内径 0.9 幅										
	第43号墳					中央石室 N-18°30' -E	西石室2.8×6.1 中央石室2.5×6.6 東石室2.5×6.6 北石室2.5×6.6							木炭細片 磯	木石室が 複合	頭蓋骨	有	11.0 内径 1.6 幅										
	第44号墳					N-20°30' -W	1.5 (中)							木炭細片 磯	河原石 頭蓋、次頭は直 通で認められ ない	頭蓋骨	有	6.0 内径 2.6 幅										
	第45号墳					N-1°30' -E		3.9×0.7						木炭細片 磯	河原石 頭蓋のた め不規	切子玉1 ガラス小玉69	有	南トレシ 子からは 発見なし	12.5 内径 2.1 幅									
	第46号墳					N-9°30' -E	0.5 (中)							木炭細片 磯	頭蓋部 河原石 擦乱著しい		有	南トレシ 子からのみ 発見	0.9 幅									
	第47号墳					N-28°E		4.2×0.7						木炭細片 磯	河原石 (崩落)	直刀残 片1 鐵鋸片 4枚具1	有	円柱 南石室崩落 北石室2.1m の部分で 倒れ	10.5 内径 1.5 幅	被覆色粘 土層まで 掘り込まれ た頂								
	第48号墳					N-5°-W		4.2×0.6						木炭細片 磯	頭蓋部 河原石 (崩落)	90度E4 ガラス 小玉2.1 土玉8 碎 破片	有	樹 根は未調 査	11.0 内径 1.6 幅									

第39号墳
長い河原石の小口は
を除いて石室側壁を
第5章の外側では
同様の石室側壁を示す
成る。成る。成る。成る。
理にはあとづめの理
を入れていくのが石
室構築の第一段階で
あったことがわかる

岩手県・古墳調査内容一覧 (No.4)

項目	古墳No	古 墳												古墳以外の発見遺物				備考 (報告書記載の文面)					
		埴丘の規模				主体部の構造				周辺の構造				古墳築造の推定年	古墳と同時期の遺物	出土遺物	古墳と異なる時期の遺物	出土遺物					
		埴丘の有無	平面形	大きさm	高さm	出土遺物	古年の位置	長軸方向	平面形	大きさm	深さm	掘込み間	床面	石組室	出土遺物	方法	周辺の有無	平面形	大きさm	深さm	出土遺物		
1.五条丸古墳群	第49号墳							N-13°E		0.6(幅)			木炭細片 礫	南壁基底部の河原石(崩壊)	鉄鏃1	有	南側は未調査	7.9(内径) 1.12(幅)					
2.和賀郡江釣子村	第50号墳							N-29°W		4.8×0.6			木炭細片 礫	南壁基底部の河原石(崩壊)	勾玉1 ガラス小玉106	有	南側は未調査	1.6(幅)					
字上江釣子第20 地割地	第51号墳							N-35°W		4.0×0.6			木炭細片 礫	南壁基底部の河原石(崩壊)	鉄鏃57馬具2 鍔金具1 鍔金具2	有	西側以外は未調査	1.2(幅)					
3.昭和37年10月	第52号墳						N-10°30' ○ (方位本場)		4.95×0.6 (幅記入なし)				木炭細片 礫	南壁石を小口様にした南壁の基礎部	文刀2 鉄鏃1 鍔金具3 勾玉4 ガラス小玉28	有	東、南は未調査	1.15(幅)					
4.岩手県教育委員会	第53号墳						N-14°30' -W		4.0×0.7			木炭細片 礫	南壁基底部の河原石(崩壊)	発見されず	未調査								
江釣子村教育委員会	第54号墳						N-27°W		2.9×0.5	0.18 (残存部)		碳多數	川原石	発見されず	有	南不明	13.0 (内径) 1.55(幅)						
5.和賀郡川岸の河岸段丘上	第55号墳						N-12°30' -E		0.4(幅)				散乱状態 著しい	発見されず	有(一部)	南未調査	0.45(幅)						
6.11基(他に川原石等の分布地点などの50基)	第56号墳												河原石の散在のみ 石塁と判斷できず										
7.「猪谷地、五条丸古墳群」 (増補算刊、昭53)	第57号墳						N-1°30' W		1.5×0.4 (一部)			仕切石 礫(少量)	石室透殘のみ	発見されず		確認できず							
	第58号墳						N-14°E		2.1×0.5 (一部)			石群	河原石	発見されず	有	南不明	6.27 (内径) 1.35(幅)						
	第59号墳												石室透残と 考えられず	認められず									
	第60号墳						N-20°30' -E		2.7×0.4				河原石	小口様の配列が良好に保存	発見されず	有	東は未調査	4.0(内径) 1.15(幅) (西側のみ)					
第 61 号	古墳とは 見られない												河原石										
	第62号墳						N-6°30' -W		2.8×0.57				基底部若 干残存	発見されず		認められず							
第 63 号	古墳とは 見られない												河原石										
第 64 号	古墳とは 見られない												河原石										
	第65号墳								0.4 (推定)			磚數	石列渦乱	刀子片	有		3.0~4.0 (内径)	黄褐色粘土 層に乏しい					
	第66号墳						N-31°W	青削1mの複合 し青削約3m も空削部	3.1×0.7				磚数 河原石 等	青削1mの複合 し青削約3m も空削部	青刀1 刀子片1 ガラス小玉80土玉25 4土80土玉25 砂輪車1	有	南は7m 右切れる 円形	8.0(内径) 1.2(幅)	未調査				
第 67 号	古墳とは 見られない																						
第 68 号	古墳とは 見られない																						
	第69号墳																						
	第70号墳																						
	第71号墳																						
第72号墳	全く認められない																						
	第73号墳																						
	第74号墳							N-3°-W (路)		2.1×0.44													
	第75号墳							N-1°-E		1.5×0.45			木炭細片 礫	河原石	刀子片1 ガラス小玉8	有(一部)		1.25(幅)					
第 77 号	古墳とは 見られない									1.5×0.45			青褐色粘土 層に乏しい	磚少々	河原石	刀子片1 ガラス小玉8	有(一部)						
第 78 号	不 明																						
	第79号墳																						

岩手県・古墳調査内容一覧 (No.5)

古墳名 項目	古 墳																		古墳以外の発見遺構				備考 (報告書記載の文面)					
	古墳名	墳丘の規模				主体部の構造									周辺の構造				古墳と同時期の遺構	出土遺物	古墳と異なる時期の遺構	出土遺物						
		墳丘の有無	平面形	大きさm	高さm	出土遺物	主体部の位置	長軸方向	平面形	大きさm	深さm	掘込み面	床面	石組室	出土遺物	葬法	周辺の地盤	平面形	大きさm	深さm	出土遺物							
1. 角 鐘 古 墳 2. 鮎沢町南田字 塚田 3. 昭和49年10月 昭和50年11月 4. 鮎沢町教育委員 会 5. 鮎沢畠状地の中 央部 6. 1基 7. 角塚古墳調査報 告 (1976)	有	前方後円 後円部墳 頂に墓石 の可能性 大 前方部が やや外方に ふくらみ 主軸長 44.4- 45.6	前方部 縦10-15 長さ16.1- 17.3	前方部 後内部 縦28.3	後円部 4.41	古墳の現 状範囲確 認のため の調査で あること から内部 の調査は 実施され ていない										有	前方部に むかって すばまる 卵形。も しくは楕 円形	前方部 上幅 3-4 後内部 上幅8.45 -6.2 下幅4.2 -4.5	0.5-0.3		埴輪群の 特徴から 判斷して 5世紀末 降っても 6世紀初 頭							
1. 着 助 古 境 2. 岩手郡西根村大 更39塚第7番地 3. 昭和35年8月 4. 岩手大学 5. 丘陵際の台地先 端部(畠地、採 草地) 6. 2基 7. 岩手大学学芸学 部研究年報第18 巻 (1961)	第1号墳 (大部分 破壊)	有	円形	径12-13	1	須恵器・錫瓶 中心に近 く若狭西 寄り		長方形	南北 3.6	掘乱のた め不明	周囲の地 表面より 10cm下が る。	敷石 (又は 夢大の川 原石) 木炭粒	土師器・壹 鉄劍・鐵輪・鐵 盾王 直刀・刀子 (21 cm) 木炭粒	主体は床 石を安置する 斜面に 木炭を敷き て安置した と考 えられる。 その際、 斜面は所 々の角に 土師器の 跡に歯食 跡があり て埋められ たと考 えられる。							末期古墳 の性質を 多分にも つもので 奈良時代 より金力 得不到 るもの 浮島古墳 より新し い。埴輪 よりは古 いしかし 金力時代 のものと 考えられ る。			1. 本古墳は地表衝を 若干掘りこぼめたた けで冢、又は柴火の 川原石を置き並べて 床石としその上に主 体を安置した形式で ある。また須恵器の 出土もある。 2. 小円墳が岩手郡の 古墳の一形式を示す 内容をもち、それが 青森縣八戸市のも と類似することは今 後の東北古代文化の 解明に重要な資料と なりうる。				
1. 楠 堂 古 境 2. 花巻市大字上根 子谷地219 3. 昭和38年(見聞) 4.個人 5. 河岸段丘上の台 地 6. 1基 7. 「和同鏡を出し た陸中国新堂の 古墳群」考古学 雑誌14-7 (1924)	天保年間 に大半の 古墳を破 壊	有 明治38年 以前まで 全形の存 在してい たものは 約2基 (左記の 明治35 年頃の残 存状況と 合致しな い)	円形 (腰彌形)	径 6	0.3-0.4			長方形	南北 1.7	東西 0.9			敷石 (小石) 木炭粒	土師器・壹 刀子 (15cm)	主体は床 石を安置する 斜面に 木炭を敷き て安置した と考 えられる。							1. 斜面より西方20町 許の一本桟と称する 辺にも同形の古墳は 12、3個あるとの事 である。 2. 当地の古墳には石 棺のあるものと無い ものとがあつて玉頭 の埋蔵せられている ものには必ず河銭利 が散かれている。						
1. 見 分 森 古 境 2. 水沢市 3. 昭和33年 4. 水沢市教育委員 会 5. 標高 113mの独 立丘陵上の東西 の尾根部 6. 1基 7. 水沢市史・1 (昭49)	第1号墳	有	椭形	東西11	南北9.5	1.35	葺石 (玉石) 土師器片 (4個 体) 壙…3個体は口 クロ使用、茶 切底、内側処理 のもの。1個体は 底部をへらでの 整形	内部施設 は発見され ない														ロクロを 一切廻ら ず、1つ壙を出 してある事 から平安初期 の造営と みられる			1. 在地の有力者の 墳と見るべきであ る。			
1. 桧 山 古 境 2. 西磐井郡花泉町 桧山 3. 昭和30年 4. 花泉町教育委員 会 5. 宮城・岩手県境 の丘陵地 6. 5基 7. 「日本考古学年 報」3「和賀町 史」参照	第1号墳	有		8	1.4										鉄直刀板片									1. 石室破壊 横穴式横石室底 部残存				
	第2号墳	有		7.5-8.5	1.3										鉄刀柄部破片									1. 石室なし				
	第3号墳	有		4	0.8																		1. 石室の痕跡なし					
	第4号墳	有		6	0.8										社切石 横道部不 鮮明、穴 井石なし									1. 墓形は崩れている				
	第5号墳	有													横道部不 鮮明	小形土師器壙 2												

注) 1. 記載した古墳は報告書(概観・プリント等)によって報告されているものを主にした。

2. 諸書に古墳と呼称されているものでも別愛したものもある。

3. 表中の文面は報告書(概観・市町村史等)の記述文面に延びた。空欄は記述のないものである。

4. 主体部、周辺の計測値のうち、位置によって数値の異なる場合は、最大値を用いた。

5. 斎谷地古墳・八幡古墳・五条古墳については、昭和54年9月10日付で「江釣子古墳群」として国指定となり。更に昭和54年10月19日喜浜古墳も同指定に含まれるよう審議会答申を受けている。

写 真 図 版



A. 宮地遺跡 B. 落合II遺跡 C. 落合I遺跡 D. 力石遺跡 E. 鴻ノ巣館遺跡 F. 中屋敷遺跡

図版 I 江刺市愛宕地区空中写真(新幹線にかかる遺跡)



A.高畠遺跡 B.八幡遺跡

図版II 花巻・石鳥谷空中写真(新幹線にかかわる遺跡)



A .白沢遺跡 B .古館橋遺跡 C .古館駅前遺跡 D .杉ノ上 I 遺跡 E .杉ノ上 II 遺跡

図版 III 矢巾・紫波空中写真(新幹線にかかわる遺跡)

こうすだて
鴻ノ巣館遺跡

1. 調査区中央部より
北方を望む



2. 同南部を望む



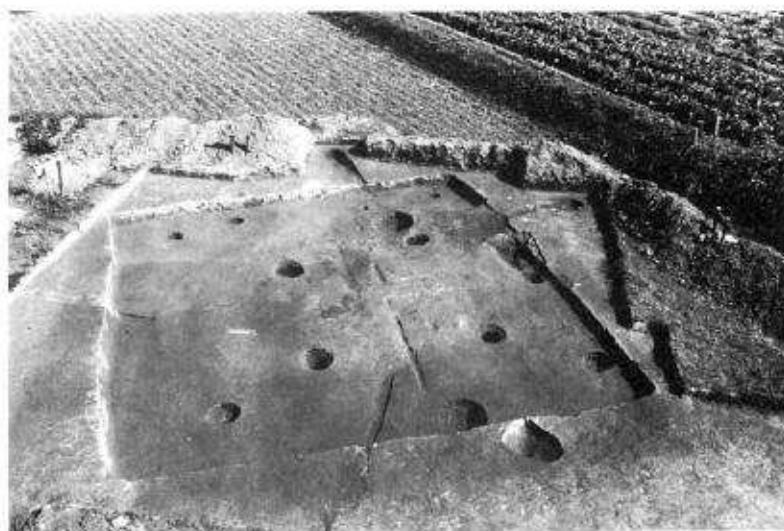
3. FC09住居跡発掘
作業 (南方より)



4. EJ50ピット発掘
作業 (南方より)



図版1 調査区付近の現状および作業風景



1. A F 03住居跡全景
(西より)



2. 刀子出土状況
(南より)



3. 長頸瓶出土状況
(南南東より)

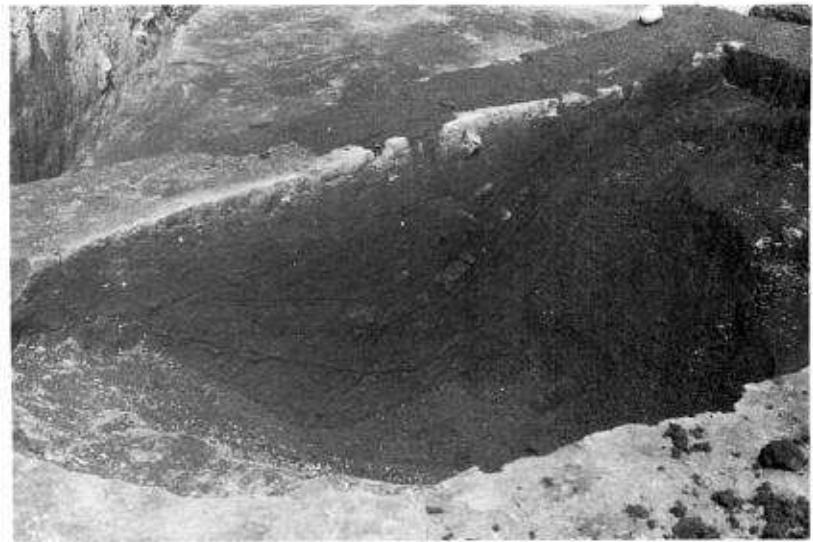
1. FA06住居跡全景
(南東より)



2. 鉄製鋤先出土状況
(南西より)



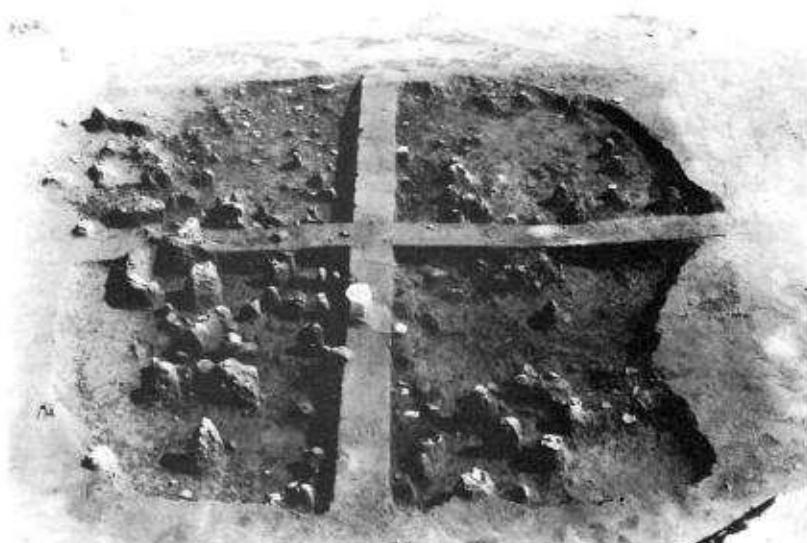
3. P_s土層堆積状況
(南東より)



図版3 FA03住居跡



1 . F C 09住居跡および
F C 06ピット
(北北東より)



2 . 住居跡上層の遺物出土
状況(南より)



3 . P₄内の遺物出土状況
(北西より)

図版4 F C 09住居跡

1. F G03住居跡および
F I 50住居跡全景
(北北西より)



2. F G03住居跡全景
(北北西より)



3. F I 50住居跡全景
(北西より)



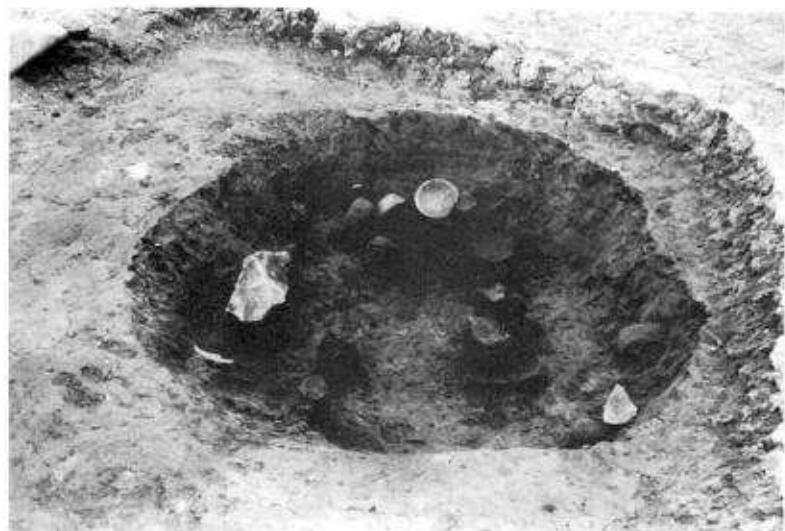
4. F I 50住居跡土錐出土状況
(東より)



図版5 F G03住居跡およびF I 50住居跡



1. I H06住居跡全景（南より。
一部にI H06溝が見える。）



2. P₃の遺物出土状況
(南西より)



3. P₁₃～P₁₅遺物出土状況
(西より)

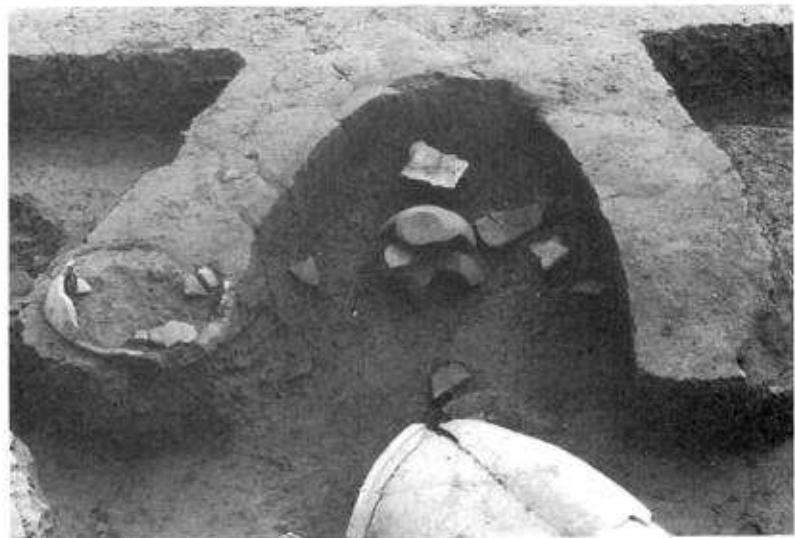
1. J G03住居跡全景
(北西より)



2. かまと付近の遺物出土
状況 (北北東より)



3. かまと部拡大全景
(北西より)



図版7 J G03住居跡



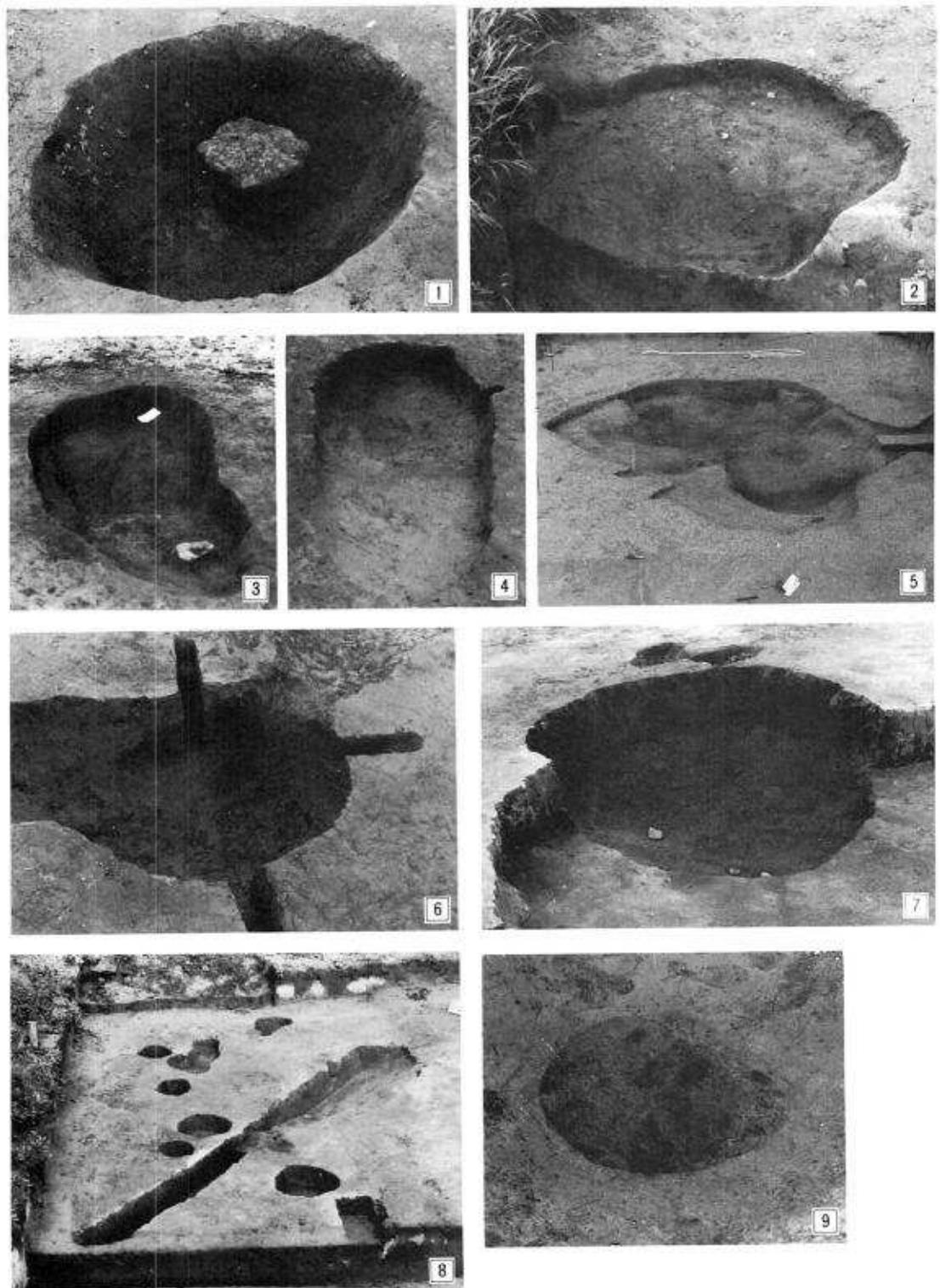
1. J 150住居跡全景
(西より)



2. かまと部拡大
(西より)



3. J 153住居跡全景
(南南西より)



1. EC53ピット 2. BJ06ピット 3. EB03ピット 4. ED50ピット 5. EJ50ピット
6. IJ03ピット 7. FC06ピット 8. MD50 + ME50グリッド内のピット群 9. JH03ピット



1. JA03溝、JA06溝、

J03ピット、

JA03ピット(1)(2)

(南北西より)



3. BJ06溝西部および

BJ06ピット、

CA06ピット

(南南東より)



2. LA06溝

(南南西より)



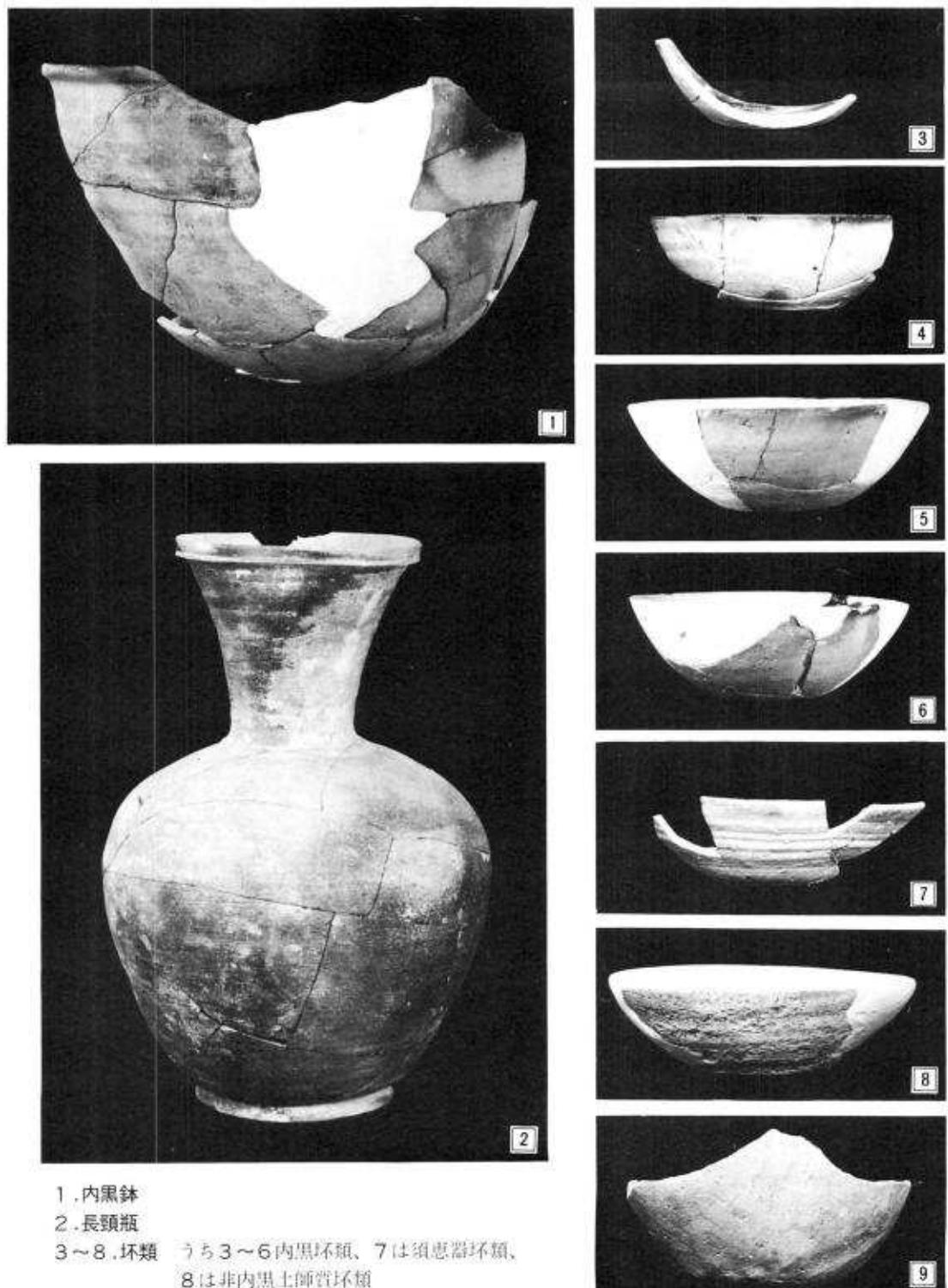
4. EJ53住居跡遺物出土状況

(南南東より)

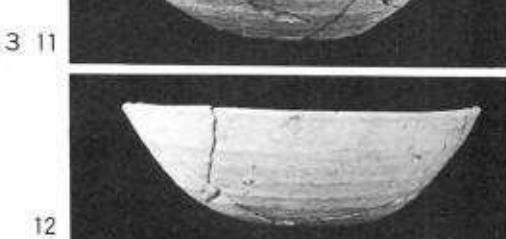
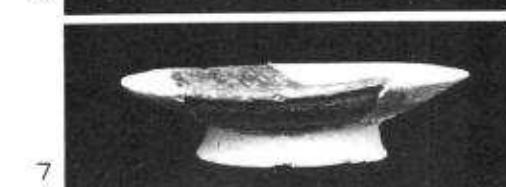
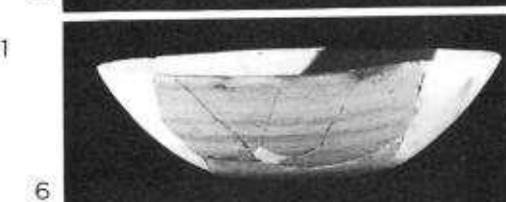
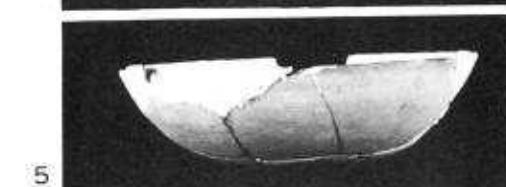
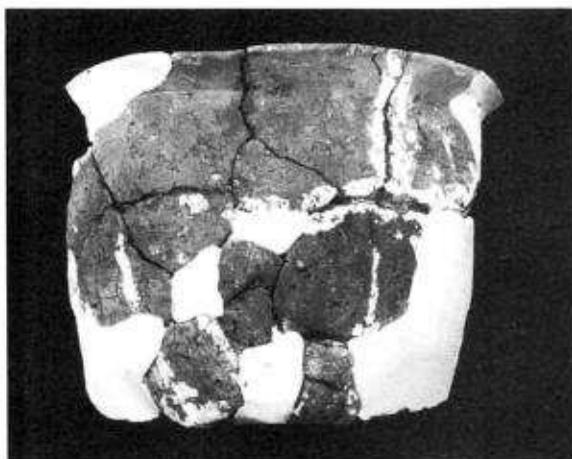


5. BJ06溝東部疊出土状況(西北西より)

図版10 EJ53住居跡およびその他の溝、ピット類



1. 内黒鉢
 2. 長頸瓶
 3~8. 环類 うち3~6は内黒環類、7は須恵器環類、
 8は非内黒土師質環類
 9. 長胴カメ 脊体下部

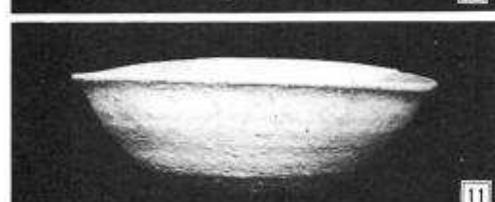
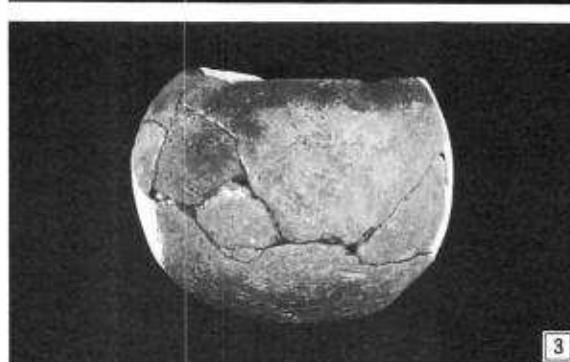
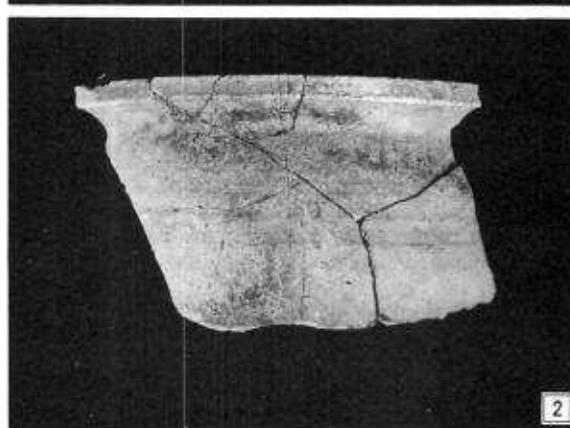


1～3.長胴カメ類 2のみロクロ使用

4～7.内黒坏類 7は高台付

8～12.非内黒土師質坏類

図版12 FA06住居跡出土焼物類(2・3約 $\frac{1}{2}$, 14～12約 $\frac{1}{3}$)



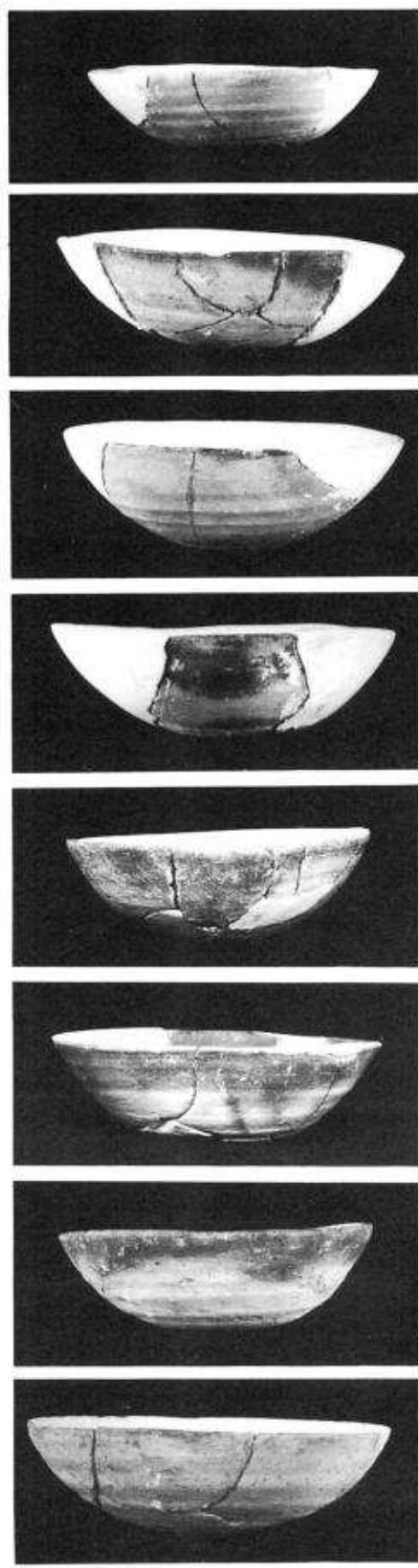
1.小型カメ ロクロ口使用

2.長胴カメ ロクロ口使用、口辺部破片

3.球型土器 4.ミニチュア土器 5.壺

6~13.環類 6~8.内黒环類 9~12.非内黒土師賞环類 13.須恵器环類

図版13 FC09住居跡出土の焼物類(1~13約1/2)



1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

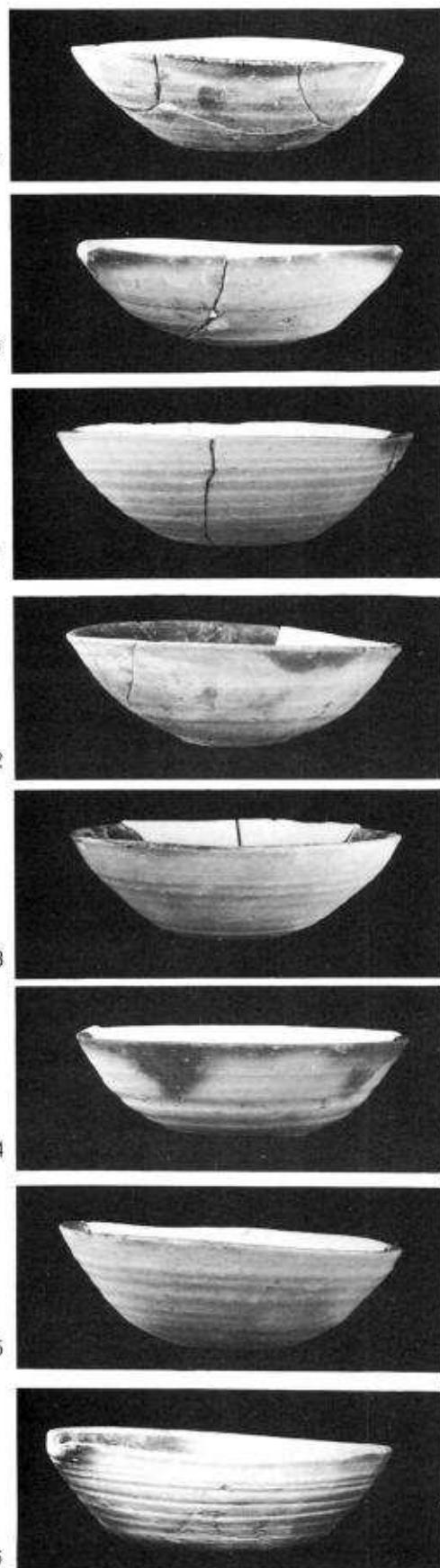
12

13

14

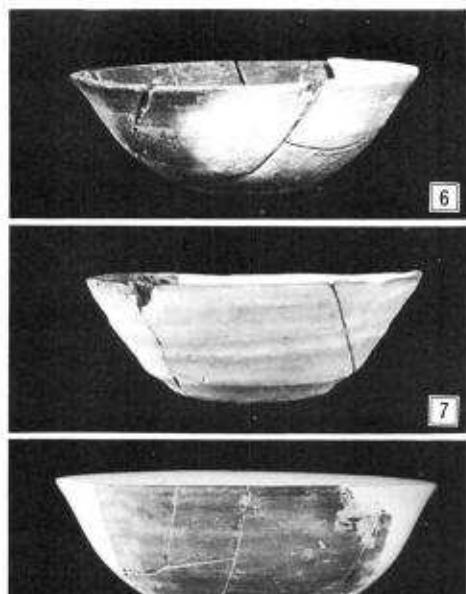
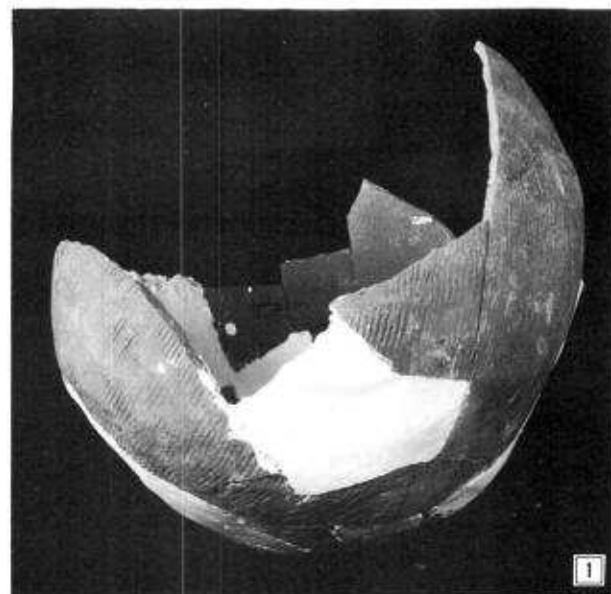
15

16



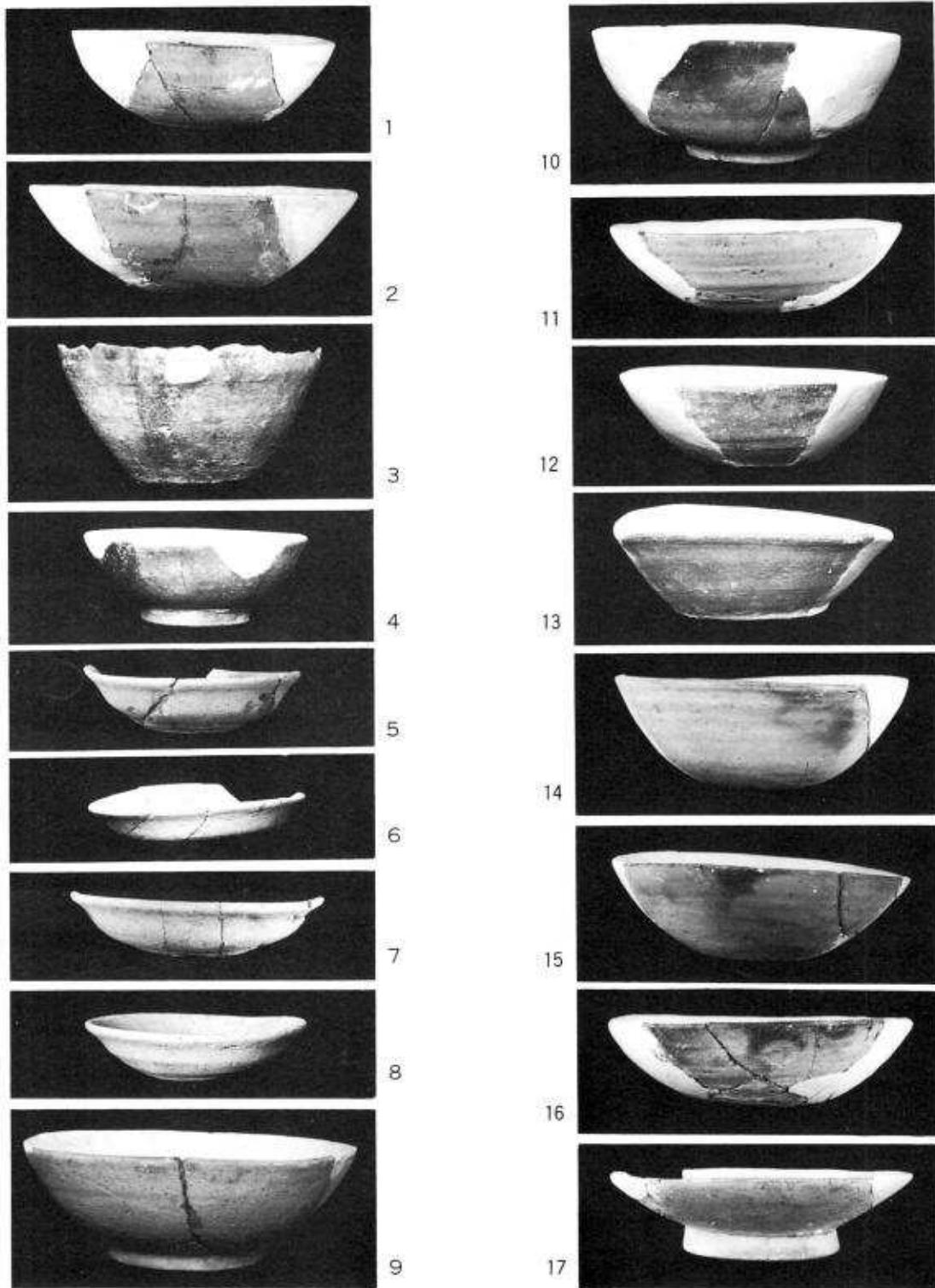
1～16.内黒坏類(16は図版18-12の坏と同じ)

図版14 F C09住居跡出土の焼物類(約1/2)



1～3・6～13. F 150住居跡 4・5. E J 53住居跡 1.須恵器壺 2～13.环類
うち4～8.内黒环類 2・3・9～13.非内黒土師質环類 3は高台付环

図版15 F 150住居跡・E J 住居跡出土の焼物類(1約1/3、2～13約1/4)



1~2. F G06住居跡 内黒環類

3. ◇ 小型カメ下半部

4. I H06住居跡 内外黒高台付坯

5~8. ◇ 小型非内黒環類

9~10. ◇ 内黒高台付坯類

11. J I 53住居跡 内黒環

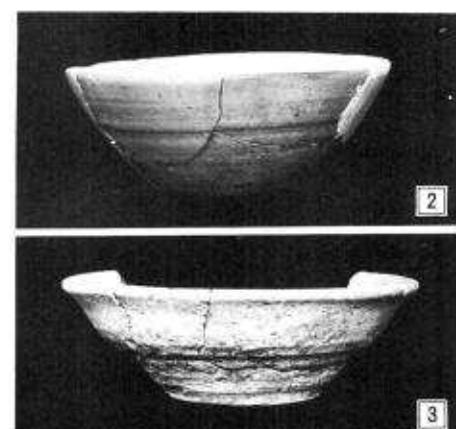
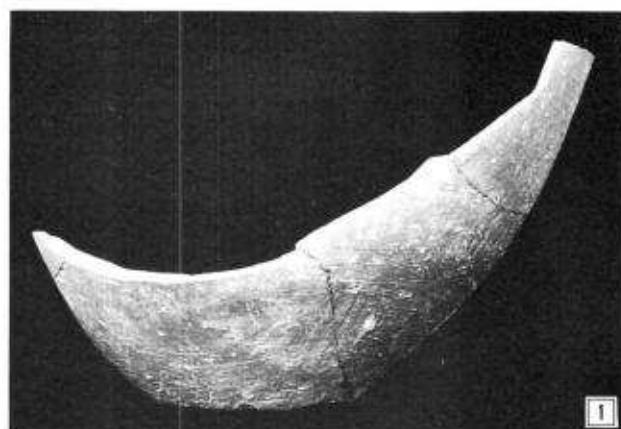
12. ◇ 須恵器环

13. B J 06ピット ◇

14. ◇ 内黒環

15~16. E・F区(16はF C09住居跡検出時)内黒環類

17. J B 06グリッド 内黒高台付坯



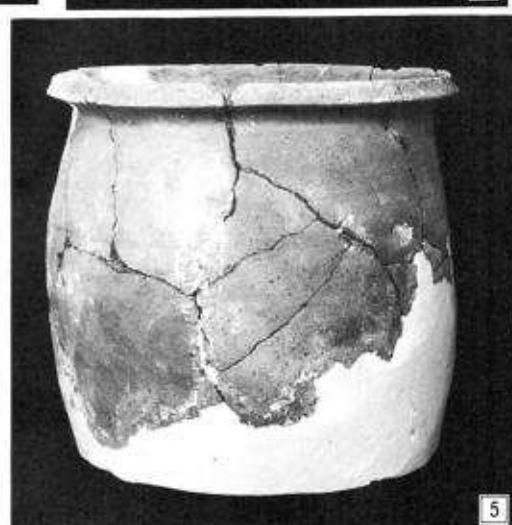
2



3



4



5



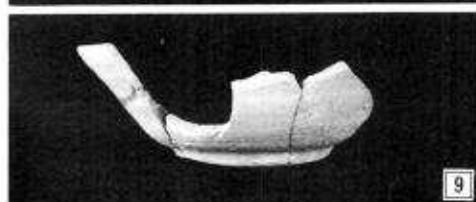
6



7



8



9

1～5. J G03住居跡 6～8. J I 50住居跡

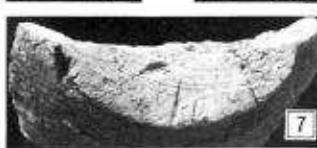
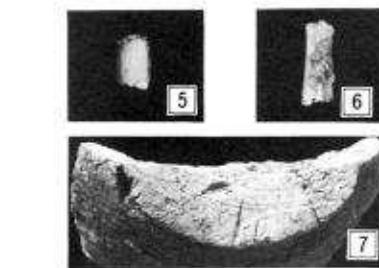
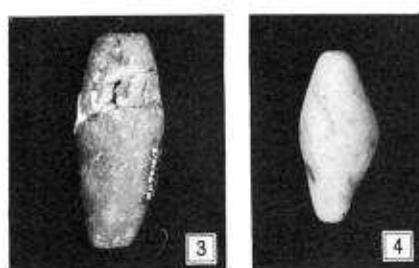
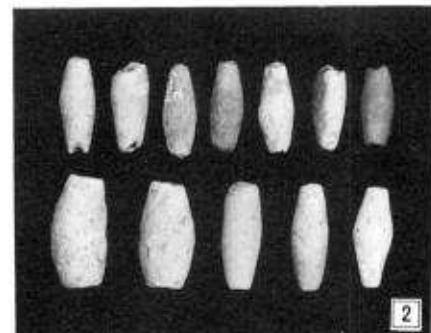
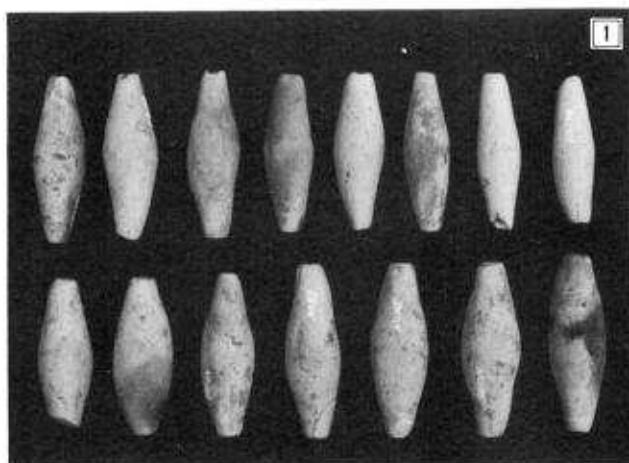
1.須恵器壺 4・5.長胴カメ 口クロ使用

6.小型カメ類 口クロ使用

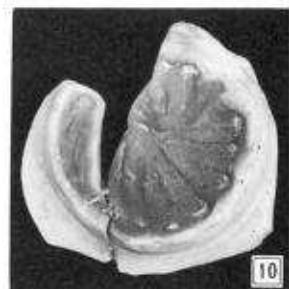
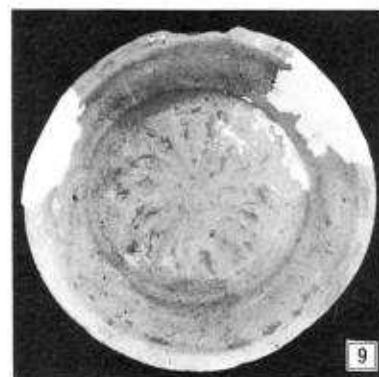
2・3・7～9.环類 うち2・7は内黒环類 3・8・9は

須恵器环類 3は図版18-11と同一個体

図版17 J G03住居跡・J I 50住居跡出土の焼物類 (1～3・6～9 約1/2, 4 約1/3, 5 約1/4)



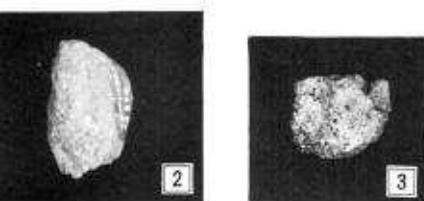
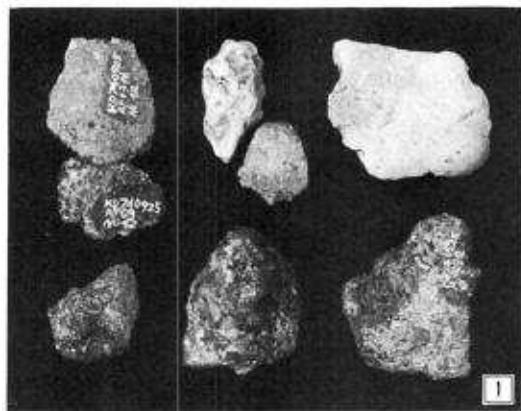
- 1～5. 土錘
 1. F I 50住居跡
 2・5. F C 09住居跡
 (但し5は検出時
 出土)
 3. F G 06住居跡
 4. F A 06住居跡
 6. 骨片
 1 H 06住居跡 P,
 7. 痕痕のある小型カ
 メ類底部
 J G 03住居跡



8～10. 高台付壺類の高台部付着状況 8・9. F C 09住居跡 10. F 区

11. 底面中央部に渦の中心が見られる壺 J G 03住居跡 12. 「亢」の墨

書のある内黒壺 F C 09住居跡

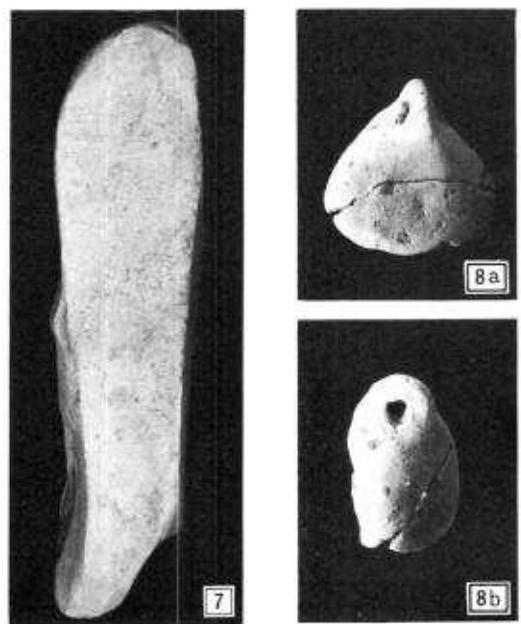
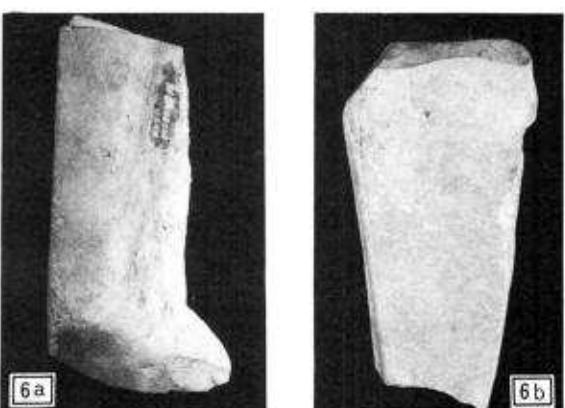
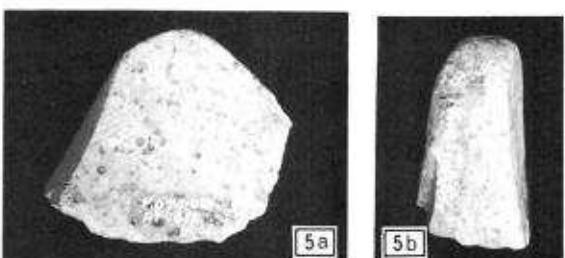
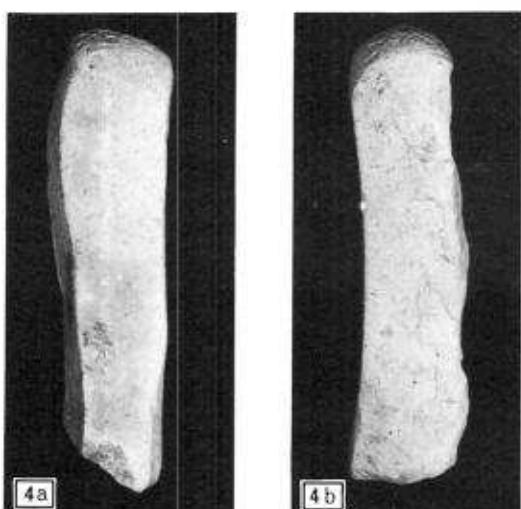


1～3.土製トイゴ羽口破片

1.A F 03住居跡

2.F区

3.J G 03住居跡



4～7.砥石および類似石片

4a・b.J I 53住居跡

5a・b.A F 03住居跡

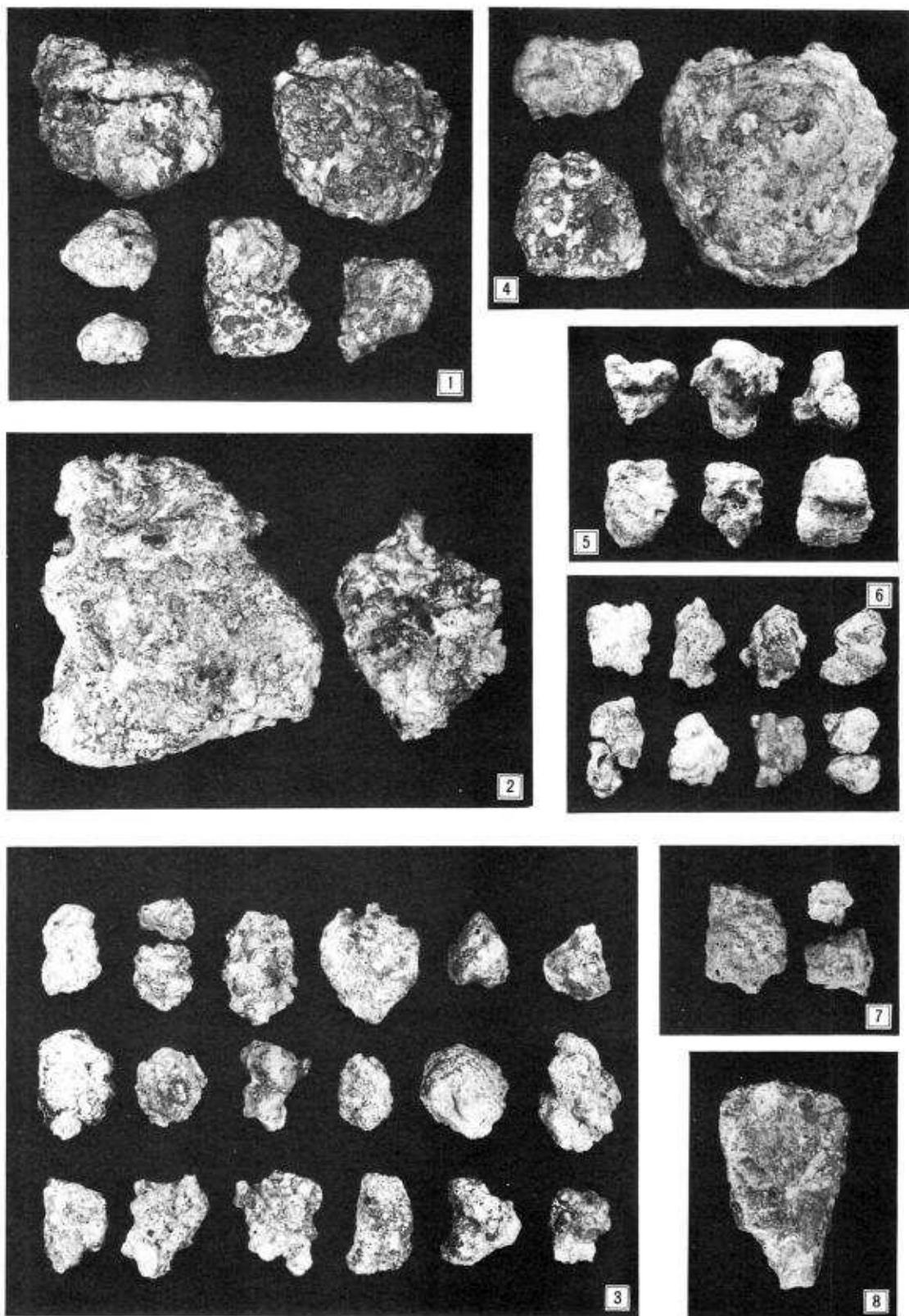
6a・b.M D 503ピット

7.J I 50住居跡

8a・b.土鈴 F区

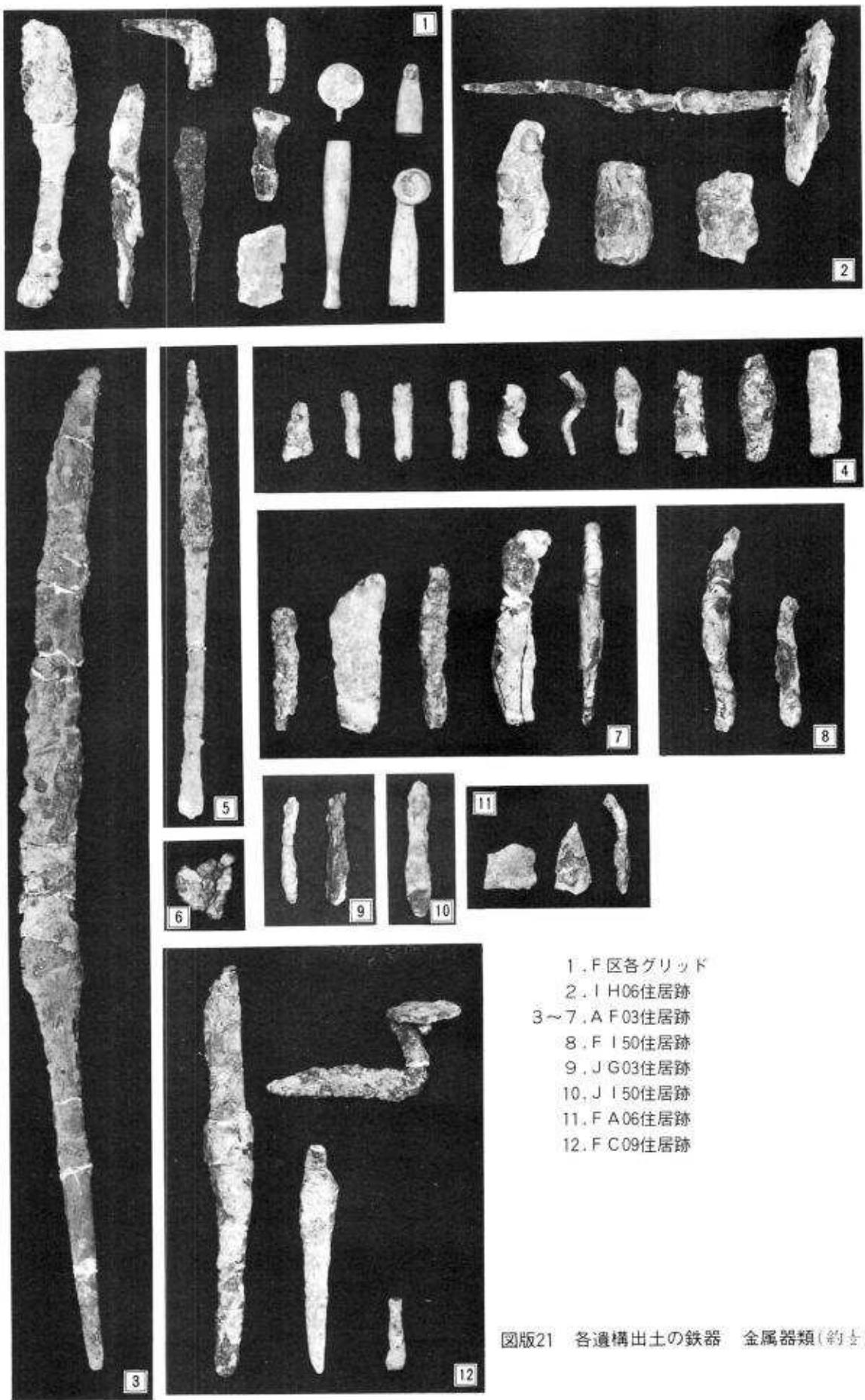
9.土製品2種 A F 03住居跡

図版19 各遺構出土の土製品、石製品類(約 $\frac{1}{2}$)



1・3.A F 03住居跡 2.F C 09住居跡 5.F A 06住居跡
6.J G 03住居跡 7.I H 06住居跡 4.F区 8.I F 03グリッド

図版20 各遺構出土の鉱滓類(約1/2)

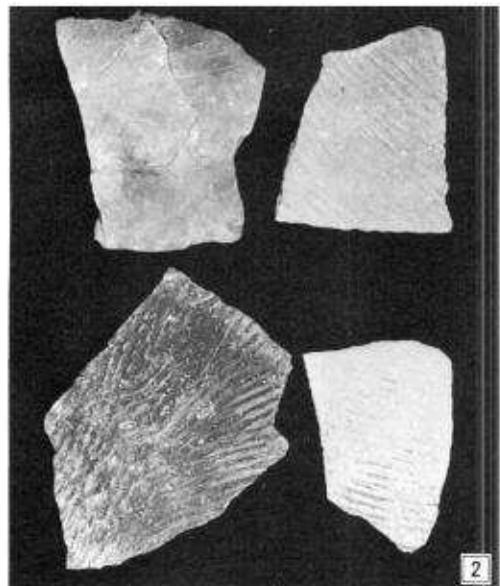


1. F 区各グリッド
 2. I H06住居跡
 3~7. A F03住居跡
 8. F I 50住居跡
 9. J G03住居跡
 10. J I 50住居跡
 11. F A06住居跡
 12. F C09住居跡

図版21 各遺構出土の鉄器 金属器類(約1)



1



2



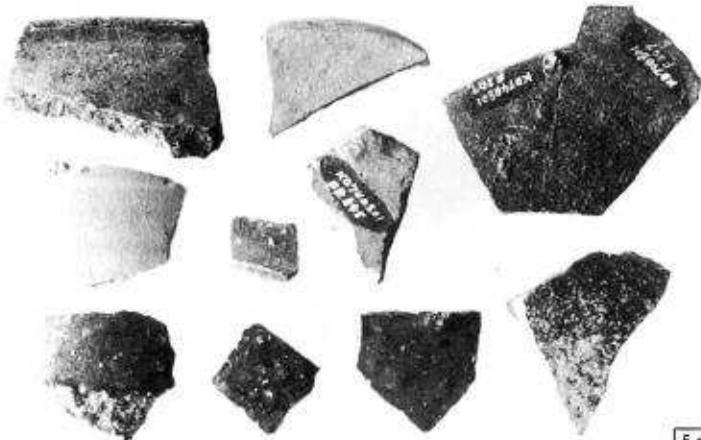
3



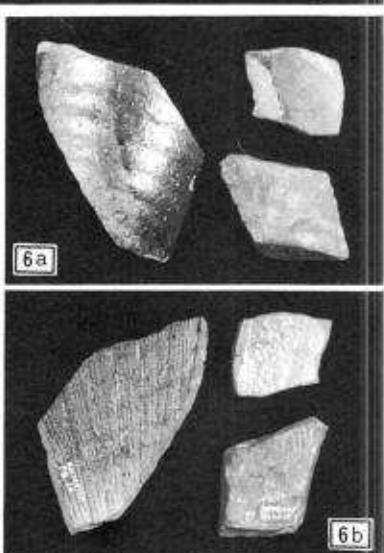
4a



4b



5a



小型神像



6a



6b



5b



仏像

8

5～8.近世中期以降
7は土製品、他は全て陶器

1～4.平安時代 1.鉄製鋤先金具 FA06住居跡 2.須恵器片 AF03住居跡

3.炭化野桃種子 IH06住居跡 4.炭化米 FC09住居跡

図版22 調査区内出土の各種遺物(1・2・5～7約1/2, 8約1/3, 3約1/4, 4約1/2)

たか ばたけ
高 畑 遺 跡

1. 調査前遺跡近景
(北より)



2. 工事終了後遺跡近景
(北西より)(昭和54
年6月18日撮影)



3. グリッド設定作業



図版 1

1.FE531住居跡



2.同上炉跡



3.上・FE56炉跡
下・FE532炉跡



図版2

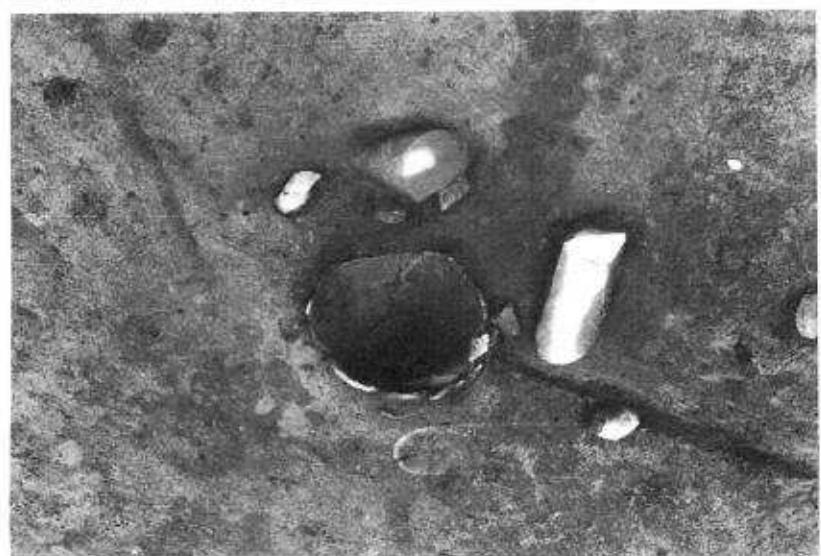
1. F E 56 炉跡



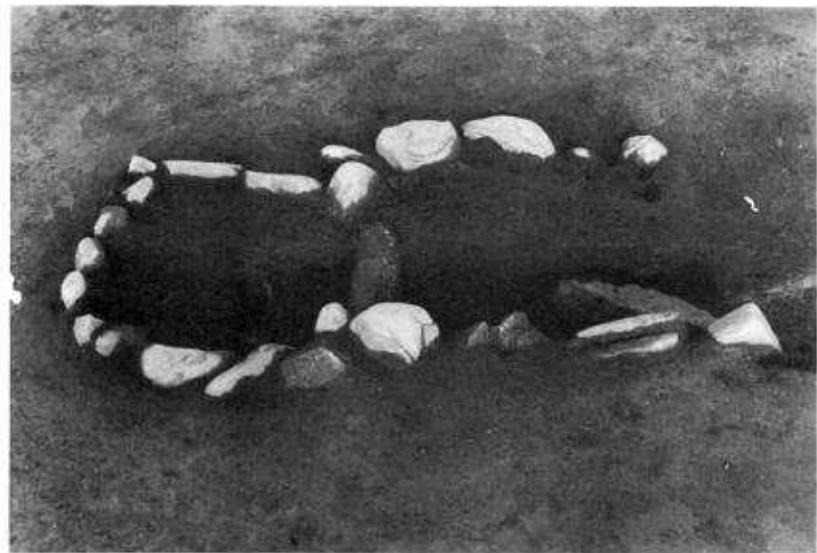
2. F J 50 炉跡



3. 同上



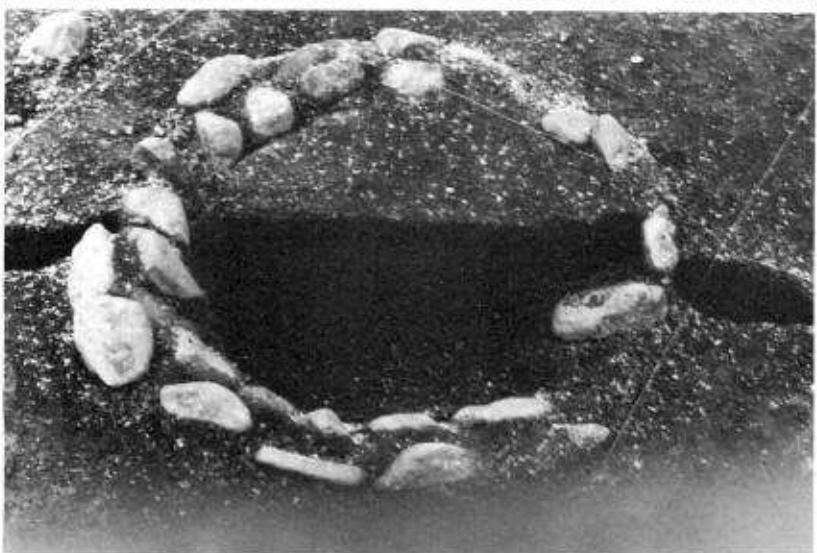
図版 3



1 . F J 56 炉跡(住居跡)



2 . F I 56 炉跡



3 . G B 53 炉跡

1. F G50住居跡



2. 同上周溝



3. 同上土器出土状況



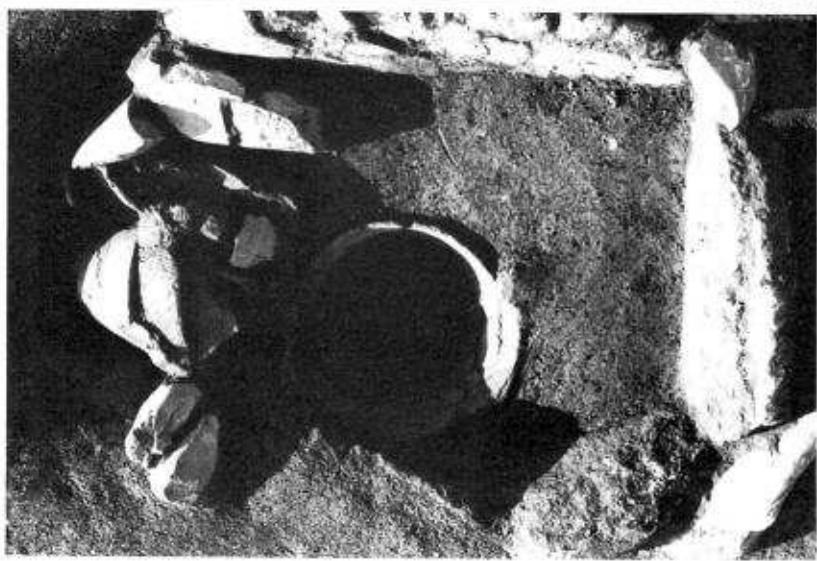
図版5



1. F G50住居跡ピット11
(剝片出土状況)



2. F G50住居跡炉跡



3. 同上

1. G A 56住居跡

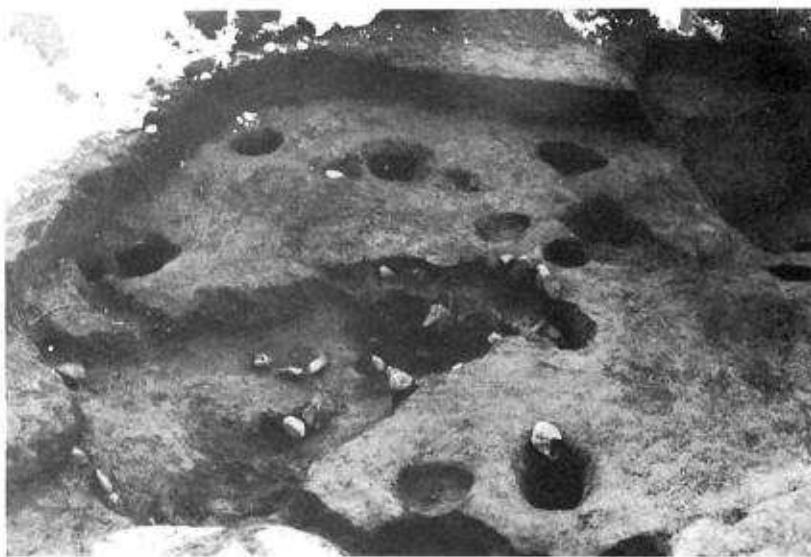


2. 同上土器出土状况



3. 同上炉跡





1.G D 03住居跡



2.同上土器出土状况



3.同上

1. G D 03住居跡炉跡



2. 同上埋設土器



3. 同上





1. G E 53住居跡

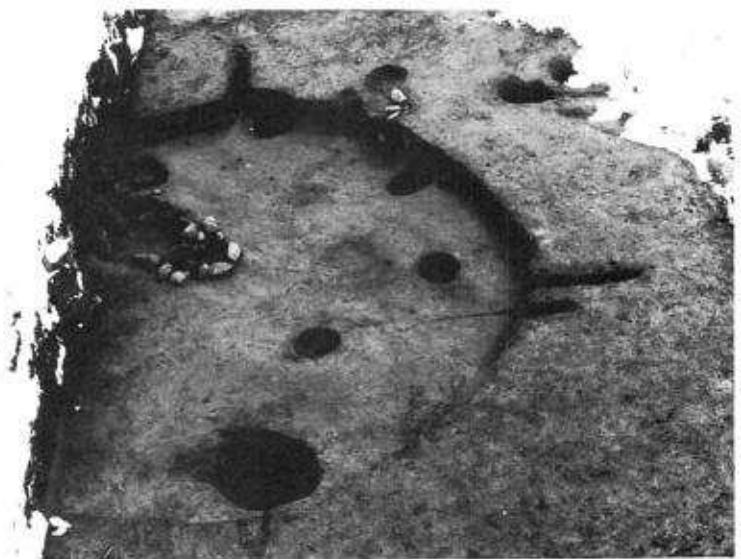


2. 同上炉跡



3. 同上埋設土器

1. G H 56住居跡



2. 同上炉跡

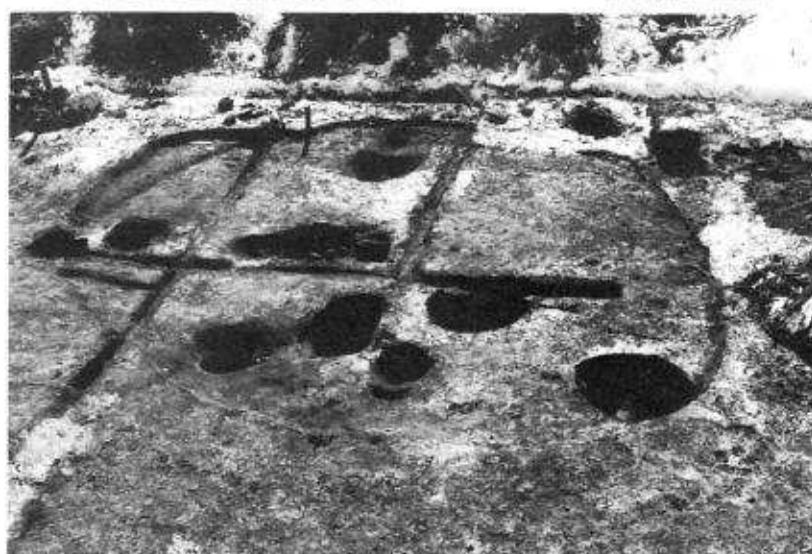


3. 同上埋設土器





1. G H 56住居跡
炉跡埋設土器



2. G I 50住居跡



3. 同上炉跡

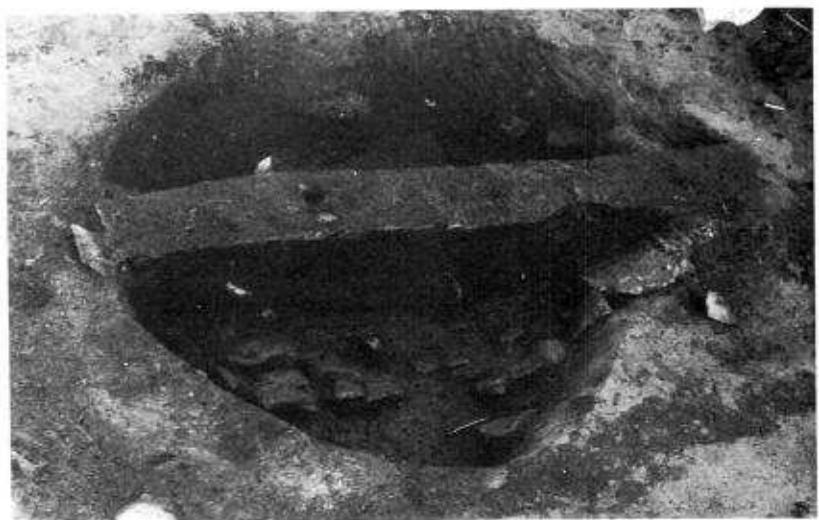
1. F J533ビット



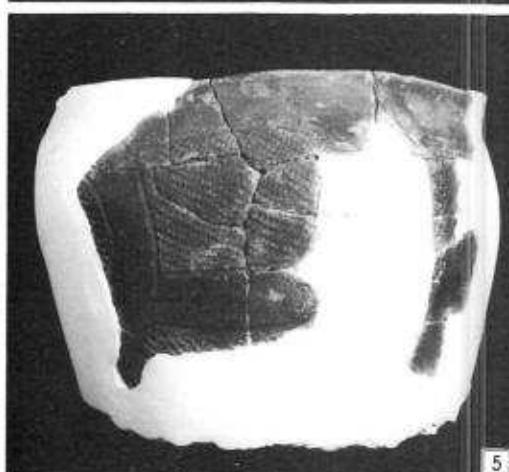
2. 上・F J531ビット
下・F J532ビット



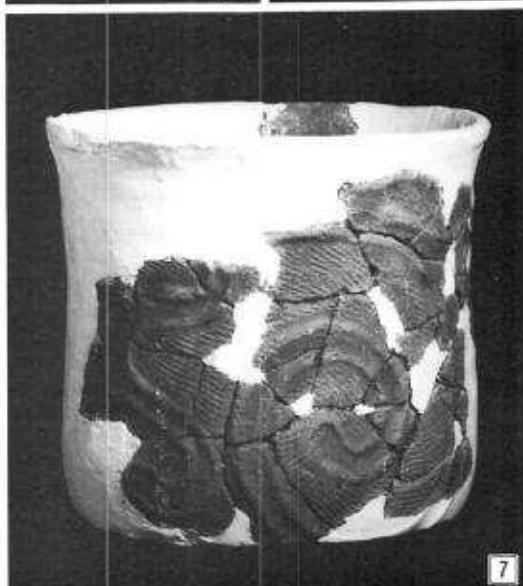
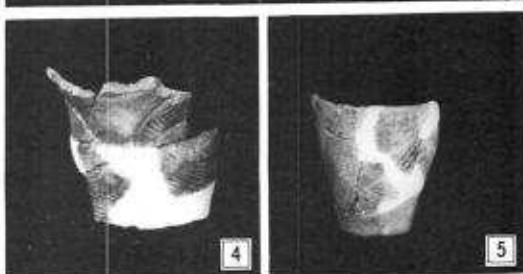
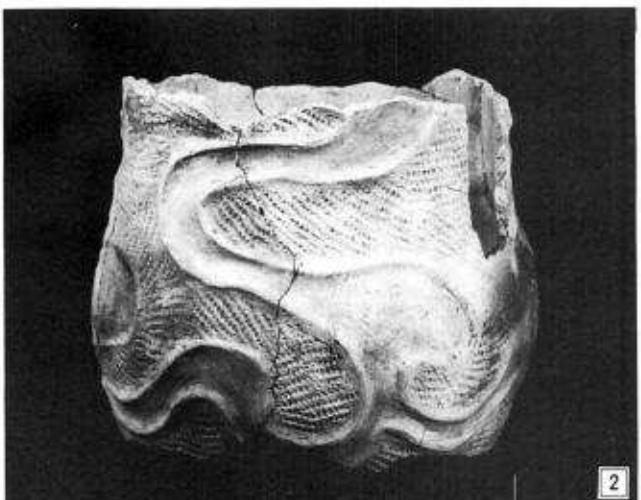
3. F J531ビット
土器出土状況



図版13



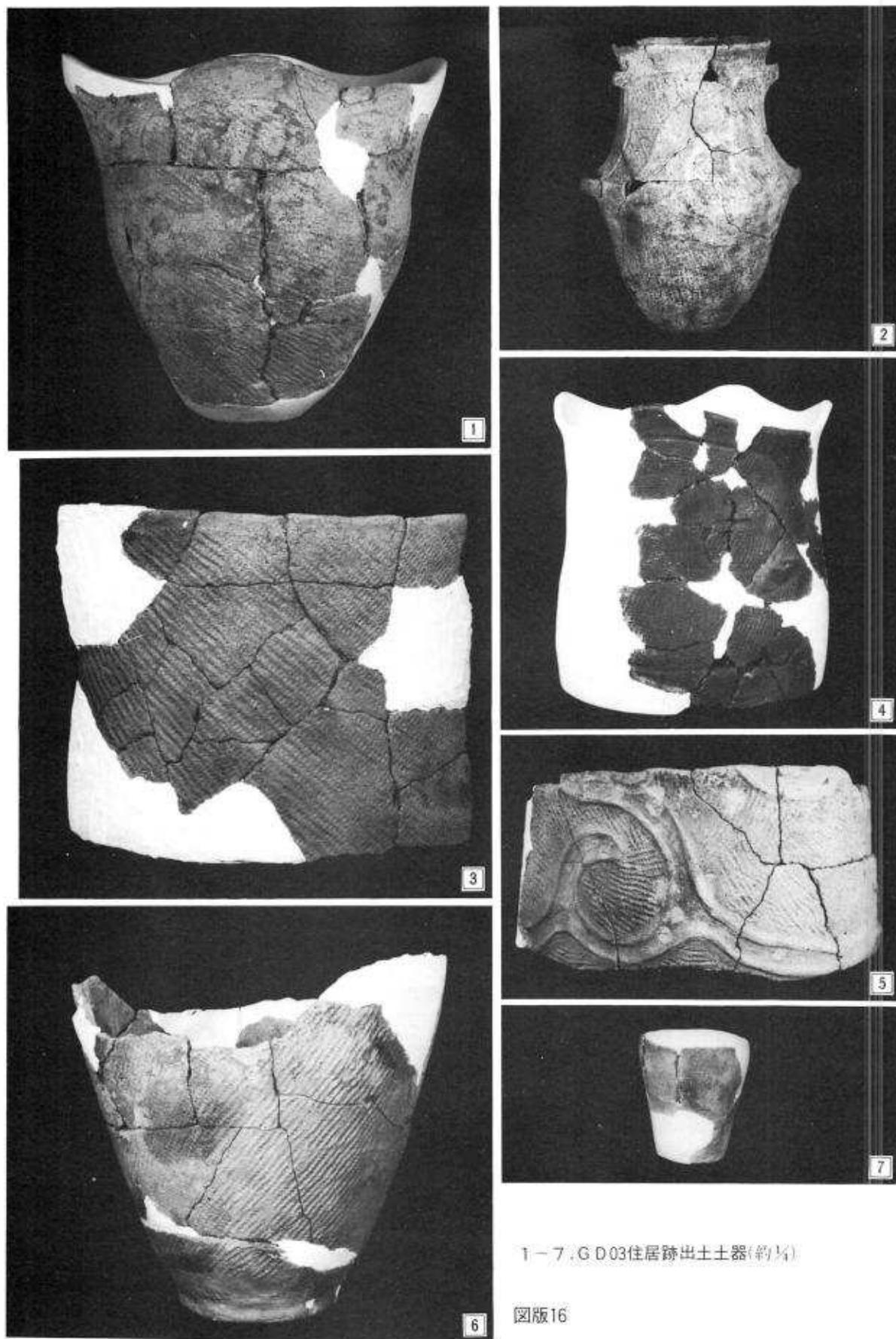
1・2.F E531住居跡出土土器(約 $\frac{1}{4}$)
3・5.F G50住居跡出土土器(約 $\frac{1}{4}$)
6.F J50炉跡出土土器(約 $\frac{1}{4}$)
7.F J56炉跡(住居跡)出土土器(約 $\frac{1}{4}$)



1 . F E 56 炉跡出土土器(約1/4)

2 . F I 56 炉跡出土土器(約1/4)

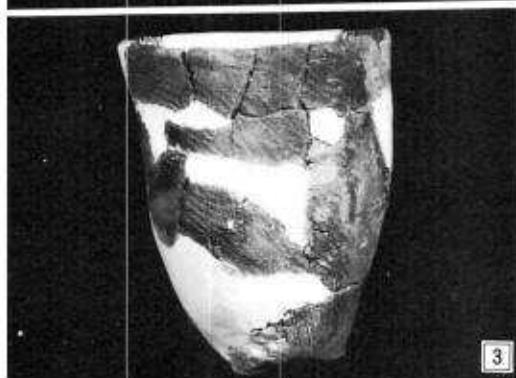
3 - 8 . G A 56 住居跡出土土器(約1/4)



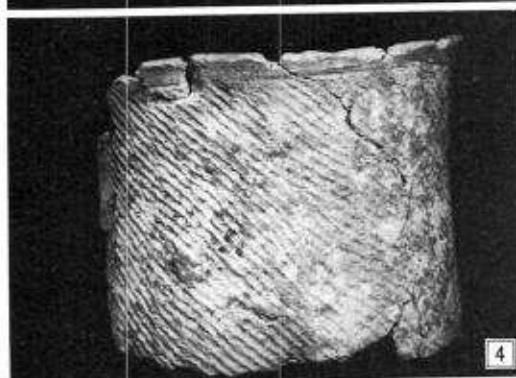
1-7.GD03住居跡出土土器(約1/4)



1



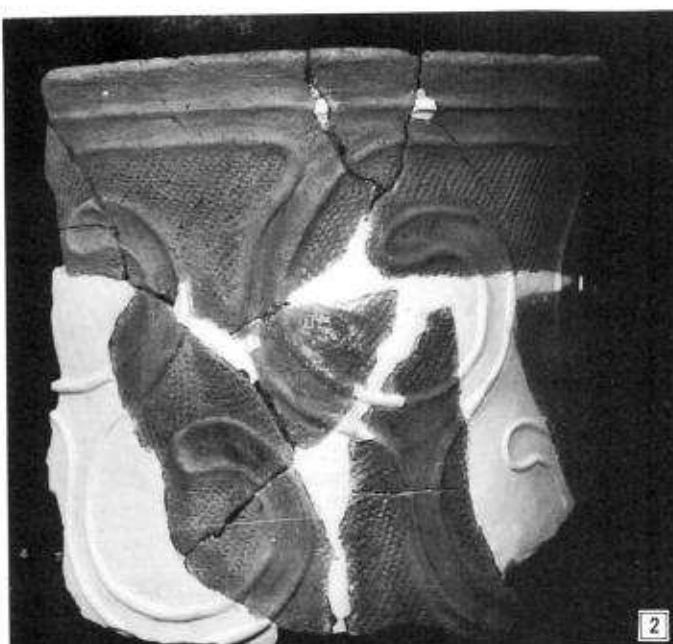
3



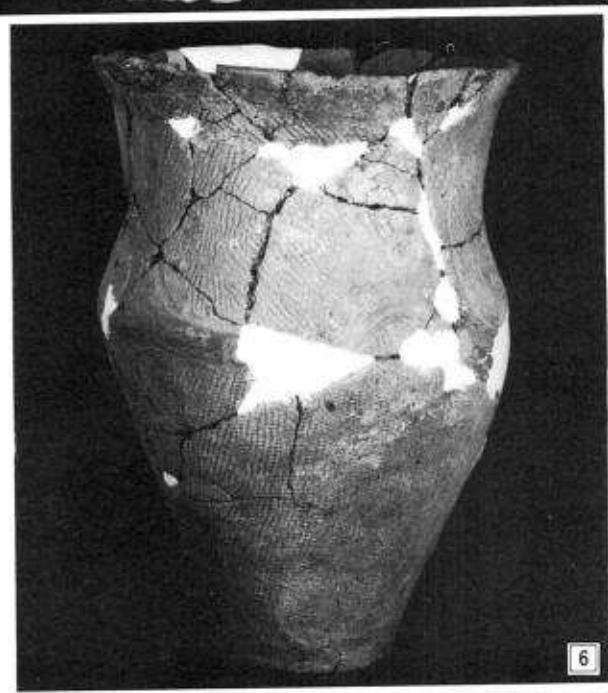
4



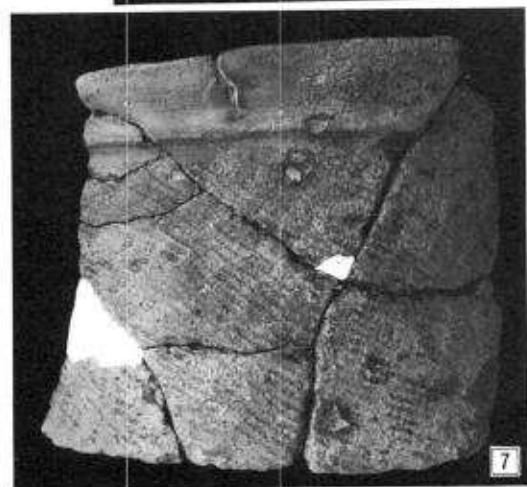
5



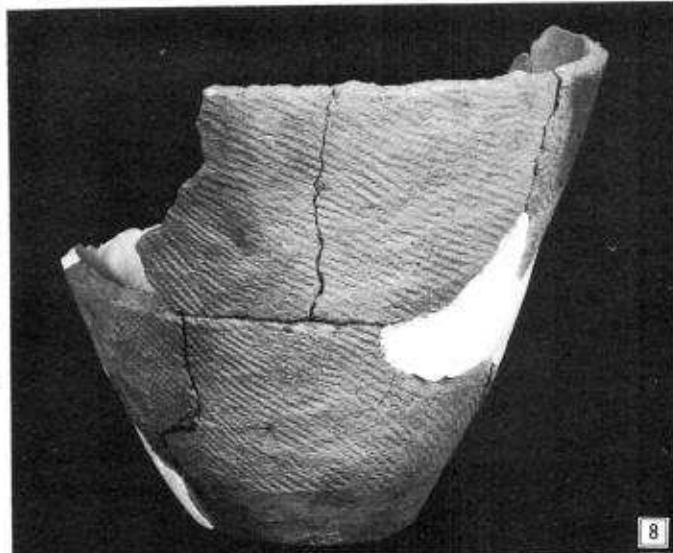
2



6



7



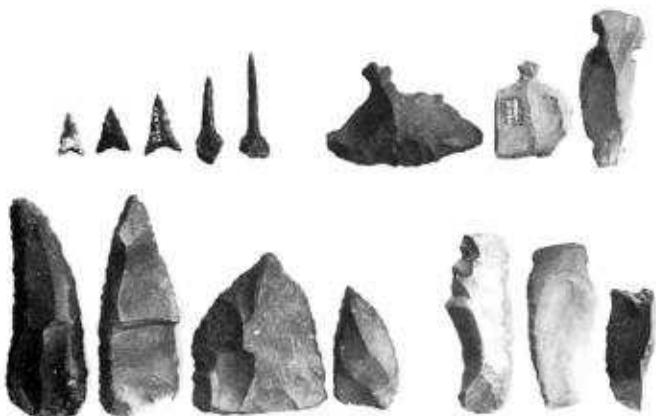
8

1・2.G E 53住居跡出土土器(約 $\frac{1}{4}$)3・5.G I 50住居跡出土土器(約 $\frac{1}{4}$)

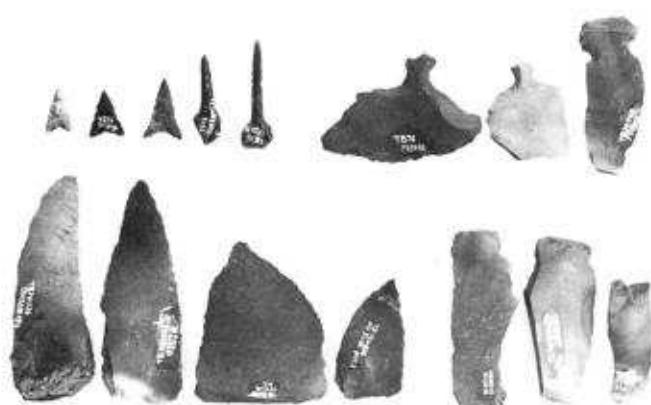
図版17

6.G H 56住居跡出土土器(約 $\frac{1}{4}$)7.F J 531ピット出土土器(約 $\frac{1}{4}$)8.F J 533ピット出土土器(約 $\frac{1}{4}$)

1. 石器(約1/2)



2. 同上裏面



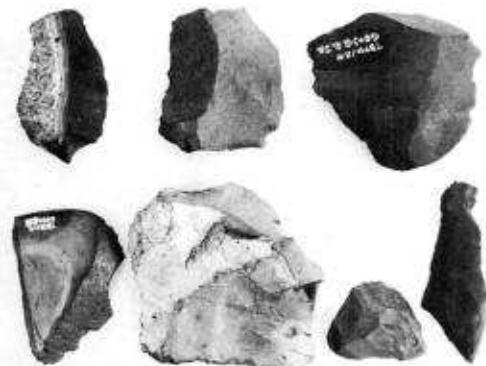
3. 石器(約1/2)



4. 同上裏面



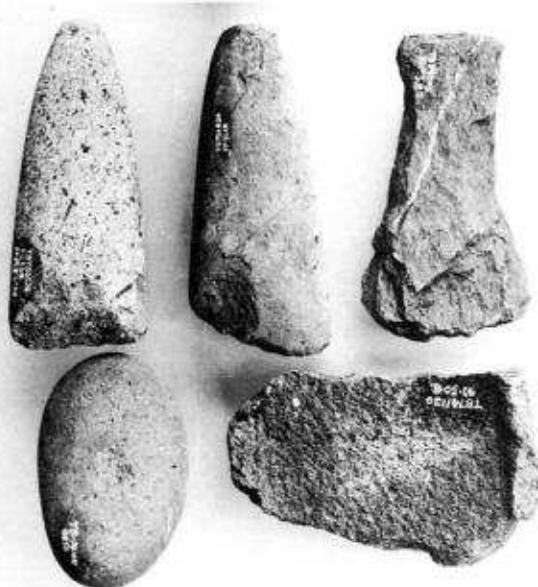
1. 使用痕のある剥片(約1/3)



2. 同上裏面

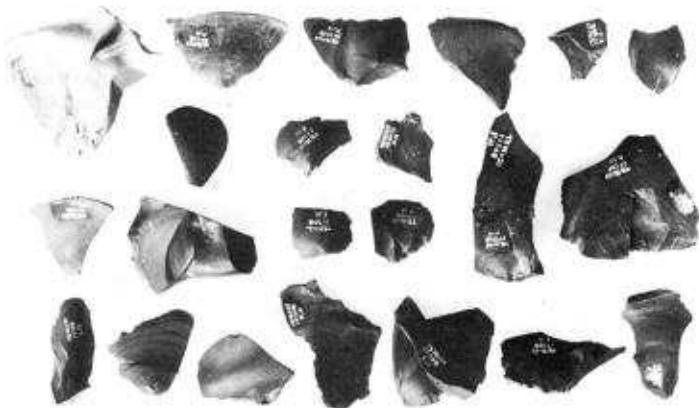


3. 石器(約1/3)

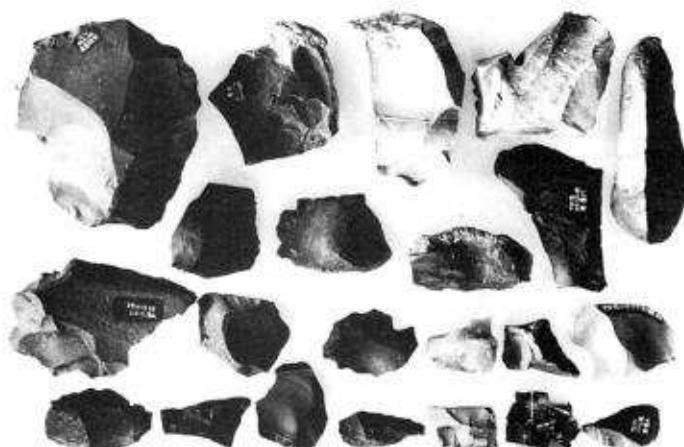


図版19

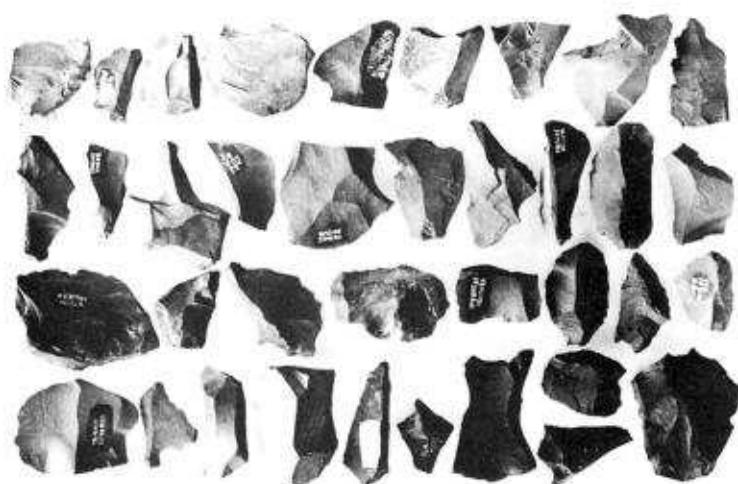
1. F G50住居跡床面及び
周溝出土剥片(約%)



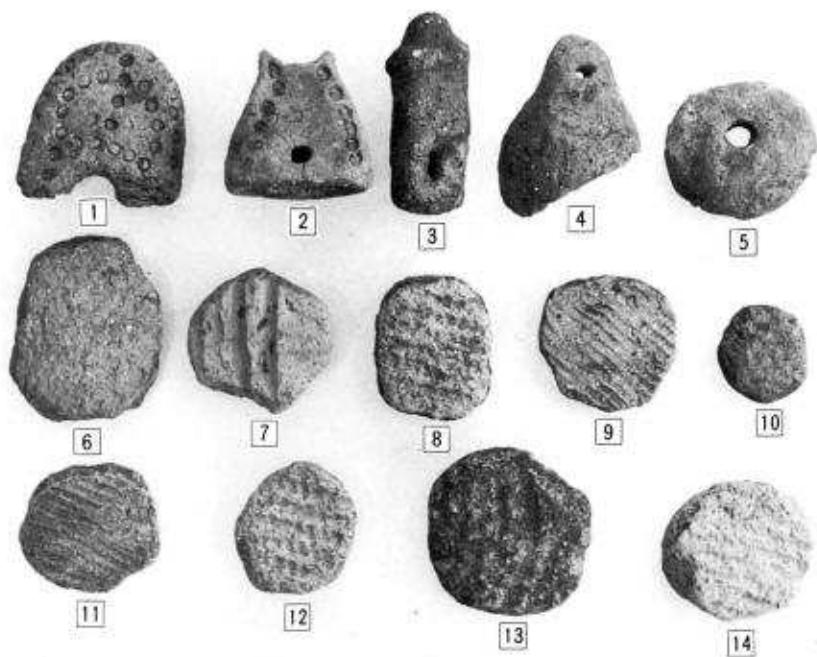
2. 同上



3. F G50住居跡ピット11
出土剥片
(約%) (接合不能)



1. 土製品(約1/2)

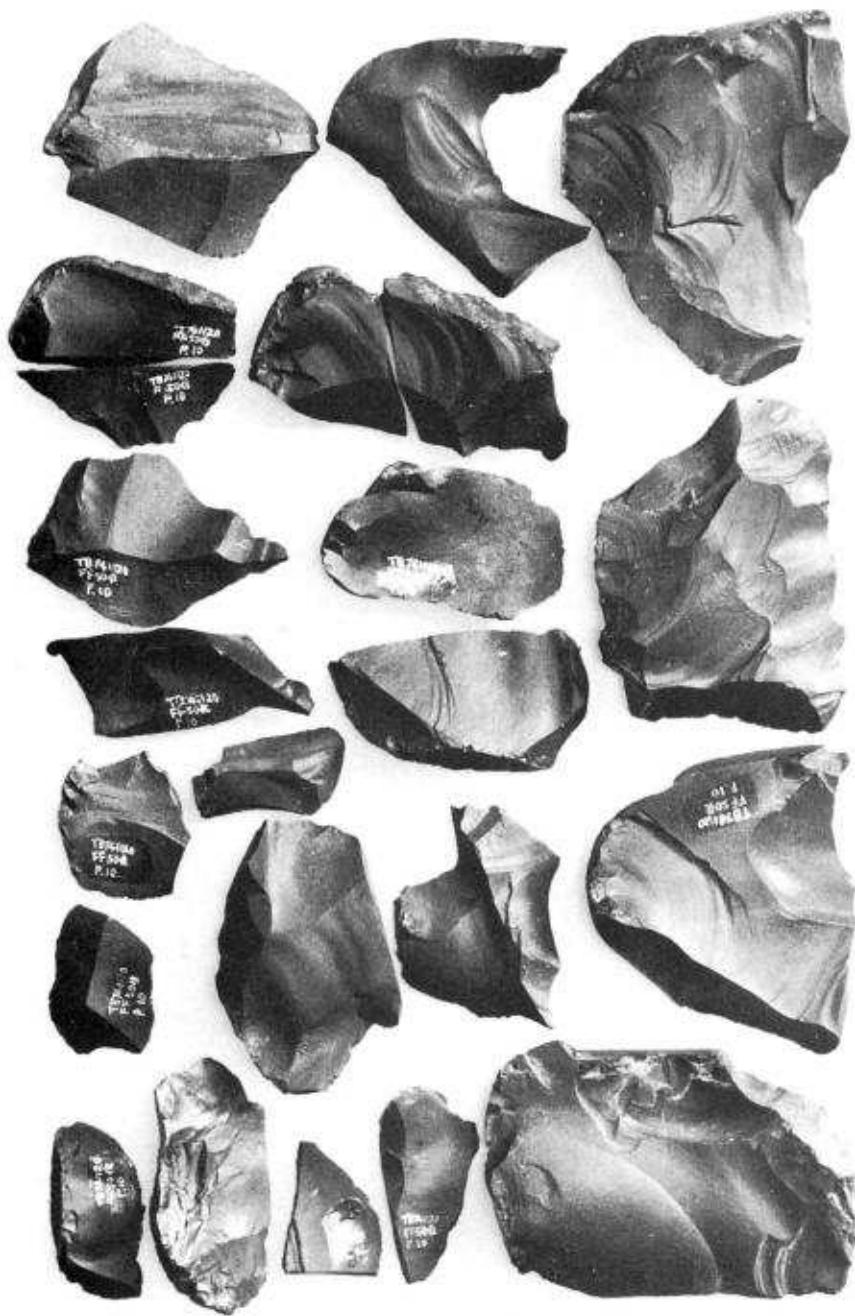


2. 同上裏面

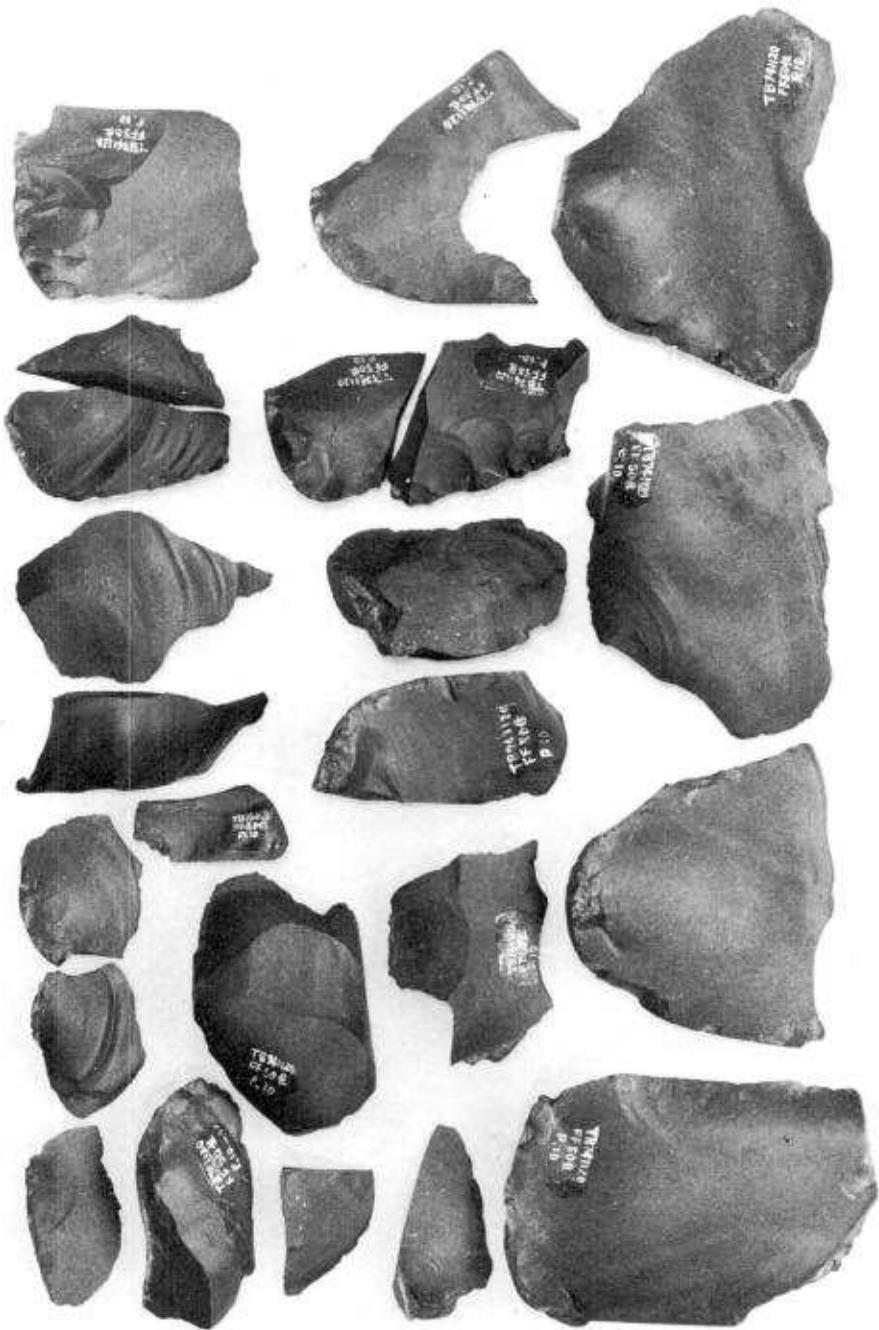


1・3・6・10.G D03住居跡 2.G E53住居跡
4.G I50住居跡 7・8・9・11・12.F G50住居跡
5.G B53グリッド 13.G G50グリッド 14.不明

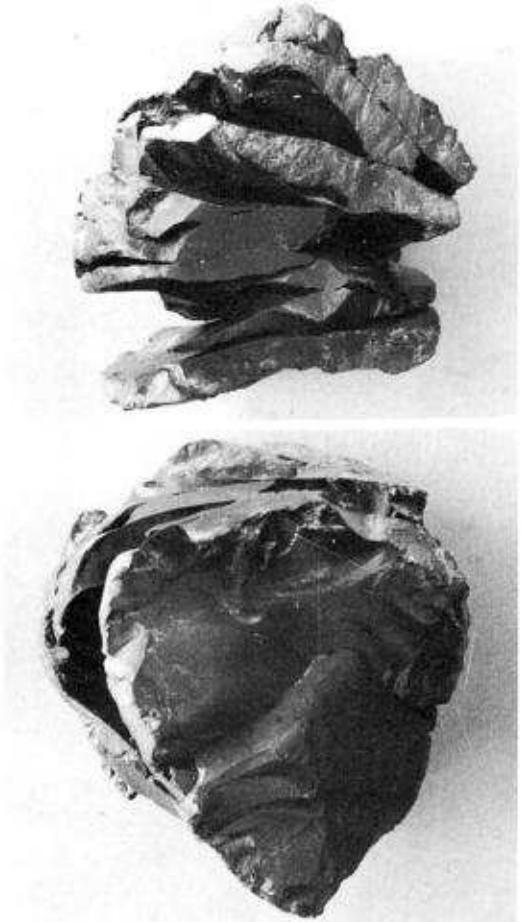
圖版22 接合資料①剔片表面(約等)



圖版23 接合資料②剝片裏面(約 $\frac{3}{4}$)

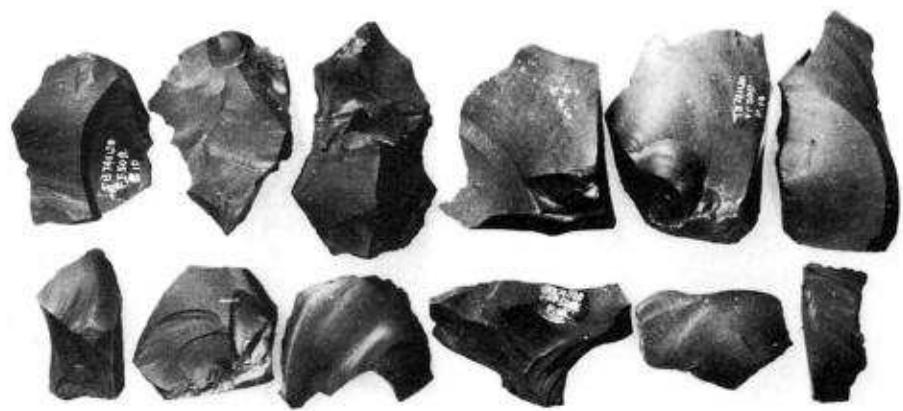


図版24 接合資料(1)(左)3)



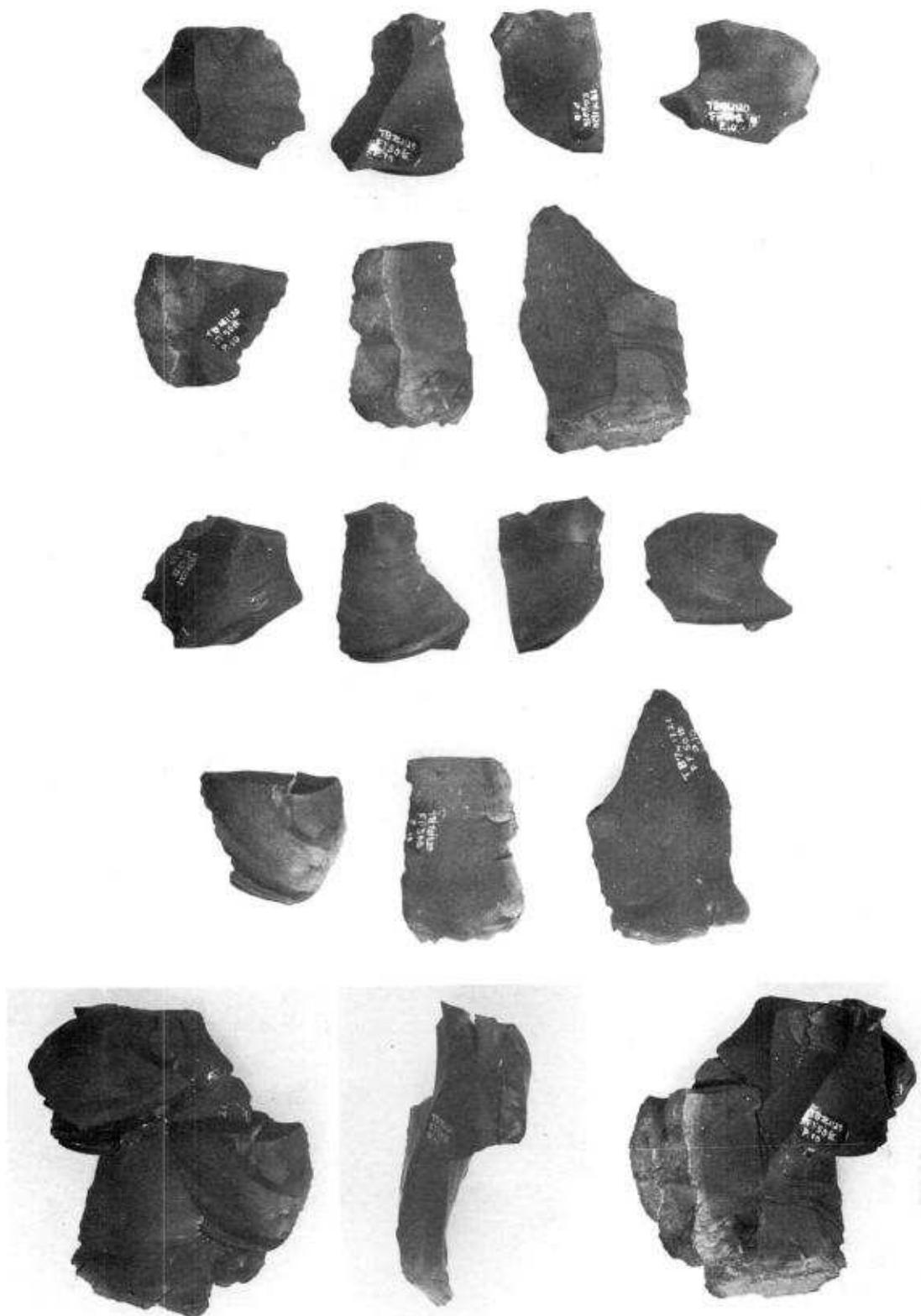
圖版25 接合資料(2) (約 $\frac{2}{3}$)



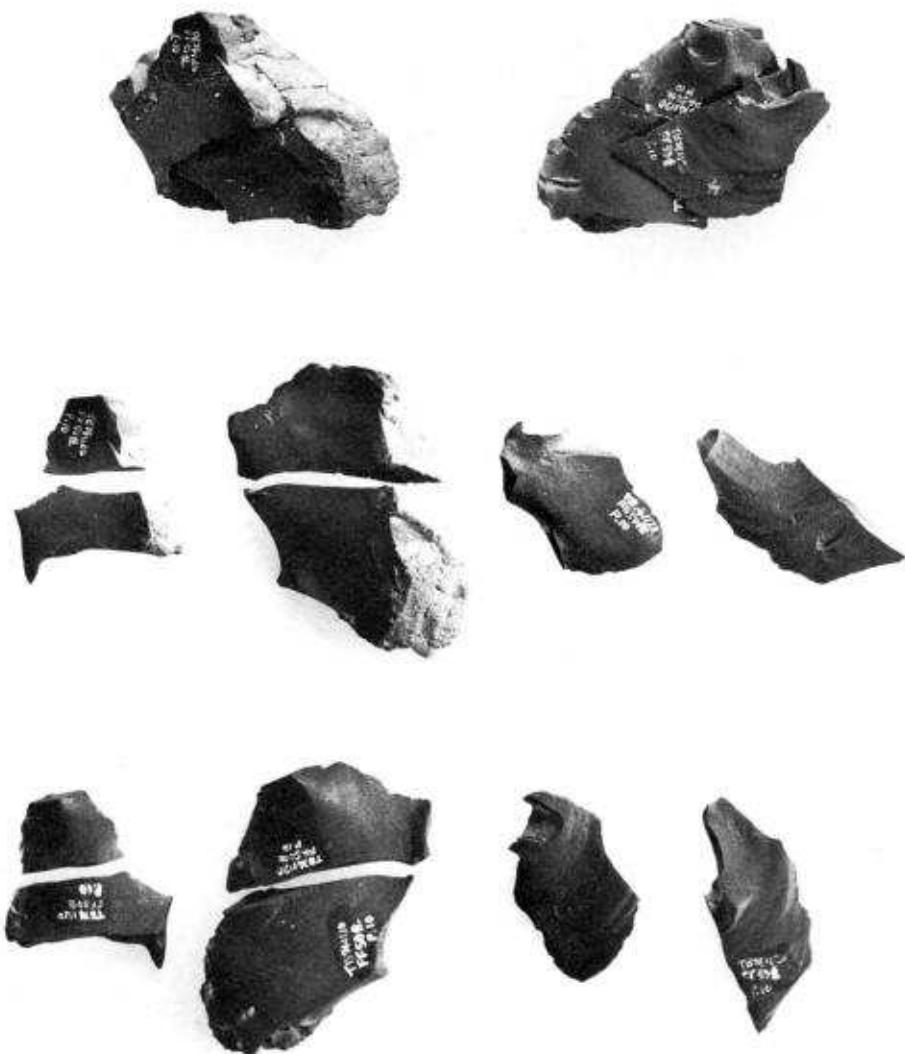


図版26 接合資料(2)C - F 打面よりの剥片(約3)

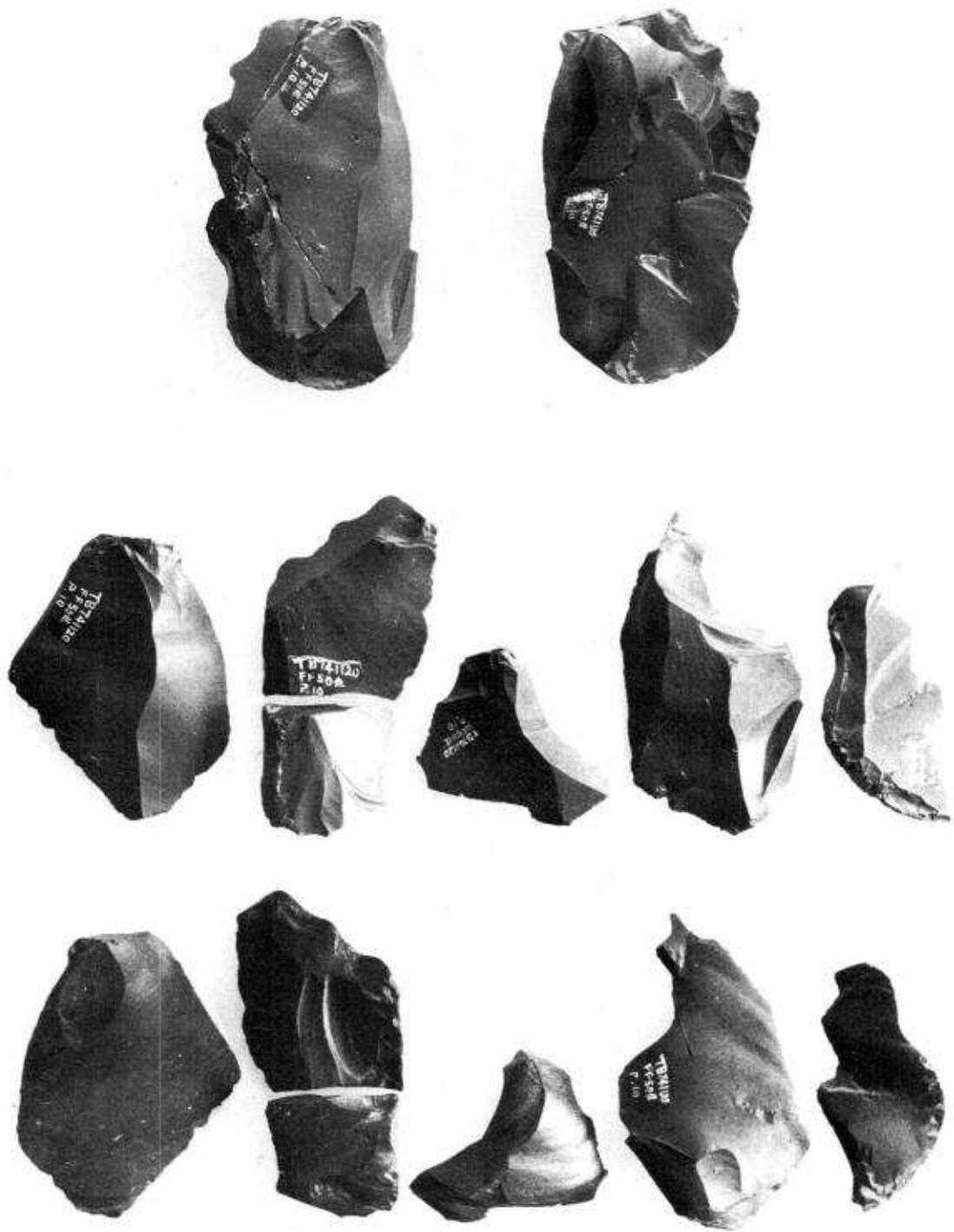




図版27 接合資料(2) A打面よりの剝片(約2)

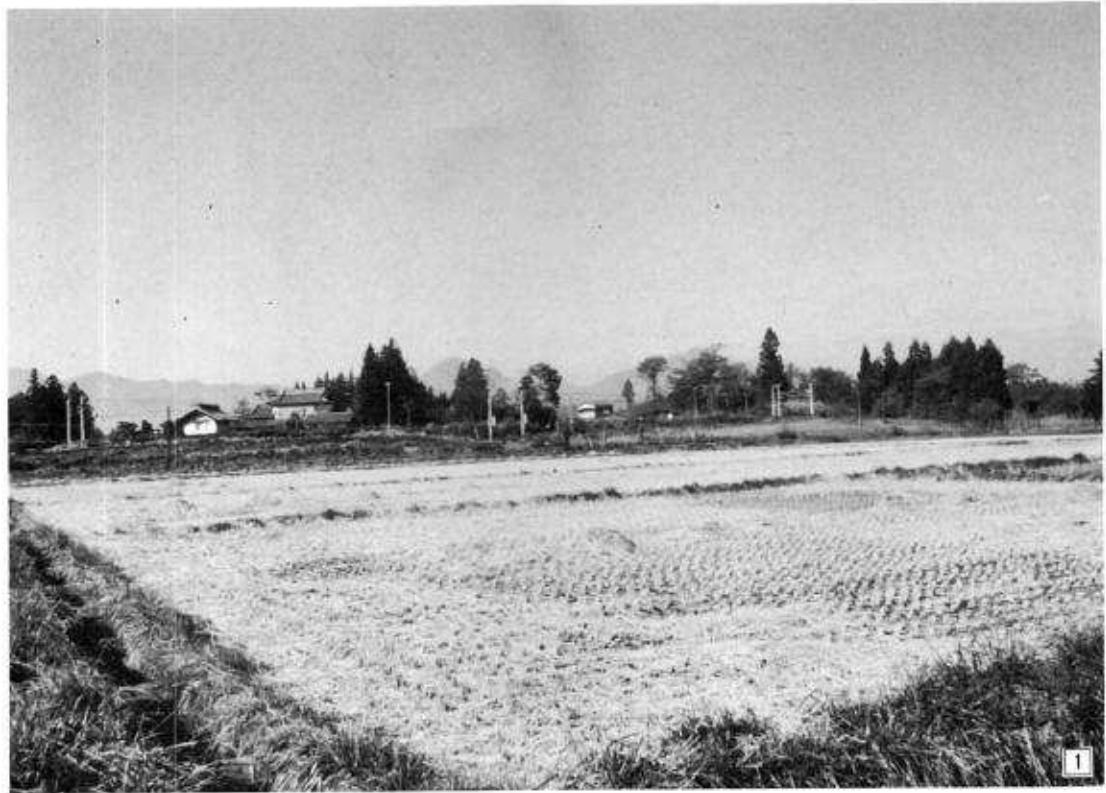


図版28 接合資料(2)B 打面よりの剥片(約 $\frac{1}{2}$)



図版29 接合資料③(約 $\frac{2}{3}$)

白 沢 遺 跡



1. 遺跡遠景(東から撮影)

2. 調査前の遺跡南微高地の状態

ブルドーザーによって土取りが行なわれた直後(昭和47年11月24日撮影)

図版1

1. 遺跡の南周辺部
(昭和37年調査の土
ノ森: 附近)(北から
撮影)



2. 遺跡南周高地全景
(北から撮影)



3. B~D ブロック調査
状況(南から撮影)



1.E、F ブロック調査状況(南から撮影)



2.調査直前の南微高地の状態(南から撮影)
(周辺跡が既に見えている)



3.同上(南から撮影)



図版 3



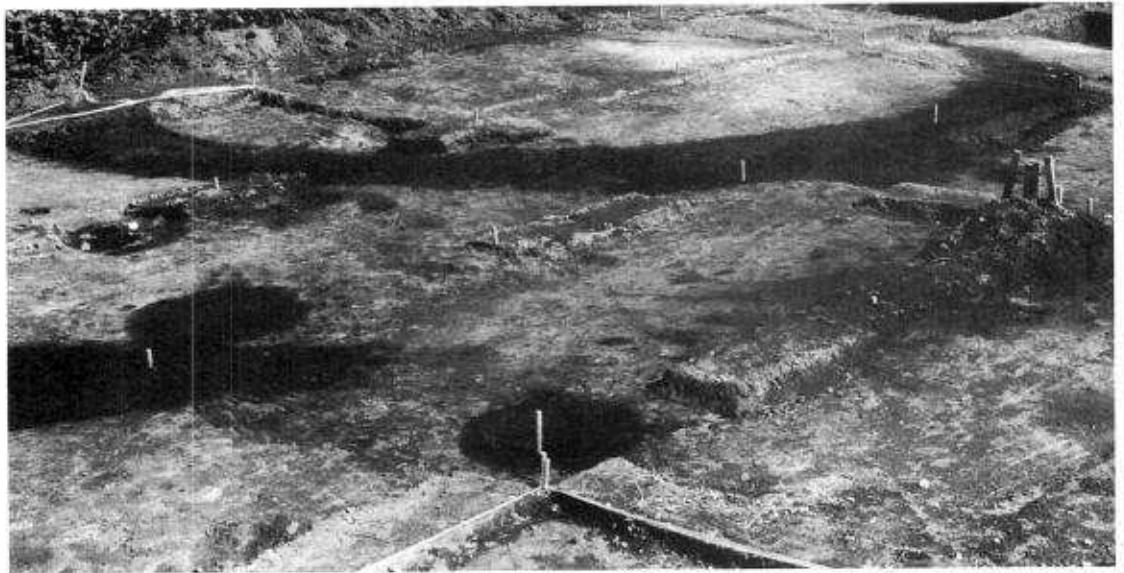
1. G G 53土層断面
(北から撮影)



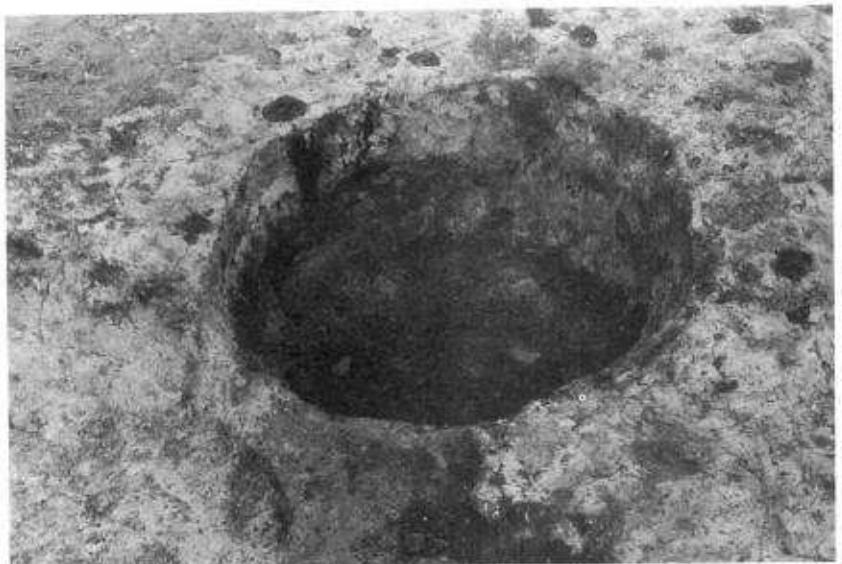
2. G G 53土層断面
(東から撮影)



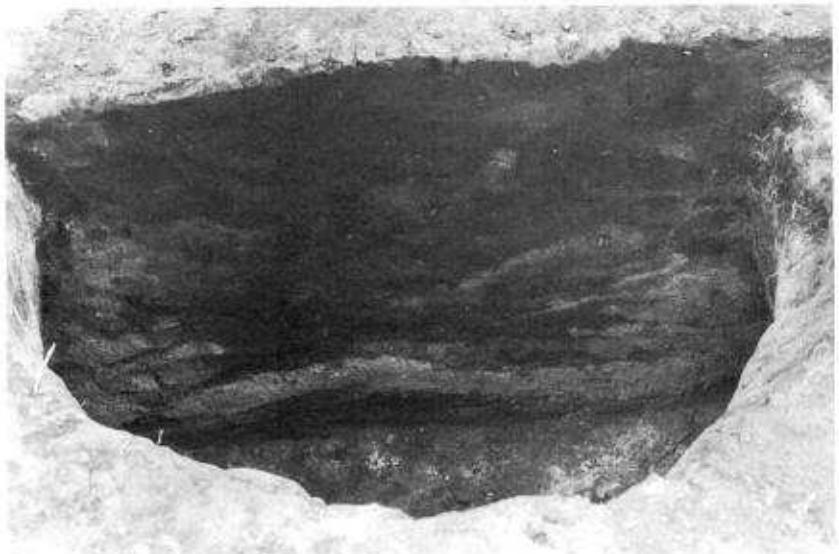
3. H E 06土層断面
(東から撮影)



1. 円形土壤検出状況
(北西から撮影)



2. HG50土壤



3. HG50土壤埋土状況



1. HG 53土壤遺物出土
状況



2. 同上(HG 3の記名は
ミス)



3. 同上土壤



1



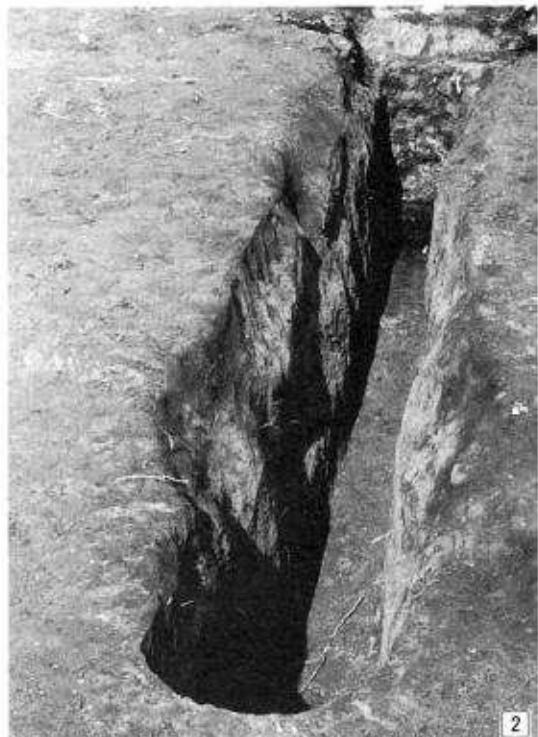
2

1.溝状土壤分布状況(北西から撮影)

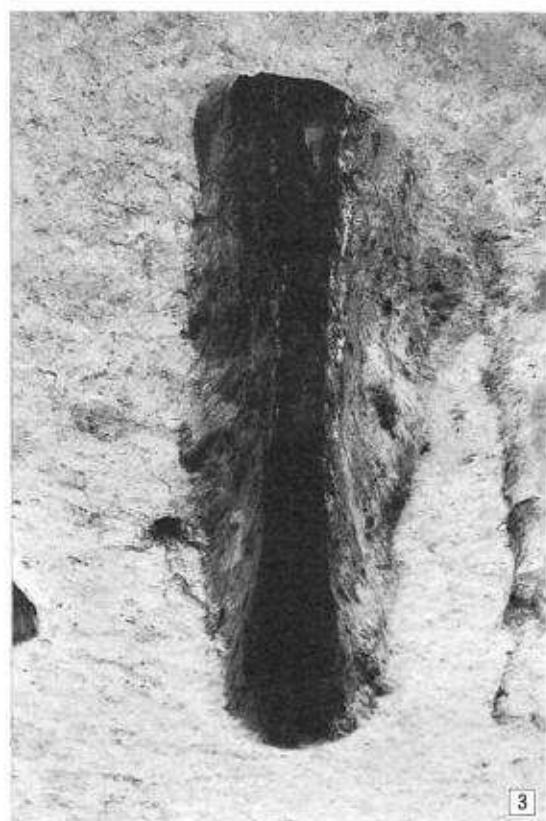
2.同上(南から撮影)



1



2



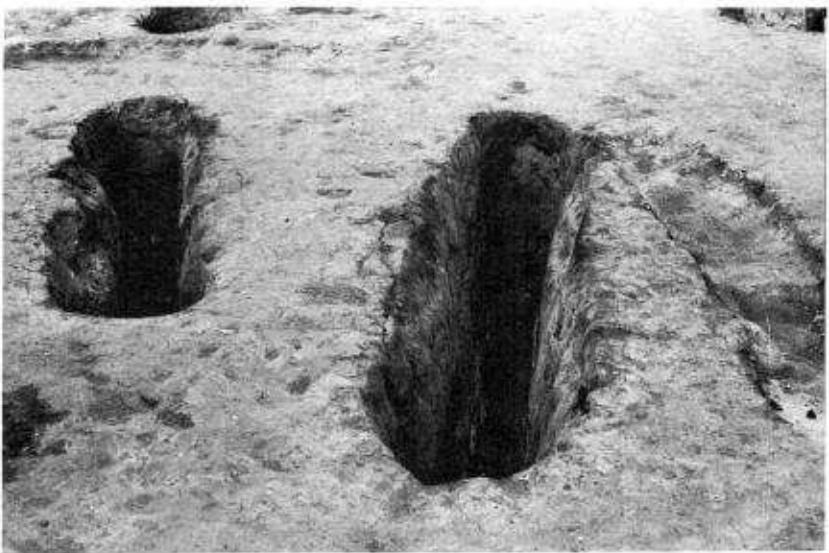
3



4

1 . G H53 土壌(北から撮影)
2 . G G53 土壌(南から撮影)
3 . G J53 土壌(南から撮影)
4 . G G56 土壌(南から撮影)

1.G J 50土壤(左)
(南から撮影)



2.左から
H A 50土壤(主体部)
G J 50土壤
G J 53土壤
(南から撮影)



3.G G 53土壤(左)
G G 56土壤(右)
(南から撮影)



図版9 溝状土壤

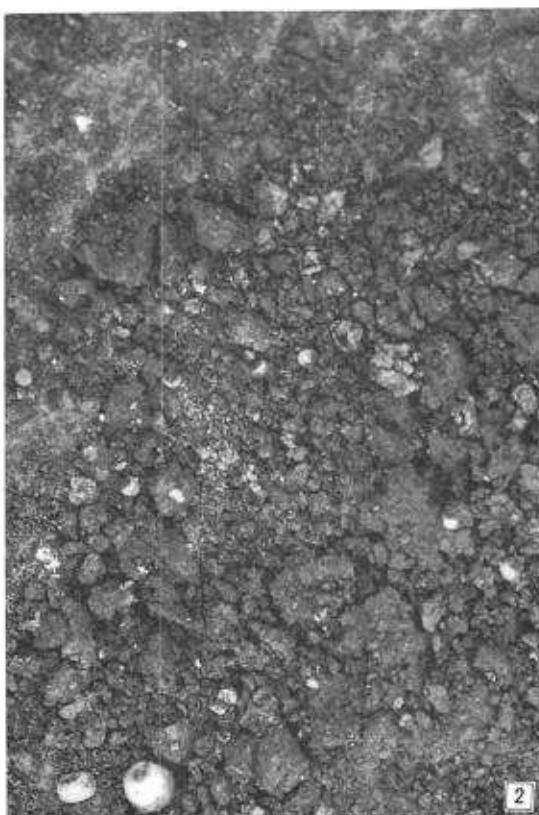


- 1 . G J 50土壤埋土断面
2 . G H 53土壤埋土断面
3 . G I 50土壤埋土断面
4 . G G 56土壤埋土断面
5 . G J 53土壤埋土断面
6 . G J 03円形周溝主体
部埋土断面

図版10 溝状土壤(1~5)埋土状況



1



2



3

1 . G J 03円形周溝

2 . G J 03円形周溝・主体部内ガラス玉出土状況

3 . G J 03円形周溝・主体部



1. H I 50円形周溝検出状況(北から撮影)

2. 円形周溝検出状況(手前はHC03周溝)



1



2

1.円形周溝全景(手前右・H150周溝、左・HH03周溝)

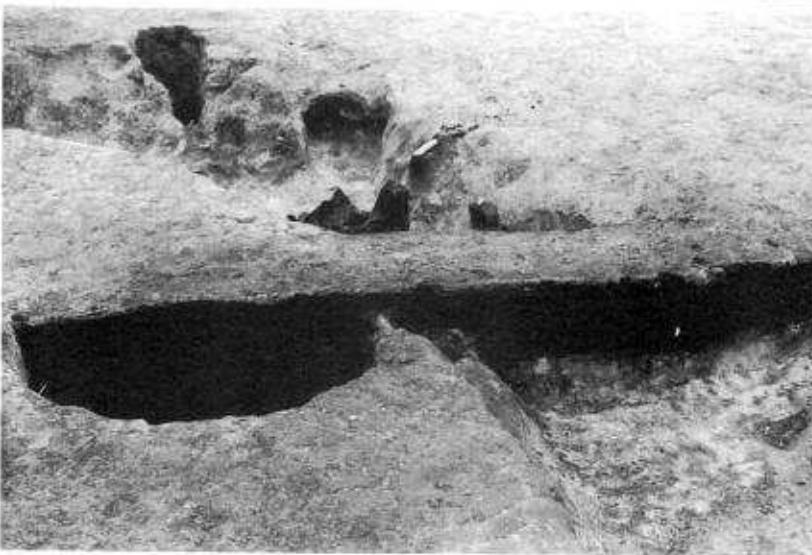
2.同上



1 . H C 03周溝全景
(東から撮影)



2 . H I 50周溝内降下火
山灰堆積状況

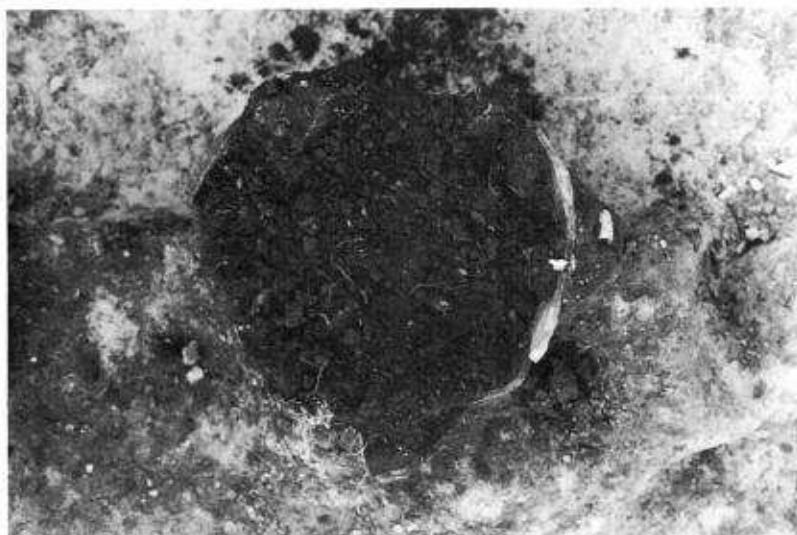


3 . H D 50土壤と H C 03
周溝の切合い状況

1. H I 50周溝内土器の
出土状況



2. 同上
(土器に近接して管
玉が出土した)



3. 同上



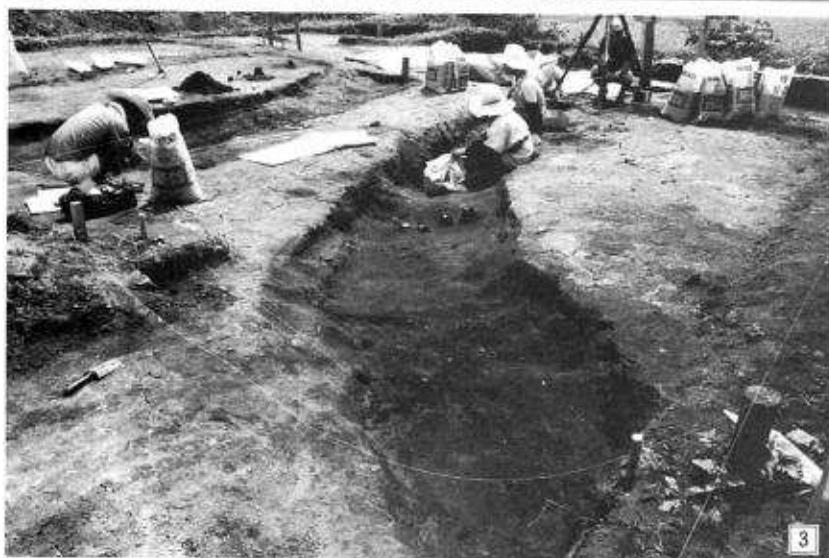
図版15 H I 50周溝遺物出土状況



1



2



3

1. H 150周溝內土器(土師器長頸壺)出土狀況
2. HC03周溝內土器片出土狀況
3. 周溝調查風景

圖版16 周溝內遺物出土狀況